
双子の狼 ？

きたまんが大王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子の狼？

【Nコード】

N3522Q

【作者名】

きたまんが大王

【あらすじ】

生まれながらに苛酷な運命をたどることになった双子の兄弟、氷介と氷也。

ふたりが欲しいもの…それは特別でも、贅沢な物でもはなかった。ただ、ふつうの幸せが、欲しかった。

「にいちちゃん。俺、人間になりてえ！」

1・生まれてはいけない子

生まれながらに苛酷な運命をたどることになった双子の兄弟、氷介と氷也。

ふたりが欲しいもの：それは特別でも、贅沢な物でもはなかった。ただ、ふつうの幸せが、欲しかった。

「にいちちゃん。俺、人間になりてえ！」

他のヒトとは、あきらかに違う一面をもった双子：守ってくれるヒトは、お互いだけだった。

「変な奴らー」 「気持ちわりーっ！」 「バーカ」 「バーカ」
「バーカ」

「にいちちゃん：オレ、もう、外行きたくねえよ……。」「
「：大丈夫だよ、心配しないで。ボクが氷也をひとりにしないから」

寒い冬の真夜中、そんなときに、双子は、生まれた。

「帝王切開だ、早くしろ！ 危険な状態だ、早く！」 「はい！」

しばらくしてヒゲづらの医師は、赤子を取り出す作業に入った。うるさいくらい産声が、ふたり分響く。

「…よし。 あ、君。 ふたりとも元気だ。 洗ってやっといてくれ。」

「はい！……きゃあああああつ！！」

「?!なんだ、どうしたんだ?!」

「せ、先生。 み…て下さ、い。 ……ほら！」

「……！！ なんとことだ…まるで…」

―ツインズ・デンジャー・ウルフ ……だな―

むかーしむかし、白銀の体毛の狼と、黄金の体毛の狼の兄弟がいました。

2匹はいつも、町の人たちを襲っていました。
ひとりの男の子はいました。

「神様、助けて…ぼく、何でもするから…！」
すると、ひとりの勇者が現れて、狼の兄弟をやっつけてくれたのです。

こうしてまた、平和が戻りましたとさ…

【幼児絵本 おおかみたいじ 作・泉白鳥】より―

夫婦の人口受精を担当した彼は、今や両親となった彼らに詫びていた。

「…こんなことになるなんて…人工授精を行った、俺の責任です。」
「まあ。 まるで、私達の子が悪い子見たいな言い方ね。」

彼は焦った。

「い、いえ！ 決して、そういう訳では…」

夫婦の静かな笑い声が響く。 その顔は、幸せそうだ。

「あなたには感謝していますよ、

ぼくらに子供が出来るなんて、夢のまた夢かと思っていましたからね。」

「そうですよ、もっと胸を張っていいんですよ？ それに…」

ふたりは、双子をみつめた。 今は静かに寝ている。

「愛する我が子の姿なんて、気にする親がどこにいるんです？」

双子は静かに、見守られながら、寝息を立てていた。

これから自分たちに襲いかかる、恐怖なんて、知らずに

その双子の誕生日の翌日、寒冷地方には人だかりができていた。

―そう、ここは寒冷地方。

その中でもここは季節問わず、ほぼ一年中雪で覆われたところだ。この地方があるのは地球上の北半球にある国、

「日本」で、ここはその「北海道」である。

「―で、その双子は、やっぱり…」

「ああ、そのとうりだ。 外見がそっくりだもの。」

「あの奥さんと夫さんもここへ引っ越してきたヒトなんですよ？」

どこから来たか、わかったもんじゃあ――あ！ 出て来た出て来た……」

我先にと家へ帰る人たちを見て、夫はため息をついた。

「――やれやれ。もう噂が立ってるみたいだ、全く……どうする？」

奥さんは、顔色一つ変えずに言う。

「決まっているじゃない。

わたしたちが、何がなんでも、この子たちを守ってあげればいいわ？」

「……そうだな。」

その両親は我が子を抱え、幸せそうな顔で、空っぽになった雪道を歩いて行った。

「……はあ、どうして皆隠れるんだろうなあ。こんなに可愛いのに

……」

「ふふっ。

つまりこの子たちの可愛さを知っているのは、わたしたちだけってことね。」

「え？ ……ははは、そーだな。おっ、起こしちゃったか。」

それを聞くと、妻は我が子を包んだ布で、その顔を隠した。

「？」 「ふふ…… 綺麗な瞳だこと……」

『あなた。 お父様。 ……あなたたちに、そっくりですよ。』

母親となった彼女は、暗い空を見上げながら、過去に思いをはせていた。

：まだ、誰も知らない場所に、銀髪に太陽の瞳の少年と、黒水晶のような、美しい髪と瞳をした少年がいた。

銀髪の少年は、白いクッションに腰かけながら言った。

「それで：その子達には、やはりあれが含まれていることがわかったんだねえ？」

「：はい。 そのようです、ですが――！」

銀髪の子は、細く美しい手で先の言葉をさえぎった。

「言い訳は聞かないさ。 僕が言いたいのはただひとつ、……殺せ。」

「…………えっ……？」

黒水晶の子が、信じられない言葉を耳にしたような顔をした。

「いま、何と……」

「聞こえなかったのか？」

鈍い君のためにもう一度言っただげるよ、双子を殺せ。 今すぐにね？」

「そんな！ あの双子は、まだほんの赤ん坊ですよ？！ そんな、むごい――」

銀髪の子はいら立って振り返る。

「僕の言っていることが、どうしてわからないのさ?!

そうやって情に流されて、

結局やられてしまうお馬鹿な人間どもを、腐るほど見てきたよ。

カノン・ルーク! 君までも、そうなってしまふのかいっ?!

あのふたりは危険だよ! だから殺セと言っているんだよ?!

殺セ、殺セ、殺セ、殺セ! 殺――!!」

「やめないか、ルーテ!」 「!」

彼と瓜二つの、月の輝きの瞳をもつ少年がいた。

「に、兄さん…」

「命を奪うかどうかは、この僕が決めることだ。

カノンの役目を考えてみれば、命を大切に思う気持ちだが、わかるはずだろう?」

そして君にも、そしてこの僕にさえ、勝手に命を奪っていい権利は、無い!」

「…ま、まあね。 わかっているさ、そんなこと。

でも… ふふっ。 なんだか、久しぶりに…」

そのとき、あきらかにルーテの太陽の瞳がきらめいた。

「面白そうじゃないか!」

「ヒトは、自らの命を捨てることのできる動物だ。

しかし、それには大きな勇気があるものだ。

愛するヒトを生かすため―、そう思っても命を捨てられないのは、よっぽど自分の命の方が大切か、

そのヒトがそれほど大切なわけでもないからだろう。

では、本当に大切なヒトは、誰なのだろうか――？」

―題名の無い手帳、「????」の手帳より―

暗い部屋で、ルーテは誰かが書いた、黒い手帳を見つけた。

「大切なヒト？　いないな、そんなもの。　僕には今、大切な仕事
ができたから――。」

長い銀髪をひるがえして、その少年は元の場所に手帳を放った。
続きの文に、気づかずに――。

北海道中部に立つ、息吹家の家：

「髪の色も、瞳の色も、ぼくらとは違うなあ……きれいな目をしてい
る……」

父親が、ケーキを頬張る双子の頭をなでた。

まだ、やっと言葉をすらすら話せるようになるくらいの歳だ。

「それはそうよ、私とあなたの子ですもの。　ね？　氷介、氷也！」

ふたりの名前は氷介と氷也。

ふたりの生まれた明け方には、雪がしんしんと降ってた。

そして、誕生日の今日も。

両親はこの地方によくある髪と瞳の色で、

父親は紺色の髪に紺色の丸い目、母親は紫の髪に青の細い垂れ目。

我が子は、兄弟ともども済んだ緑の目、兄は垂れ目、弟はつり目だ。

そして、【生まれてはいけない髪の色】をしていた……

「ふたりももう4歳だ。 来年には、幼稚園だな。」

「ええ…。」

でも、心配ねえ…氷介も氷也も、やんちゃで明るい普通の4歳児なのに…」

母親は双子が楽しそうに話す姿を見て、胸が痛んだ。

「雪江…」

父親・柚彦ゆずひこは母親の方を抱いて、語りかけた。
母親の目には、涙が流れている。

「可哀そう…。」

この地方の人たちは、くだらない昔話を信じているんだわ…。
どうして？ 外を歩くだけで… 外見だけで差別されるなんて！
」

「…大丈夫さ。」

そのときは、ぼくらがそばにいてあげればいい、そうだろう？
ぼくらがいるかぎり、氷介と氷也は傷付けさせないよ。」

「あなた…」

「わー！ とーちゃんとかーちゃんくっ付いてるー！」

氷也が小さな指で両親をさして、ニヤニヤと笑っている。
氷介はクスクスと笑い、澄ました顔で言った。

「ひょーや、わかってないなあ。 おとーさんはおかーさんが好きなんだよお。」

「ひよ、氷介！ もう、ませたこと言ってえー…」

双子はまた、言い争いのように話し始めた。

「幼稚園…明日だっけな？」 「ええ…上手くいけばいいわね」

「大丈夫さ、ぼくらの子だもの。」

『本当に、あなたはわたしという存在を疑いもせずに、ただ、愛してくれるのね…。』

でも…わたしの正体を知ったら、それでもあなたは、わたしを愛してくれるかしら？』

吹雪の吹き荒れる中を、ひとりの少年が立っていた。

見つめる先には、あの双子の家があった。

「これで4回目の誕生日…まあ…だ何も起こらないね…つまらない。」

―朝… 吹雪はとっくにやんでいた。

2階の窓から朝日が差し込み、ベッドで寝ている氷也の顔の辺りに当たった。

「ううー…っ」

俺は眩しいと言わんばかりに、掛け布団の中に潜る。

『もうひと眠りしよう…』

と、そこにペタペタと足音が近づき、ベットのの上に乗って来るのがわかった。

ぼさぼさの前髪の上に、緑の垂れた目が見える。

「ん…にちゃん…？」

「うん。氷也、起きなよお。」

今日幼稚園の体験に行くんだって、ずっと前からおとーさんが言ってたよ？」

『あ、そうか、今日だったなあ……チェツ。』

「…いやだ。行きたくねえ。」 「え…、何で？ あ…どこか、

具合でも悪いの??」

兄ちゃんはバカだ。真面目に心配してやがる。

俺はしかめっ面をして、そっぽを向いた。

「前に公園に遊びに行ったとき、そこにいたガキらに言われたこと、忘れたのか…？」

俺は身体を起こして、兄ちゃんの顔を見ずに向き合った。

「え…あ、ああ…覚えてるよ。」

俺らと同じくらいの子が、みんな言ってたろーが。

3歳のとき、初めて公園へ出かけて、自分たちが他人と違うことを

知った。

「怖いっ」 「化けもんだ！」 「あっち行け！」 「気持ち悪い」

他にも数えきれないくらいの暴言が、後から後からふたりの脳裏によみがえった。

氷也は肩を震わせていた。 近くにいた、氷介の腕を掴んで。

「だから、行きたくない……。だからにちゃんも行くな！」

「氷也：気持ちはわかるけど、このまま家にいても、つまらないだけだろ？」

熱があるわけでもないし、ボクもいるんだから：ね？

大丈夫だよ、だから：泣かないで？」

とたんに氷也はハッとして、自分から掴んできたのに、氷介の腕を振り払った。

その顔は、怒りと恥で赤くなっていた。

「はあっ?! ばっ、バツカじゃねーの! べ、別に、泣いてなんかねーし!

にい、ちゃんの、ぶあーっ! かつ!! アホーッ!

そう言いながら氷也はベットを飛び出し、氷介を置いて行ってしまった。

氷介はその後ろ姿を、にこにこしながら見送った。

『ふふっ。』

氷也って泣き虫だけど、それを認めたがらないから、扱いが単純

なんだよね。」

「さてっ、ボクも行かないとなー。」

ペタペタと廊下を歩いてリビングに着くころには、
目玉焼きトーストが出来上がっていた。

氷也はもうがつついて、口の中を火傷したらしく、むせていた。

「おはよう、氷介。」 「おっ、おはよう。」 「おはよう。お
とうさん、おかあさん。」

氷介は、眩しいくらいの笑顔であいさつした。

「…。」 氷也、大丈夫？ 「ケホっ！ ああ…：何とかなってる」
「そう？ よかったあ。」 「かもしれない。」
「どっちなのさー！」 「さあ、どっちでしょう？」

氷也は氷介を困らせようと、いたずらっぽい笑みを作る。
今日も変わらぬ、くだらないお喋りがくり返された。

「ふたりとも。早く食べないと時間に遅れるぞー！」
「え？ …：あああっ！！ にいちゃんまたオレを騙したな！」
「えー？ ボクは何も騙したわけじゃないよ？」
氷也が勝手に布団から出てきたただけだもの。」

氷介は冷静にすましていた。 そんな態度が氷也をあおる。

「くっそー、覚えとけよ！」

「ほらほら、ケンカしてると、どんどん時間は過ぎて行くわよー？」
「はぁーい。 ほら、氷也早く行こう？」 「ええーっ?! マジ
かよ……」

氷也はなにやらブツブツと不満を述べていたが、

氷介から手渡された服を見て、そっちに興味が移った。

それは、胸のところに氷介には緑色、氷也にはオレンジの

【I】の刺繍の付いた、真新しいジャージだった。

刺繍のところは、母さんが縫ってくれたのだろう。

「これ、なんだ？」

「ちよっと遅れちゃったけど、誕生日プレゼントだって。 わー、
あったかいよ！」

氷介の嬉しそうな顔を見て、つられて氷也も羽織ってみる。
サイズは、ぴったりだった。

「……あ。 ほんとだ」 「ふふふ、氷也が寒がりなせいだね☆」

ははは、と愉快そうに氷介は笑った。

氷也は自分の弱点を突かれて、良い氣でいるわけないが。

「最後の☆はなんだ！ ☆は！」 「別に。 さっ、行こ行こ！」

氷介はすぐに駆けだしたが、掴んでいた手がするりと抜けた。

氷也はうつむいていて、動こうとしない。

「? どうしたの、氷也。 早く行かなきゃ。」 「…兄ちゃんは、
すげーな。」

「え……?」

氷也はうつむいたまま、震えた声で言った。

「オレと違って怖くないんだな、悪口言われるの。…っ、すげーなっ！」

顔を上げた氷也は、無理やり笑っているようだ。

氷也にはもう一つ弱点があった。強がりのくせに、人見知りで、泣き虫。

それは、外見によるコンプレックスからなっている。

「氷也…」 「なんでだよ。なんでなんだよ…」

氷介は自分の体の向きをかえて、自分の弟に向き合った。

「違うよ。ボクだって、怖くないわけないよ？」

「嘘だ。…じゃあ、何でにちゃんは行こうって思えるんだ？」

「うーん…：わかんないや」 「おいっ！」

氷也の暗い気持ち吹っ切れ、

スッ、パーン！ と、ハリセンのいい音が響く。

「いたたた…ふふっ、いつもの氷也だ。」

氷介は元気になった氷也を見上げて、嬉しそうに笑う。

「うるさいっ！ いーか？」

オレと一緒に行って欲しいなら、オレのそばを離れんなよ！

別にただ、にいちちゃんが迷子にならないよーにするためだからな？！

ボーっとしてすぐどっか行っちゃうんだからよーっ!!」

「…そんな顔してるんじゃ、ボクにいてほしいって行ってるみたい
にー」

「うるさあーっ!っ!! 付いてってやんねーぞっ!」

氷也は続きの言葉をかき消そうと、真っ赤になって声を張り上げた。
氷介は迷惑そうに、両耳をふさぐ。

「はいはい。 お願いしまーす。」

氷介は氷也の手を再度握ると、今度はふたりで駆けだした。
おそろいの靴をはくと、玄関で両親を待った。

「はーやーくうー!」

氷也が黙って手を握ってくる中、氷介は元気に、両親に手を振った。

「まあ…! はいはい、今行きますよー。」 「……っ、」

氷也はそんな氷介を見て、一層強く手を握る。
しばらくして、氷介の手は軽く握り返してきた。

氷介は弟の顔をのぞき込んで、「大丈夫だよ。」とでも言うように
笑う。

「ーさあ、準備オーケーだ、出発するぞー!」

「はーいっ!」 「…うん」

家族は車に乗り込むと、両親は前の2席、双子は後ろの2席に座っ
た。

突然氷也が、氷介の服のすそをつかんできた。

「…なあ、オイ。」 「ん？ どうしたの、氷也？」
「ぜってーどっかフラフラ遠くに行くんじゃねーぞ！！」
「氷也…ふふっ、わかってるって。 どこにも行かないさ。
対、ね？」 絶

車はしばらく進むと、2羽の白い白鳥のアーチが見えてきた。
どうやらここが門らしい。

氷介は車の窓を開けると、氷也とともに身を乗り出す。

「うわぁ…」 「何だ？ 鳥みたいだなぁ…」

「さあて！ ふたりとも、ここが白鳥幼稚園だ！」

キキィッ。 車は門の前で止まった。

「ここが…」 「はくちよー、よーちえん…」

白く美しい建物が、一台の車が見下ろしていた。
門の下には、染めた茶髪の、長身の男が立っていた。

「？ あなたは…ああ、園長さんですね。

電話の、息吹柚彦です。 はじめまして、えーと…」

「鋼雅^{こうが} 白鳥^{はくちよう}と言います。 こちらこそ、よろしく…」

細い目をした、若く美しい男だったが、
その表情は氷介と氷也には、なぜか良い感じがしなかった。
ふたりは両親の足にひっ付いて、動かずにお互いを見ていた。
しっかり、髪をなでつけながら。

『どんな人なんだろう…。 綺麗な人だけど、信じちゃいけない気

がする…』

『にいちゃん　…絶対離れんなよ、絶対!!』

「―おや？　君たちが、見学に来てくれた天使たちかな？」

「は、はあ？　誰が、天使だっつーの。」　「こらっ！」

初めてにもかかわらず生意気な氷也と、

それを叱る氷介に、にっこりと微笑み返す鋼雅。

氷也がちよつと引いたのを、氷介は見逃さなかった。

『うわぁ…何コイツ、きんも…。』　『あ、あはは、は…』

「私の幼稚園に来てくれる良い子たちは、皆天使。

それがこの幼稚園が、幼児たちに【悪善幼稚園】と呼ばれる由来ですよ。」

「おぜんようちえんっ、て…」

意味がわからない。

「さあさあ、親御さん方はこちらで説明を…君たちは、」

目会ったときに、背筋が凍るような冷気が走った。

冷たい、なにか考えているような目だった。

しかし、すぐに微笑みで溶けていく…。

「こちらで、私の天使たちに紹介しよう。」　「あ…、はい。」

「……………」

「氷介、氷也。　いい子にしてるのよ？　じゃあ、後でね。」

「では、こちらへ…」

ふたりは、顔の見えないフードをかぶった青年に連れて行かれた。

「かあちゃ…！」 「安心したまえ。 こっちだ。」

双子は優しく手を取られ、園内に入って行く。

「―ああ、さっきの男かね？ 今月から入った若者だ。
昔の事故で顔を見せたくないと言っていて、
顔は見たことは無いが、裏方の仕事をしているよ。」

水介は両親を心配してるのか、さっきの青年のことばかり聞いていた。

「でも、信頼できるヒト？ 顔も知らないんでしょう？？」

「ハハハハッ。 心配しているのか？」

それは美しい心だ。 でも、心配はいらないよ。

あいつは【不死鳥】と名乗っていて、少々不気味な奴かもしれん。
だが、根はとても親切で、優しいやつだ。」

「へえ、そうなんですか…ああ、よかったあ。」 「すぐ信じる
なよ…」

そうゆう性格なのだから、致し方あるまい。

『つーか、見るからに不気味すぎるけどな。』

「さあ着いたよ、この部屋だ。」

この幼稚園は新しいから、天使たちの数は少ない。
だから、この部屋に皆がいるよ。」

ガチャリと戸が開き、
中にはたくさんのおもちゃと、たくさんと同じ歳ぐらいの子供がいる。

双子はまだドアの外にいた。
パン、パン！

「私の美しい天使たちよ、静粛に！
今日は喜ばしいことに、この幼稚園を見学に来た子がふたりいる。
仲良くしてあげるように♪ それでは、入ってもらおう！」

氷介は氷也の手を握り返し、ふたりでうなずくと、そおーっと、中に入った。

とたんに園児たちは、コソコソと近くにいた子と内緒話を始めた。

『オレ、こーゆーの…嫌いだ。』 『うん…ボクも、嫌だ。』

「紹介しよう、ふたりの名前は、えー…、あ！
すまない、まだ聞いてなかったね。では、自己紹介をお願いします
よう！」

「ざけんな！ 図々しいにもほどがあるぞ！」

「まあまあ。 あ、ボクらは4歳で、息吹 氷介って言います。
こっちにいるのは双子の弟です。 今日一日、よ、よろしく、お
願います。」

ゆっくり落ち着いて言った後、氷也に目で合図を送る氷介。

「……お、オレは、ひょうや…息吹、氷也…」

『あちゃー…氷也、あがっちゃってる…』

パチパチパチパチ！　ちよっとビビった。

園児たちがニコニコしながら、ふたりに拍手をしてきたのだ。

「ハイ！　素晴らしい挨拶だったね！

このあとは自由時間だ、好きに遊んで、オーケーだよ♪　では、解散！」

カラン、コローン、カラン、コローン。

どこからか鐘が鳴り、園児たちがふたりを園庭へと引っばった。

「うわあっ」　「え？　お、おいっ！」　「おいでよ、遊ぼう♪」

それは、あまりにも突然だった。　だから氷也も反応しきれず

―　蹴り飛ばされた。

氷介はその場で倒れたまま、うずくまっている。

「いつ、てー…何しやがんだよ！」　「お前…公園で見たことあるぞ。」

「はあ？　公園って…」

もう笑っていない園児たちの中から、青い髪で水色の目をした子が出てきた。

「おれ、冬紀。　お前らのこと、化けもんつつったやつだよっ！」

サッ。　グッ、ズサアアー…ッ！！

冬紀は、氷也の背中を強く蹴ろうとしたが、難なくかわされる。

勝ち誇ったように、ニヤツと笑う氷也。

「そんなもんが当たるかよ！」 「ううっ…みんなこいつらに何か言ってやれ！」

「えっ？ えーと…そんなら、おらたちやが…」

後ろから青紫の髪をした子が2人出てきて、5歳くらいの背の高い子が静かに言った。

「父ちゃんが昔話を話してくれる時、よく言ってたべ。」 「な、何て…？」

腹を押さえながら起き上った氷介が言う。

「白い髪の毛と金色の髪の毛の子は、【生まれちゃーまいねー狼の子】だべ？」

「…えっ？」

ふたりの心臓が、締め付けられるような感じがした。

どうしてだかは、わからない。 3歳くらいの背の低い子が、たどたどしく言う。

「君たち、生まれちゃいげねー子なんだべ？」

昔、君たちみたいな狼の兄弟が、

人間に化けてたくさんの人を殺したって、父ちゃんと母ちゃんに聞いたっぺ」

「ボクら…違うよ、そんなの…知らない」

「ちがう？ そんなことないべ、だって君たちはー」

「うるせえー！ーっ！ー！ グダグダうぜエこと言ってんじゃねえーよ！ー！」

いきなり大声を出して、みんなの視線は氷也に戻った。その目には、涙。

『どうして、どうしてなんだよ!!　なんで―』

「…ちっ。うるさいなあっ!!　皆、蹴ろーぜ。」　「で、でも鋼雅先生が…」

「へーきへーき!　今は鏡で自分のカッコよさに浸ってるとこだからさ!」

気楽に言う冬樹の発言は、氷也に不快感を与えた。

「…きも…」　「お前は黙ってろ!」　「えっ…、おい!!―」

氷也は自分の身を守ろうと、頭を抱えてしゃがんだ。

―ドカツ、ドツ、ドカツ!!

蹴られる音が、何度も聞こえる。なのに、…痛みを感じない…??　蹴られてる声が、しゃがんで目を閉じたままの氷也に聞こえた。

「ううっ…ふううっ…痛くないよ、ぜんっぜん…痛くもかゆくもないね!」

「ん?　なんだか園庭が騒がしいなあ、天使たちがどうかしたのかな?」

鋼雅は大きな鏡の前がら、立ち去った。

鋼雅の姿に冬紀が早く気づき、みんなで蹴っていた足をとめた。

「あっ、ヤバい！ みんな、鋼雅先生が来たぞ！！」

「え？！ いつもより早くね？！」 「ま、まずいよ！」

双子が驚くくらいにみんなは散らばり、その辺の遊具で遊び始めた。

「な、何だっ、たんだ…？」 「う、う…」 「あ！ にいちゃん、腕…」 「え？」

氷介の腕からは、蹴られたせいか血が出ていた。
他の場所にも、深い傷が付いている。

「いたっ、たあ…」 「わりい。 オレが怒鳴ったせいで、いつせいに蹴られて…」

「い、いいよお。 ボクが前に出ただけだし、大丈夫だよ？」

あ、そうだ！ 氷也は大丈夫だった？ 怪我してない？」

「…っ、バカッ！！ 自分の方を心配しろよ！！」

氷也はいつもこのバカ性格にあきれる。

氷介は自分より誰かを大切にするタイプだが、
そのために自分を犠牲にするので、時々こうなる。

「えー？ でも、氷也の方ばっか気になっちゃうんだよ。 どして
てだろ？」

「…知るか！！」

「それより…どうしてみんな、慌てたんだろう？」

「チクられると思ったんじゃないの?!」

あーゆう奴らはいつもそうだ！ 立場が悪くなるとすぐ逃げる！」

「でもそれにしては、怖がりすぎじゃー」

「どうしたのかな？」

ハッ！ 驚いて振り返ると…鋼雅がそこに立ってた。

氷介の傷を見た途端に、鋼雅の微笑みは驚きに変わる。

「何と、おおっ！ どうしたのだ、傷だらけではないか…。

大丈夫かい？ すぐに手当てを…」

それを聞いて氷也が、鋼雅の伸ばした手を弾き返した。

「にいちゃんに触るな！ オレ、お前が嫌いだっ!!」

さらに驚く鋼雅と、その腫れた手を見て、あわてて氷介が付け加える。

「せ、先生大丈夫です！ これくらいなら、舐めとけば何とかかなり
ますから…」

「な、舐めておく?？」

鋼雅は余計に首をかしげる。

「はあ？ そんなこともしらねーの?! これは田舎流の…」

「あ、いいえ！ えと…応急処置なんです…」

「氷介くん。」 「いたっ、た…っ」

鋼雅は氷介の傷に触れていった。 氷介が顔をしかめるのに気が付

かないらしい。

「これはね、唾を付けていれどにかなる怪我では無いよ？
おお、可哀そうに… この傷は一体…どうしたと言うんだね？」
「えっ。 それは、その…」

水介はとっさに園児たちの方を見た。

みんな慌てて顔をそらす、鋼雅がそれに気づいた。

「―ほおう… 誰だい？ 怒らないから、正直に言ってごらん。」

『…絶対怒る気満々だよな。』 『うん…。』 『ふっ、ざまあみろ。』

鋼雅がみんなを見渡して、ひとり震える冬紀に近づいた。
冬紀は小さな悲鳴を上げる。

「先生…おれ、な、何も…」 「…まあ、た、君かい？ 全く…君はどうして…」

「ゴメンなさい…な、何もしてません！ おれは、おれは…」

冬紀は震えながら涙を流す。 鋼雅の笑みは深くなり―

「違います！」

みんなが一斉に、ボクの方を向いた。

「……なに？ 今、何といったんだね？」 「冬紀くんは…、何も

してません。」

「はあっ?! おい兄ちゃん!」 「氷也は黙っててよおっ!」

氷也が驚いてるのがわかった。

そして、冬紀くんはもつと驚いてるのも――

鋼雅先生が、ボクと氷也の近くに歩み寄る。

「ほお…おもしろい…では、聞こう。君のその傷は、一体どうして付いたんだ?」

「それは――」

『どうしよう、何て言えば… あれ? あれは…サッカーボールだ。…そうだ!』

「氷也と…えー、サッカーをしてたからです。」

「……なに? …サッカー、か。」

ふむ、たしかにスライディングなどで、怪我をする確率は大きい。

しかし! そこまで怪我を負うほど、

強いキック力があるようには見えないけどね。」

鋼雅先生はまた笑った。

『うう…た、たしかにサッカーなんてやったこともないし、

そもそもボクが病弱だから、スポーツなんてやったこと無いけど

…』

「そんじゃーわかればいいんだな?」

『え…? 氷也?!』

「……ふう、君が何を言いたいのか、全く理解できないな。」

「オレの足が、兄ちゃんを傷だらけにできるくらいのキック力だってことを見せてやりゃーいーんだろ?！」

ボクはあわてて氷也に耳打ちした。

「氷也！ 君が力が強いのは知ってるよ、でもサッカーなんてやったことあるの?！」

すると氷也は自信たっぷりに――

「ない。」

「ええっ?! じゃあダメじゃん!」

「平気平気。オレが運動神経いいの知ってるだろ?」

「……………」

そこまで言われちゃあ、ボクだって頑張らないわけにはいかない…。

「ふーむ…いいだろう! では、今月の悪魔たちと対決だな。こっちへおいで」

「え? あ、悪魔って…」 「こればわかるよ…この幼稚園の裏がね…」

鋼雅はふたりを、園内の保健室につれて行った。

「その身体では、十分に動けないだろう。ここで、手当てを受けるといい。」

ガララッ、ボタン。

鋼雅はそのまま、どこかへ行ってしまった。

部屋の中には、顔の見えない白フードをかぶった女性が、ひとり。

「…あ、あの…」 「…。」 「もしもし？」 「…。」 「おいっ!!」

「ふえっ?! あ、患者さん?? あーゴメンゴメンちょっと寝てたわ。」

「は、はあ…そう、ですか…」

目をこすって、あくびする姿を見ると、氷介は苦笑い。 氷也は普通に腹が立つ。

「寝んなよっ! こっちは兄ちゃんが怪我してんのにっ!!」

「ん」。 ゴメンゴメン。 でも暇で疲れてたからさ。 あはは

「あ、あははは…」 「暇で疲れるか!!」

そのどうも真面目とは言えない先生は、大きくあくびをして向き合った。

「まあまあ固いこと言いつこなし。

んでー? どっちの子?? ーって、ああああああーっ!!」

「え? うわああっ!」

ガラガラガラッ!

その女性はキャスター付きの椅子に腰かけたまま、滑ってふたりに近づいた。

「うっわー、あんたたち、もしかしてあの双子の狼さん?!
キャー! うっそマジで? 本物? 本物だーっ!!」

「いつ、痛いっ、痛いです!」 「おいそこ怪我してんだけどよ。」
「あつ、ゴメーン。 つい興奮しちゃってねー。 今手当てしてア
ゲル☆」

治療の手際は、たしかに良かった。 あつという間にテープや包帯
を巻き終わった。

「あ、ありがとうございます。」

「いーのいーの! それよりさー、あたしカリンって言っただけど
ね?

覚えててくれると嬉しいーなー! ほらっ、こんなふうの特徴的な
顔してるからさっ!」

バサッ。

彼女の深くかぶっていたフードが取れ、素顔が明らかになった。

「「……え?」」

「じゃ、頑張ってたてねー♪ おねーさん応援してるからさー♪」

「えっ。 ちょっと――」

双子を保健室の外に追い出すとカギをかけ、彼女は窓を開けた。

「……………うー、さみさみ。 やっぱこっちはこたえるわ…」

まっ、双子ちゃんの顔も見れたし、満足満足♪」

そう言うのと両手を握って今起こったことを振り返り、つい夢見心地
な顔になってしまう。

「ああ…噂どりの幼きイケメン♪ 成長が楽しみだねー! よっ、
と。」

窓からふわりと外へ出ると、飛び降りた。

「ええ、そういう訳で…あの子たちは溶け込めないんじゃないか、心配なんです。」

「そうですか…」

黒いフードの青年は、優しい声で双子の両親に答えた。

「なら、あの子たちはなおさらこの幼稚園には行かない方がいいでしょう。」

「え…?」

「どうゆうことですか?」

この幼稚園は先生方も優しく、園児たちも良い子に育つと、出来たばかりのころから評判が良いので、ここにしようと妻と話していたのですが…」

青年は柔らかい声で静かに笑う。 ふふふつ。

「それはこの幼稚園の表の顔です。 裏の顔が本性なんです。

まあ、園児たちの両親方は知らないことですが、いい機会です。

お教えましょう…

この幼稚園が園児たちの中で、【悪善幼稚園】と呼ばれる由来を、ね?」

2・自分たちの姿

元来た廊下を戻っていくと、着きあたりに鋼雅がいた。

「あ…」 「お、戻ってきたね。 こっちだ、地下に通じているよ。」

カッーン、コッーン、カッーン…：ガラガラガラッ。

幼稚園の地下には、体育館のような広い空間があるだけだった。さっきから鋼雅が、リモコンのようなものを動かしてる。

「やれやれ、一度修理を施さないとはいけないな？」

反応が鈍くなっている…まあいいだろう。 さあ、ごらん！」

ズズズズ…ドオン… 地面に大きな穴が出てきて、黄緑色の地面が出て来た！

「これ…何なんだ？」

「サッカーコートと言うのだよ、この地面でサッカーをするのだよ。

この幼稚園には、他にもたくさんのコートがあるのさ。

ここで君のキック力を試すために、サッカーをしてもらうよ」

「うわあ…：大きいねえ…： よし、氷也頑張ろう！」 「お、おう…」

「ふふふ…： いい心意気だね？ では、こちらのサッカーチームに出て来てもらおう！」

鋼雅の指差す奥の黒い戸が、大きな音を立てながら開いていく…中には—

黒いユニフォームを着た、11人の園児たちが出てきた。

「!?」 「冬紀くん…?」

その中には冬紀の顔だけではなく、あの青紫の兄弟もいた……。鋼雅はポケットの手帳を、ペラペラとめくる。

「…【白鳥幼稚園のお約束・その21。

お友達に暴力を振るったら、グーパンと地下遊び】。」

氷介は驚きの表情を見せる。

「そ、それって…なあに?」

「ふふふ…。この幼稚園はもうひとつの顔を持っているのだよ。

表は、子供たちを天使と呼び、優しく見守る幼稚園…そして!

裏は……お約束を破った子供たちをしつける、【地下の間】としての顔をね!!」

『ふふふ…2体11かア。面白そうだね。』

「そ、そうだったんですか?!」

ですが…あなたがなぜ、そんなことを知っているんですか?」

「ふふ…わたしが裏方の仕事ばかりをしていると言いましたよね?」

「はい…あっ!」

双子の両親はやつと理解したようですね。

まあ、時間がかかるのは仕方ありませんが…。

「そのとうり。わたしは、その日地下へ送られた子供たちの面倒

を見ているんです。」

「……」

「……言葉が出なくなるでしょうね。」

わたしもそうでした……純粋な子供たちを、遠くでもいいから観察して、

真の愛について深く知りたいたいと思い、ここへ来ました。

……ですが、その結果は今話したとおり、散々でしたよ。

あの鋼雅先生が子供たちを……殴りつけているのを、

私はいつも遠くで見ているしかありませんでした……」

「どうして？ ……貴方のような方のほうが、園長に向いてると思いますが……」

わたしは、椅子を立てて背を向けました。 何故そうしたのか、よくわかりません。

「……わたしの顔は……ヒトの顔をしていません。」 「——!?!? え……?」

「好奇心の高い子供たちは、近づいたらおそろく……わたしのフードを取るでしょう。」

子供たちはただでさえひどい目に会っているというのに、

わたしの顔を見て子供たちはさらに泣く……

そんな子供たちを見るのが、怖いんです。 だから……わたしは、何も……」

ガタッ!

雪江さんが立ったみたいです。

あのタイプの女性は気が荒いので、すぐわかるんですよ。

「それならなぜ……あなたはここにいますか?!」

「——!?!? それは……」 「おい、雪江!」

「それも答えて頂けないなら、貴方の顔を見せて下さい！
わたしたちの子だって、ヒトじゃー」
「それ以上言っではいけません！」

つい、大声を出してしまいました。　その後の反応を見て、少しあ
わてましたが：

「…あ、声が大きかったですかね？　申し訳ない…
…ですが　―貴女は今、我が子の悪口を言ったかもしれないの
ですよ？」

「あっ…」　「雪江…」

「ハア…あなたがそんなつもりで言ったのではないことはわかりま
す。

ですが、あの子たちが頼れるのは…：

…貴方たち親だけだということを、忘れてはいけませんよ…？」

やれやれ…最近は、ついそのことに
気づけない親御さんが増えてるんですよね…悲しいことです。

「はい…わかっています。」

「もちろん、そのつもりです。　あのふたりは、わたしたちが守っ
てみせます！」

わたしはまた席に着きました。

「頼もしいですね、うんうん。　それでこそ、愛でしょうね♪
…：ちなみにわたしの顔は、貴方がたの双子さんたちより、
ずっとひどいですから。　お見せすることは、無いでしょう…」

「いいんです、わたしのわがままでしたから。」

「…わたしは、あのふたりは小学生になるまで、守っておいた方が

いいかと思います。

でも、本人たちが行きたいと言った時が、一番いいのですね…」

「はい。今日は本当に、ありがとうございました！」

「貴方は、本当に…素晴らしい方ですね」

双子の両親は笑いました。だから、わたしも笑いましょう。

この世で笑顔は、何よりも美しいですから…

鋼雅がルールブックを、ポンと閉じた。

「だいたい理解できたかね？」 「は、はあ…なんとか。氷也、わかった？」

「ま、まあ取りあえず、あっちのでかい四角に―」

氷也は足をかけていたボールを蹴り上げると、―ドガアッ！―強く蹴り出した。

「な?!」 「んだべ?!」

ボールは冬紀たちの間を縫い ― バシュウッ!― 相手ゴールに突き刺さった。

「すっ…すっごいだあ…!」 「…狼のくせに…」

鋼雅は呆然と立ちつくしたまま、砂煙を上げるゴールにくぎ付けになっていた。

「速い……！！ 鋭く、激しく、尚且つ美しい！！ すばらしい、素晴らしい力だ……！！」

皆が氷也の方を振り返ると、本人はポカンとした表情で、自分がしたことを理解していないらしい。だが、すぐに事を自覚したようでゆっくりと笑顔に変わっていく。

「叩き込めばいいんだな？」 「氷也……っ、すごーい……！！」

氷介が手を叩いて弟の手を握ると同時に、氷介以外のヒトは皆、「へ？」という拍子抜けした顔になった。

「すごいよ氷也あ！ はじめて蹴ったのに、シュートが入っちゃった！」

あっちからあっちまでビューンって

「お、落ち着けうるせえっ！！ 取りあえず手を離せ手を！」 「……気に入らない……」

そういったのは、冬紀だった。下を向いて、握り拳を震わせている。

「俺より凄いシュートなんて……お前なんかが……」

化けもんが打っていいもんじゃねえんだよ……！！」

カチン。

化けもんと言われて、氷也はカッとなる。

冬紀はそれを知ってか知らずか、恨みを込めたまなざしを氷也に向ける。

「―あ？」

「あ、れ？ ひよ、氷也！」

だめだよ、次は冬紀くんのチームがボールを蹴るんだから。
ねえ、どうしたの？？」

つかつかと冬紀の方へ行く氷也の腕を、氷介が止めた。

「は・な・せ！！」 「ひゃっ！」

氷也が右腕をぶんとふると、氷介は木の葉のようにコートへ落ちる。

「いた、たっ…」 「おい、鋼雅あ！」 「えっ?! わ、わたし
が何か…」

『ううっ…そらしたいのに、そらすこのできないあの目つき…や
はり―』

さっきのシュートを見て、我が身を案じる鋼雅。
氷也は4歳とは思えぬ冷たい目つきで、言った。

「ボール、あと5個ぐらい持ってこい。」 「え？ は…はい？」

「持ってこいっ…ってんのがわかんねえのかよ！」

「ひいひいっ!! わ、わかりましたわかりました！」

鋼雅はどう考えても気迫負けすると悟り、
その辺に放置されていた練習用ボールを抛った。

「こっ…これで、いいでしょう、か？」 「よし。 冬紀、」 「
んだよ。」

氷也は冬紀に向き合うと、意地悪く笑った。

「てきとーに蹴んぞ。」 「ふん、ならこっちも標的はお前で。」

冬紀も承知したように笑う。 雪也と士郎は、こっそり氷介を立たせる。

「だ、大丈夫だか？」 「あっ…あ、りがとう…って！ あのふたり…」

「んだ…」 「なんか…すんごくやっべえ気がするだよ…」

「ケガせんように、気いつけんとまいね…」

「この程度で勝とうなんて、甘いこと考えてんじゃねーっ！！」

ダーン、ズーン、ドツツカーーン！

ーしばらくして、やっど爆発音が止まった。

フィールドは粉々に破壊され、暗い天井からは太陽の光がのぞいていた。

ようは、地下のこの場所が破壊されたわけで、

破壊した張本人、氷也は瓦礫のてっぺんでボールをキープしていた。

「まったく、弱すぎなんだよ…しかもサッカーって簡単だな。なあ、兄ちゃん！」

その兄、氷介は瓦礫のふもとに立っていた。 頭を撃ったらしいが、問題ない。

「いたた：うん。ビックリしたよ、氷也、こんなにすごいシュート打っちゃうんだもの。」

「ゴールも壊れてるし：ー！！ ひよ、うやあ！」

「?! てめえ、何しやがんだよ！」

みれば、鋼雅が氷介を捕まえていた。

「やれやれ、やられたなあ、これほどまでの威力とは：」

やはり君たち双子は、【あれ】を受け継いでるんだねえ？」

「氷也：怖いよ、氷也あ……」

氷介は目に涙をためて、頑張っている。

「この野郎ー」

「おっと！ 近づくんじゃない。わたしは大人だ。」

だから、こんな子供は、ちょっと首を締め付けるだけで：」

ギユウウ：：

鋼雅は氷介の首を軽く締め付ける。氷介の細い首が悲鳴を上げた。

「ゲホッ、げほっ、ゲホッ！ い：た、い：やめ、て、下さい：うぐっ、ゲホゲホッ！」

「にいちや：！ ふざけんな！ とつととやめろおーっ！！」

「うん、いいだろう。」

だが、君たちを研究したい：その条件と引き換えでは、どうかね？」

「はあ?! なによくわかんねえこと言ってんだ！」

「君たちは貴重な生物だ。なにしろ、【あれ】を受け継いでいるのだからな？」

君たちの身体を研究したいと思っても、不思議ではないだろう。
お兄さんを助けたいなら……協力してくれるね？
なにしろ、獣はヒトより忠誠心が強いからなあ」

ピクッ。

「……誰が…誰が獣だああああああ！！」

ギョオオオオオオッ！

氷也の感情に呼応するかのように、ブリザードが吹き荒れる！
その強風に、鋼雅は思わず身を引いた。

「おおおっ?! 素晴らしい…【生まれてはいけない】獣の子よ…
素晴らしい力だ！」

「うるせえ！」 「!?!」

「【あれ】ってなんだよ！ それに俺は獣なんかじゃねええええっ
!!」

お前のよくわかんねえ事なんか協力してやるか!!」
「くっ……! どうやらわかってもらえないようだね。
しかたない、子供と言えど手加減しないさ!!」

鋼雅は氷介を捨てて、氷也に殴りかかろうとした。 が――

「お前の話は長えんだよ!!」

ドカ――――ン!!

「ぐばア――――!!」

冷気を込めた氷也の拳は、しっかりと鋼雅の急所を撃った。

「な、なんてパワーですかああ———?!」

そして、鋼雅は空の彼方へと飛んで行った…。

「もう二度と来るなよ。」

氷也は空の彼方に手を振ると、瓦礫の山を下りて、氷介のもとへと駆け寄った。

「兄ちゃん、兄ちゃん!!」 「ううっ…ケホッ、ケホッ…うん、大丈夫だよ、氷也…」

兄の無事な姿を見て緊張がほどかれたのか、氷也の目から涙があふれた。

「うわあああ——ん!!」 よかったあ、生きてくれててよかったあ——っ!!」

うわあ——ん! 怖かった、俺怖かったんだぞ!!
弟をこんな怖い目にあわせるなんて、お前なんか兄ちゃん失格だあ——っ!!」

そう言いながらも、氷也は兄に抱きついて思う存分泣いていた。

「うん、ごめんね…でも、ありがとう…氷也! ボク君が大好き!」

氷介は氷也を抱きしめたが、当然抵抗される。

「ふ、ふざけんな! 俺たちは双子だろ?!」

相手が大嫌いじゃ助けたりなんかしてやらねーよ!!」

『氷也：ボクには君っていう弟がいる：こんなに心強いことは無いよ!!』

ふたりは壊れた地下から外に出ると、誰かが追いかけてくる足音が聞こえた。

「ん？」 「あ。」 「あああああっ!! いや、あの、えと、あああああっ！」

そこには、青紫の兄弟の小さい方がいた。
顔を赤らめたり動揺したりと、落ち着かない。

「お前！ 何かまだ文句でもあるのかー」 「氷也！ もういいじゃない。」 「甘い！ 一発ー」

「ちっ、違うんだべ！ あの、その：あ、ありがとうございますだべさ！」 「え：？」

「お：おらたちやな？ 本当は鋼雅せんせにあすこでひどい目に会ってたんだべさ：

でも、君らが壊してくれたおかげで、それももうなくなるべ！
ほんとに、感謝するべや！」

そいつの目には、疑いようが無い心からの喜びがあった。

「ーじゃあ、俺らのことを、もう【生まれちゃいけない子】なんて言うな。」

「あっ： すまんかったべや：

昔、狼の兄弟が何したかはわっかんねえけど、
おら、あんちゃらは大好きになってまっただ！

そんなに、さっきの見て決めたん、あんちゃらみたいになるべ！
いくらちっこぐても負けね、強えおんたさなるべさ！」

そう言うとその子は、嬉しそうに走って、転んで、走り去って行った。

「いっちゃまったな…」 「うん…。でも、嬉しそうだったから、
よかった…」

「ところでよお、あいつ、後半なんて言ってたんだ？」 「さ、さ
あ…？」

あまり外に出ないふたりにとって、方言は理解不能だったようだ。

「とうちゃーん！！」 「おかあさーん！！」

両親の姿を見つけた途端、双子は一斉に飛びついた。
氷也に抱きつかれた柚彦は、勢いに押されて慌ててよろめく。

「うおっとととと！ はははは、氷也は力強いなあ？」

「当たり前だろ？ 俺は無敵だからな！」

「ふふふ。さあ、お家へ帰りましょう？」 「うん！」

と、雪江は氷介がこっちをじーっと見つめているのに気づいた。

「ん？ どうしたの、氷介。」 「あ、あのさ…おかあさん大丈夫
だった？」 「ええっ？」

両親がなぜか驚いたので、氷介は顔を赤くした。
的が外れたのか、恥ずかしかったのだろう。

「いや…さっき、おかあさんたち黒い人につれてかれたでしょ？
だから、おかあさんたち大丈夫かって…でも、大丈夫だったみたいだね？」

「氷介…」 「ふふふ…あなた方は良いお子さんをお持ちですね、
雪江さん。」

ハッ！

振り返ると、黒ローブの青年がそこに立っていた。
とたんに氷介は母から離れ、氷也はすぐに身構えて、いまにも飛び
かからんばかりだ。

「あ、あのう…誰ですか？」

「ああ、申し遅れましたね。」

わたしは【不死鳥】というものです。 本当の名前ではありませ
んが…

「――てめえ…!!」 「あっ――」

ガシッ！

不死鳥に飛びかかろうとした氷也を、慌てて氷介が腕をつかんで引
き止めている。

だが、氷也の力は想像以上に強い。

「ちよっ…何すんだよ！」 「氷也やめて！ おかあさんもおとう
さんも無事だっただろ?!」

『うわっ、す、すごい力だなあ…こんなに小さいのにー!!』 うう

う…』

「うるせえな！ 引っこんでろよ！」 「うわあっ！」

ドンッ！！ さっ、ドサアッ！！

氷也は氷介を弾き飛ばして、不死鳥を押し倒してしまった！！

「おっと！ い、痛いですね。 まあ、元気がいいお子さんで…」

「るさいっ！」 「氷也やめなさい！」 「こらっ、氷也！」

「氷也くん、わたしは何もしてませんよ？」

ほ、本当ですよっ！ 貴方は誤解をしま…痛ああっ！！」

ドカアアッツ！！

氷也は起き上がりかけた不死鳥の背中を、力いっぱい蹴り飛ばした！！

「この野郎！！ しらばっくれてんじゃー」 「氷也やめなさいって言ってるだろ！！」

ビクッ！！

初めて聞くその怒った声に、

氷介はその場に凍りつき、氷也は柚彦の方を見て蹴るのをやめた。

氷介は母の服の裾をしっかりとつかみ、氷也は口をポカンと開けて、氷介ほど状況を把握できていないようだ。

柚彦が氷也につかつかと近づいて来て―

パシーーーーン！！

わがままでやりたい放題だった氷也にとって、生まれはじめてのことだったろう。

父親に殴られたのは。 氷也は赤く腫れ上がった頬を、泣きながら押さえていた。

「氷也——!!」

氷介は氷也の所へ駆け寄ろうとしたが、雪江に引き戻された。氷也はまだ恐怖に怯えるように、震えていた。

「とー、とうちゃ…」 「氷也——! 痛いだろ——!」 「う、うん

…」

「不死鳥さんも今のお前みたいに痛かったんだ!

だから、誰かを殴っちゃだめだ!! わからないのか?!!」

「うう……」 「返事は?!!」 「は……い。」

「ああ! あまりお叱りなさらずに。 わたしなら大丈夫ですから。

」

「ですが……他人に手を上げたことは事実です。

それでなくても、氷也は日頃から好き勝手やっています。

こいつにも、いけない事をわからせてやらなきゃいけません!

……わたしだって、我が子をぶつのはつらいです。

でも、不死鳥さんを殴ってしまいましたから……

ほら、不死鳥さんに何か言うことないのか?!!」

「ううっ……、ふえっ、えっえっ……うええええっ!」

氷也は大きな声で泣くのを必死にこらえてるらしい。

不死鳥はそんな氷也を、他人からは見えぬ目で見つめた。

「その子は見知らぬわたしが貴方たちに近づいたのを見て、心配のあまり、わたしを敵だと思ってしまったのでしょうか。」

そして氷也君にとって、敵であるわたしを攻撃しただけですよ……それは間違ったやり方ではありますが、

彼なりに頑張って出した、愛なのではないでしょうか？」

「で、ですが……」

「……叱ることも大切ですが、叱るだけでは、成長しない面もありますからね……」

「……では、わたしはどうすれば……？」 「……御自分で決めなされるとよいでしょう」

柚彦はもう一度氷也を見降ろして、氷也の前にしゃがみ込み、その顔を覗き込んだ。

下を向いて涙を流し、齒を食いしばって、何も言わない。

「氷也……お父さんとお母さんを、守ろうとしたのか？」 「………ん。」 「そうか……」

氷也の声は、鼻声だった。 柚彦は、氷也の頭に触れる。

「その気持ちは、父さんは嬉しいよ。

でも、何があっても、もう誰かを叩いたりしちゃいかんぞ？」

「………うん……」 「よし、よし。 良い子だ良い子だ！」

氷也は肩をポンとたたかれ、しっかりとした足取りで立ち上がった。

「さて！ 事も済んだことですし、どうします？」

この幼稚園に通いますか？ もっとも、強制はしませんか……」

「あ、はい！ 氷介と氷也は、どうしたい？」 「俺行かない。」

「あ、ボクも。」

以外にも即答。

「こらこらっ！」 「だって、鋼雅がいてこんなに行きたくねーもん！」

氷介も、申し訳なさそうに、うなずいた。

「ふうむ…わかりました、わたしから鋼雅先生に話しておきましょう。」

それを聞いて、親子はほっと安心した。

「ありがとうございます。こいつら、本当にわがままで…」

「本当に…申し訳無い、なんてお礼を言えばいいか…」

「い、いえいえ！ 子供たちの本音は大切にしないと！」

それにわたしは、ただ…ちっぽけな違いでの差別を、無くしたいだけなんです。」

冬紀は、青紫の髪 of 兄弟と帰っていた。 冬紀は地団駄を踏む。

「いってー…ったくもー、何なんだよ、あいつら！」

「でも、あのおんちゃん、冬紀くんの事かばってぐれただなあ。

いじめたのはこっちなのに、優しいべさあ…」

背の高いほうの兄がにこにこ笑う。

「それがムカつくんだよ！」

弟は…初めてのくせに、おれよりサッカーうまくて…兄は優しすぎるし…」

「まあまあ。おらたちは助けてもらったんけ、てことは、ええヒトなんらべ？」

背の低いほうの弟もにこにこ笑う。だが、冬紀はぶすつとしたままだ。

「あいつら…いつか絶対勝ってやる！」

冬紀の心は、負けた悲しみと嫉妬心で溢れていた。悔し涙をこらえ、上を向いて歩いていた。

「ふーん…大の大人を一発で…とうとう動き始めたのかァー。」

「はい、そのようです。」

黒水晶の少年は、また、あの太陽の瞳の子に跪いていた。

「あの、一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」 「なあに？」

「…貴方は一体、何をしようとお考えなのですか？」 「―決まっている。」

太陽の瞳の子は、いきなり真面目な顔になった。

「狼退治さ。」

「おやすみ、氷介、氷也。」 「おやすみなさい。」 「ん…。」

電気が消える音がして、雪江の足音は遠ざかって行った。

「氷也、どうだった？ 今日のこと。」

「スッゲーマジで疲れた。何だよ、いきなり急にサッカーって…」

「ふふ…ボクもだよ。…いたっ！ 今傷に当たったよお。」

あっ…：わりい。」

氷介には暗闇の中でも、氷也が泣きそうになったのがわかった。

「ああっ、へーきへーき！」 「俺のせいなのにつよがんなよ、バカ。」

「バ、バカって言うほど馬鹿じゃないもん！」 「うるせーな、バカはバカだろ?!」

「氷也だってボクのこと助けてくれたじゃん！」

泣くほど怖かったくせに！ だから、そっちがバカ。」

「うっ…、お、俺はその前にかばってもらったから、恩返ししただけだっ！」

あとバカは兄ちゃんだっ！」

「…ボク、死ぬかと思ったんだよ？ ボク、氷也よりも体が弱いから…」

今ここにボクがいるのは、氷也が頑張ってボクを助けてくれたからだよ。」

氷也には暗闇の中でも、氷介が微笑んでるのがわかった。

「なっ?!」
~~~~~っ、うるさー~~~~~いっ!!」

「だーかーらーあ、何度も言ってるはずだよ？」

君にはこれから監視を続けてもらうって。」

「ですが、やっぱり嫌なんです！」

あの双子は…外見以外は、普通のどこにでもいる兄弟なんです。どうも、害がある様に見えなくて…」

「…はるか昔に結んだ約束を、忘れた訳じゃないよねえ？」 「うつ！…。」

「はい、そーゆーこと。それにね、よく考えるんだ。

あの双子は小さいうちは、君の言うとうりかもしれない。

けどね、平気平気って思ってたら…遅いんだよ。

分かったら、情報収集を続けてね？」

「…かしこまりました。」

双子は寝入る、やすらかに。

持って生まれた恐怖の始まりが、一步一步、近づいているとも、知らずに。

ここは寒冷地方。 年中ほぼ、雪の積もったままの、果てしなく白い地方。

太陽がその真下で遊ぶ、小さな影をふたつ、見下ろしていた。

「行くぞー。 氷介、パス！」 「ナイスパス、氷也！」

小さいうちの子供の成長はとても早い。

顔つきや体形はまだ幼いままだが、手足や胴が伸びて、大きくなっている。

双子は6歳になっていた。

5歳の誕生日にもらったサッカーボールで、毎日のようにグラウンドに行く始末である。

「よーし、氷也―」 「オイお前らア!!」

その声に反応して、双子は振り向いた。 不良だ。 と、ふたりは思った。

不良の方は少したじろいだが、すぐに強気になった。

(無理もない。)

同じような顔が、同時に振り向くのを想像したらわかる。 ちよっと怖い。)

「ここでオレたち遊ぼうと思ってんだけどよオ。」 「ふーん、そうか。」

この程度で譲る氷也ではない。 つんとした顔で答える。  
当然怒りを買うのは当たり前。

「てめえ! ジョージさんになんて口の―」

「黙れってトク。 あれ? こいつら、狼チャンの双子じゃん!」

「あ、本当だー! ヘー、あっし初めて見ましたぜ。」

不良は氷介と氷也を、物珍しそうに眺めまわしていた。

「へえー…変な頭してんなあ。 オイ、笑ってやれよ! 恐れ多くも、狼さんだぜえ!!」

ワッハハハハッ! だが双子は挑発に乗らず、ガン無視して去ろうとしている。

「今日の晩ご飯はハンバーグって言ってたよ」

「腹減ったなー。」

「やったー！」

「？」

「ってオイオイオイオイ！ 逃げんじやねーよ、犬っころども！」

氷は立ち止まって、すぐそばにあつたレンガに――

——バキイイッツツツ！！

レンガは粉々に碎け散った。  
(げっっ！！！！)

「あ、あわわあ…」  
「ほおう…犬かあ。誰に向かって口をきいてるんだ？ お前ら」

ふたりは不良たちに向かって歩いて行く。

氷也はガキ大将のような笑みを、氷介は誰にでも愛される笑みを浮かべながら――。

「氷也、お腹すいたって言ったよね？」

「ああ。」

「運動したら、もっと美味しく食べられると思うなあ。」

「ふーん、それはいい考えだな。  
…俺様の悪口を言う丁度いい的  
もいるしなあ！」

ヒュッ、ドカツ！  
不良たちは慌てて逃げようと走るも、ボールが  
追いつき、

「俺たちは犬じゃねえ——————————つ——！」

「いやあああああああああ————っ!!」

空の星となった。

「覚えていやがれーっ!」 「めんどくせえから覚えねーよ。」  
「ゴメンね? さよならー。」 「じゃなー」

双子はいたずらっぽく笑い、家へと駆けだした。

「ただい」 「まー!」 「あ・ん・た・た・ちー!」 「  
ー?!?!」

そこには鬼のような顔で、母・雪江が立っていた。

「あなたたち、まーたいたずらして怪我させたりしたでしょう?!」  
「チッ。 あいつら、もうチクリやがったな! つーか、生きてた  
のか…すげえ。」

「ああっ、お母さん、氷也は悪くないんだ! ボクが—」  
「言い訳は聞きたくありません! お外で反省してなさい!」

ボタン! 氷介が説明する間もなく、戸にはカギをかけられた。

「あ…」 「……」 「ごめんね、氷也…」 「バカ…」

氷介はきよろきよと周りを見ると、雪がかぶさった大きな木を見つけた。

「あ…あそこで座らない?」 「…ん、」

氷介は氷也の手を引いて、木の根元に腰掛けた。

「…」 「…」 「なあ…」 「なに?」



「俺がボールで奴らを吹っ飛ばしたんだよね？」 「うん。」

「じゃあ何で氷介がゴメンなさいなんだ？」 「…それは…、ボクがお兄ちゃんだから。」

「…は？」

氷也は驚いた顔で、氷介を見つめた。 氷介は黙りこくって、下を見つめている。

「氷介、アホじゃねーの？ 双子なんて一緒に育ったんだから、兄も弟もあるかっての。」

「それはそうだけど！ …一応、ボクがお兄ちゃんだから…」

氷介はなぜか、兄ということにこだわっている。

「…お、俺は。 そんなことより、もっと気になることがあるんだけどよー。」

「なにが？」 「俺たち、全然母ちゃんや父ちゃんに似てねーよな」

「えっ…うん、」

そうだった。

自我が芽生え、さまざまなのが

わかるようになったふたりにとって、それは少しつらい真実であった。

だがしかし、父とも、母とも、似ているところは考えても見つからない。

それを考えるたびに、氷介も、氷也も、

自分が本当に実の子なのか、何者なのか、分からなくなってくる。

「『兄ちゃん』…」 「？」 「俺、どうしてこんなに凶暴なんだ？」 「氷也…」

氷介は、久しぶりに『兄ちゃん』と呼ばれた。  
その理由は、もちろん氷也にしか分からない。

「どーでもいいじゃないか、そんなの。」

「はあっ?! 俺は真面目に悩んでんだぞ!!」

俺って、カツとなったらすぐ手が出ちまうから…

押さえようって頑張っても、相手がウザくて、許せなくて、気が付いたら…」

「そうそう、そーゆーこと♪」「ってどーゆーことだよ!!」

「だからさー、君は何の意味もなく暴力は振るってないじゃん？」

いつも自分を守るためだったり、ボクを守ってくれるためだった  
り……」

「ー!!! で、でもよお、さっきのは俺から蹴りかかったし…」

「謝っちゃえばいいんだよ。」

相手がどんなに痛かったか、どんなに腹が立ったかを、よく考えてさ、」

「…氷介は変わってるな。 いつも俺に都合のいいこと言いやがって。」

「そんなことないよ、ボクはさーーあれ?」「どうしたんだよ、

話しは終わってねーぞ」

「今、あっちの木のとこに、誰かいたような…」 「え? 別に…

何もねーぞ??」

4つの緑の眼が、一点をみつめた。

そのあっちの木のところにさっきまでいたのは、  
銀髪の太陽の目の子と、月の目の子だった。

ふたりは、双子の眼の届かない雪原からそれを眺めていた。

「へー、あれが狼の双子？」 「ああ…、美しい髪だな。」

「えー？ 僕らには到底及ばないよ。」

「だが、今まであんな髪の子は見たことが無い。」

たしかに氷介と氷也の髪は美しく、生まれるはずのない色。 生まれてはいけない色。

この寒冷地方では、そう。 【白銀と黄金の髪】はタブーだった。そして、氷介は雪原のような目立つ白銀、氷也は橙色っぽい金髪。大昔の事件をもとにした童話の、【白銀の体毛と黄金の体毛】に、似ているからー。

「そりゃあそうでしょ。 あの一族は絶滅したかと思ってたもん」

「だが、生きていたんだ。」

人間たちによって数は減っているが、しっかりと生きている。」

「その血をひいてるってことなんだから、やっぱり危険だね。」

「ドクの芽は早く取り除くべきだと、ル・リフェスがよく言っていたな」

「成長してからじゃ取り除けなくなるって、愚痴を言いに来てさー。ねーもー帰ろうよ、ここ極限まで寒い。」

「ああ…だが、哀れな双子だな。」

ただでさえあの母親なのに、その父親が、…ヒトの形すらしてないのだから。」

そう言って、ふたりは吹雪の中へと消えていった。

「うう…吹雪いて来たね…そろそろ帰ろうか。」 「ん…でも、入

れてくれっかなア。」

「入れてくれなかったら屋根に上って、屋根裏部屋の窓ぶっ壊して入ればいいよ。」

さらっと恐ろしいことを言うものだ。

「おおー！ 頭いいなーお前。」 「へへへ…あ。」

みれば、母親が玄関に立っていた。

「あっ。 氷介、氷也！」 「かあ…」 「ちゃん…」

「早くしないと、ハンバーグ冷めちゃうわよ？」

その言葉で、ふたりは顔を見合せて笑った。

「はいっ。」 「うんっ！」 「ふふっ。 もう、こんなに冷たくなっちゃって。」

ふたりは飛ぶように食卓に着くと、すぐにハンバーグが出てきた。

「いったき」 「まーす！」

「こらこら、よく噛まないで喉つかえるよ？」 「へーき、へーき！」

氷也はがつがつと、氷介はゆっくりと口へ運ぶ。

「…………ごちそうさまあっ！ あー美味しかった♪ ありがと、おかあさん！」

「やーねえ。 ま、嬉しいけど♪」 「…あ、」

『俺も、お礼言わなきゃ。　ありがとう……たった5文字の言葉だろ？　言えよ、俺……』

~~~~つ、くそつ、出てきやしねえ……』

氷也はもどかしくて、フォークで皿を叩いた。

「？　どうしたの、氷也？」　「あ。　いや、何でもない……」

「？　変なの。　あ、お風呂沸いてるからね？」　「はい！」

「……ん」

「ほら早くしなって、お湯冷めちゃうよー。」

氷介が浴槽から氷也を呼ぶ。

「うるせえなあ、暑すぎたらすぐダウンするくせによっ！」

「お母さんが温度調節してくれたからだいじょーぶ！」

「あーはいはい、分かったわかつ　ーたあーっ！？」

ずてーっ！　　氷也は風呂の床に向かって、いきなり転んだ。

「いつ、てエー……おい、氷介！　石鹸でも塗ったろ？！」

すでに湯に浸かった氷介は答える。

「靴下方っぽだけはいてるからじゃないの？」

「あ……う、うるせーっ！　そんな目で見んな！　バカじゃない、バカじゃないぞーっ！っ！」

「氷也落ち着いて。　分かったからもうお風呂入りなよ……」　「わ

かっとるわア！」

そう言いながら風呂に入り、少し多めの髪を指でとくと、小さな耳が見えた。

「氷介は銀色でー、」 「氷也は金色っぽいね。」

耳の形は、まるで獣のようだ。

「でもさ…ボクらだけ何でこんなふうなんだろうね。」

「他のヒトは、こんなじゃねえもんなあー、」 「うん、そうだね…」

3・【四大神】、集結。そして陰謀？

コン、コン。突然、誰かが家の戸を叩いた。

「はい？」 「雪江、ただいま！」 「まあ、あなたっ！」

風呂から上がった氷介たちも来ると、父・柚彦が帰って来ていた。

「やあ。お、氷介、氷也。ただいま。

思ったより、仕事が早く片付いたんだ。早く君たちに会いたかった…」

「ふふ、あなただったら。」

相変わらず、見てるこっちが引くくらいのラブラブっぷりである。

『とうちゃ…』 『かあさん…』

とーいきなり、緊張感が走った。

もうひとり外に、人影が見えたのだ。大きい…2mはある背丈だ。

「ふう…。相変わらず狭いところに暮らしてんなあ、柚彦。」

「あら、義父さん！ また、どうして？ ふふ、雪かぶってるわ。」

「帰る途中で会ってね。」

氷介たちがもうすぐ小学生だって言ったら、跳んできたらしくて…」

顔はよく見えない。なにせ、氷介たちの背では、見上げるほどだ。ヒゲ面なのが、どうにか確認できる程度。

氷也は見た時から驚いて腰が引けていて、氷介の背後にしがみつい

ている。

「ん？　ほう…。このチビふたりが、お前らの双子か？？
ハッハッハ！　なんだ？　カッコいい耳しやがって。」

その大男は、氷介たちの前にしやがんだ。
ゴーグルを押し上げ、この地方独特の帽子をかぶっている。

「ひいっ…」　「ど、うも…」

大男にとってはただしやがんだだけだろうが、氷介たちにとっては、
クマが目の前にいるくらいのインパクトがある。

「ハッハッハ！！」

おい、そんなにビクビクしとると、父ちゃんみたいなへっぴり腰
になっちまうぞ！

「と、父さん…」

「おっ。　そうだそうだ、入学祝を持って来たんだ。　えーと、ど
のポッケだったか…」

大男はコートにたくさんあるポケットを、一つ一つ探った。

「…おっ、あった、あったぞ！　へへ、俺は山暮らしだからな。
服とかおもちゃとかそーゆーしやれたもんはやれねえが、
俺的にはいいもん持って来たんだあぞ。　ほれ、これだ！」

ふわっ。　大男が腕を動かすと、勢いで風が来た。

「…？」　「何だ…？」

「へへっ。　そいつはな、ここら辺でしか取れないうえに、その取

れる数は少ないんだ。

名前は忘れちゃったがな……上物だぞ。

今年はいーのが取れた。そんなちっこいのも、」

大男は双子の耳を近づけて、その間に口を持ってった。

『ざっと、5000万はする。』

「ええーっ?! よ、よくわかんないけど、凄く凄いですね!」

「このちっけえのが…ふええ…」

「まあ! 綺麗ねえ。 どうもありがとうございます。」

「はは。 相変わらず父さんの趣味はよくわからないなあ。」

「がはははっ! お前なんかに価値がわかってたまるかい。」

「おやすみなさーい。」 「うん、おやすみ。」

電気が消えて足音が遠ざかると、ベッドの上のふたりは身を寄せ合った。

「氷也…さっきの、出して…」 「ん? ああ… ーっ?! 熱っ——!!!!」

ジュウウー…。

氷也はその高熱の出ている物体を取り外そうとしたが、焦って上手く取れない。

「氷也! 大丈夫? とったげるから、ほら、じっとして!」

「うわっ、あ。 は、早く早く! 火傷する、火傷するーっ!!」

「じつとしてってばあ！ ううー…、あれ？ 熱くないじゃないか？」 「え？ あ…本当、だ…」

それは、もらった時同様に、暗い光を帯びていた。
水介はそれを外そうとするが、何故か外れない。

「うっ…んー…。ダメだ、取れないや。」 「はあ？！ ちくしよー…何なんだよ、これ…」

「うーん…付けっぱなしでいいか。」 「…まあ、それもそうだな。」

「？ 氷也、何かやけに機嫌がいいね。」

「ん？ ああ…あのさ、母ちゃんって、優しいよな。」

「ん？ ああ、そういうことかあ。 うん…そうだね。」

ボクらが他の子と違ってても、気にもしないし、

「オレがいたずらしたって、いつだって、」

その時、沈みかける太陽に映る

小さな影が飛んでいくのに、ふたりは気づくことはなかった。

「あったかいご飯作って、待っててくれてんだもんなあ。」

ルータは空を飛ぶ。 片腕を抑えたまま。

「へえー…皮肉なもんだなあ。」

あんな冷酷非道で自分以外は何も信じなかった女が、
子供を持って、ヒトの男に心を開き、…ハア、まるでヒトが変わったみたいだ。

しかもあの双子さんたちは、母の正体も知らずに、ただ大好きなだけ、なんてねえ。」

―と、背後から兄が舞い降りてきた。呆れ顔で、ルーテを見ている。

「ここにいたのか、ルーテ。月の時間はぼくが監視すると決めただろう。」

「はいはい、ごめんなさいねー。あ、そうだ！ サファイア・ドルフィンとは連絡取れた？」

「もちろんだ。わたしの命令にそむくと思うか？」

彼も、あの双子を削除するために協力してくれることになった。明日、ヒトのふりをして出向くそうだ。」

「えーっ！ あいつだけ？ いいなー、ボクも行きた」

「ダメだ。一度にぞろぞろいったら怪しまれるだけだ。」 「ケチ。」

「ん…？ おい、それはそうと、お前、怪我して…」

「―あっ！！ なっ、何でもないよ。僕なんかほっといてよ！ バカにいさんっ！！」

そう言うと、ルーテは逃げるように飛んで行ってしまった。

「あ、おい！ ったく… 聞いてるか？

わたしがお前を行かせたくないのは、

わたしとお前の髪が、 白銀の髪だからだ…」

ふたりの髪は、氷介と氷也の双子が生まれたことで、

一層嫌がられることになった色の一つ 【白銀】だ。

氷介の【白銀】も、氷也の【黄金】も、とても美しい色なのに…

「…………ふんっ。　そうしたのは自分のくせに」

―その朝―

ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、
ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、
ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、
ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、
ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン、

「だあー！ー！ーっ！　やかまし、い…………。」

我慢できなくなって玄関を開けた氷也の前には……

そこには…水色の流れるような髪、水色の目、

さらに水色の服を着た中学生くらいの少年が立っていた。

慌てて手をひっこめても、インターホンを夢中で押してたのが丸わかりだ。

「どうもー！　はじめまして、我は水野忠邦と言っ！」　「……
変人。」

バタン。

「わーっ！　ちよっとちよっと、何故閉め出してしまうのだ？！」

「んゝ…」

再び開くと、

「わっ、子供が増えたっ!？」 「黙れ。俺たちは双子だぞ。」
「えっ? やった!」 「氷也!、誰なのこのヒト!」 「俺は知らん!」

「やったやった、やったぞおーっ!」
「いやー回り雪ばかりで、一軒一軒回ってやっと会えたー!」
「よかったよかった♪」

いきなり忠邦と名乗った少年は、氷介と氷也の手を握って縦に勢いよく振った。

「馴れ馴れしくするな。そして離せ。」

「だって嬉しいではないか、やっと会えたのだからなー♪」

あれ? あの! 両親方は!」

「え? ああ、ふたりとも働いてて、昼間はほとんどいないんです!」

「勝手に言うなよ。」

「あ!、それは悲しいなあ!、気持ちには痛いほどわかるぞ!」

「我はひとりでいると退屈で退屈でたまらなくなるのだ!」

忠邦の表情は、コロコロと何度も変わる。

喜怒哀楽、真面目、愉快!。 怪人百面相か。

「あの! 忠邦さんは何しに来たんですか?」

「そうだぞ。あと早く手を離せ、手を。」

忠邦は、ハッとして手を離した。

「おっと。そうであったそうであった! 我はジュニア・サッカーチームコーチなのだ。」

「お前たちふたりを、我がチームにスカウトしに来た!」

静かなる沈黙。

「…ちょい待ち。お前は何か言いたいんだ？」 「いきなり言われても…」

「お、そうか。では率直に、かつ簡単に説明しよう。 我のチームに来てくれ！」

「…はぁー…っ?！」

「上手く落ち合ったみたいだねー。でも、なんで水野忠邦なんだろう？」

「水野忠邦…、江戸時代の大名・老中。」

「…あいつはちょっと、歴史マニアっぽいところがあるからな。」

「ふーん…。まあ、水って字が入ってるってこともあるんだろーけどねー？」

「…真実に納得だよ。」

「おおー。これがコタツというもののなか！」

忠邦は氷介と氷也の親を待つことにして、家の中を見せてもらっていた。

今は、コタツに大興奮している。

「お前…コタツも知らないのか？」 「うむ。」

「じゃ、どこに住んでたの？」

「そうだな…世界中の、水のある場所を転々と移動しているぞ。」

「…へー。」

双子は不器用にみかんをむく忠邦に、気づかれないように身を寄せ合った。

「…なあ。こいつ、ちょっと変じゃないか？」

「う、うん。それにいつぶくらがサッカーしてるとこなんて見たんだろ…」

「おまけにあの格好、海の辺りですか？」

忠邦の格好は、今まで見たこともない格好だった。

白く薄い着物の上に、またもう一枚水色の着物を着ていて、それを腹あたりの水色の帯紐で留めてあり、ズボンも同じ生地で作られている。

「うーむ、なかなかむけぬ…ん？　どうしたのだ…？」　「あ、いや、何でも…」

「ただいまーっ！」　「あっ、父ちゃんたちだ！」　「おかえりー♪」　「ー?!」

玄関には、会社から帰ってきた雪江と柚彦が立っていた。

「おおー、ただいま♪」　「あ、今ねー。お客さんが来てるんだよー。」

「え。誰？」　「水野忠邦。」　「——え？」

居間から足音が付いてきた。ドタドタドタドタドタドタドタドッ！

ガシッ！　忠邦が両親の手を握る。

「はじめまして！ 我は水野忠邦と申す者。

このたびは息吹家の御家族にお会いさせて頂き、誠にありがたく存じます！」

「は、はあ……お約束した覚えはありませんが……」

「うげえ……」

『な、なんなんだ?! この、大河ドラマみたいな喋り方は……』

「で、家に何の用ですか？」

「ハッ！ そうでございました。

このたびは、お願いを申しあげたく参りましたのでして。

実は……若殿を我が軍に、引き入れることをお許し頂きたいのでございませう！」

「えええっ?!」 「ぐ、軍っっ?!」

「あ、父ちゃんに母ちゃん。サッカーチームのことらしいから。」

「はじめまして。 私がジュニア・サッカーチーム監督の浅倉瞳と言います。」

しばらくして、長い黒髪で、深い青の瞳の女性がやって来た。

「ど、どうも。」 「こんにちは……」

「二年前の白鳥幼稚園でのサッカー試合、見させていたただいてました。」

「そう言えばあの幼稚園、公園になったそうですね。」

「だぁーっ！ その話はもういいから！ 思い返すとイライラしてくる！」

「氷也 あ、落ち着いてってば！」

と、瞳が氷介たちをじいーっと見つめているのに気づく。

「あのー、ボクらになにか？」

「貴方たち、やっぱりあの双子なのね。狼に似ているっていう。」

「あ、そのことなんですが…チームに入るのはいいいのですがー、」
「やったあーっ♪」

ふたりの気分は急上昇。

「ふたariを受け入れてくれるかどうかを考えますと…ちよつと。」

「やだー…」

ふたりの気分は急降下。 瞳は即座に答えた。

「その心配はありません。」 「え？ どうゆうことですか？」

「まず、わたしのチームは邪悪学園に所属しています。」

つまりチームに入るとなると、自動的に学園の新生となります。
この学園には少々変わった子たちが多いので、
生徒たちも受け入れてくれると考えています。」

「ちよつと待て、それは俺たちが変わりものだと言いたい訳か？」

「こら氷也っ！」

瞳は親に叱られた氷也の方を向くと、静かに答えた。

「そうよ。 それとも、貴方たちが普通のヒトと全く同じだとも言
うの？」

「ー！！ っ、」

「ひ、瞳殿。 我は、そこまで言わなくても良いように思うのだが
…」

「……では、入って頂けるでしょうか？」 「えっ。 あ…」

「…ボク、行きたいなあ。」 「えっ??」 「お、おい氷介!!」

「ボク、サッカーやりたいもん。」

いろんな子とも、やってみたい… 氷也とも一緒に、サッカーしたいよ……」

「…じゃ、俺もやりてエ。」 「まあっ!」 「おおっ! そうこなくては!」

「では決まりました。 ありがとうございます。」

4月の入学式からで…、その前にチームに紹介は済ませるようにしますので。」

それと、入学届にサインを頂きます。」

「はい。」

瞳は入学届を柚彦に渡す。

書き終わるとすぐにそれをファイルにしまい、身支度をした。

「それでは、失礼します。」 「はい、さようならー。」 「どうも、」

「また会おうぞ!」 「う、うん!」 「せいぜい生きろよー。」

ボタン。

「…お前ら、本当にこれで良かったのか?」

双子は顔を見合わせて、しばらく黙って答えた。

「これでいいんだ。 ボクたちも、」 「逃げてばかりじゃあ、」

「ダメ」 「だからな!」

双子はたまに、このように分担して喋ることがあった。

おそらくクセのようになってるのだろう。

「そう。　なら、頑張りなさい！」　「はい！」

「―でもさー、本当によかったの？」

氷介は氷也にグラウンドにむかいながら、言った。

「氷介がいれば大丈夫だろ？　俺の兄ちゃんなんだからよ。」

「ふふっ。　そっか、ボクが氷也を守ってあげればいいんだよね―あ。」

グラウンドには、先客がいた。

そこにいた3人組は、双子を見ると一斉に雪玉を投げつけてきた。
バスッ。

「てっ。」　「たあっ。　あ…やっぱり…昨日の不良さんだよ！」

所々手当てを受けてある彼らは、雪玉を投げる手を止めなかった。

「ちよっ…おい、お前ら何しやがる?!」　「それはこっちのセリフだ！」

「やっぱりお前ら双子は、めちゃくちゃ危険な奴だったんだな！」

「何かめっちゃくちゃうぜェ!!　おい、こいつら誰だ?!」

「ええっ?!　忘れたの？」

昨日、氷也がボールごと蹴り飛ばした不良さんたちだよ!」
「？」

.....。

「お、お前マジか!?」 「だ・か・ら! 誰だっつってんだろーが。」

「ほらー! 蹴り飛ばされて、その後星になったヒトだよ!」

「∴。 あーっ!! 印象薄すぎて忘れちゃったぜ。 やー悪い悪い。」

「てんめえ∴あの時は子供だと思って勘弁してやってたが、今度はそうはいかねえ!」

「∴だったらどうする訳だ?」 「ぶんなぐってやる——」

ーヒュツー ズウツ、バアアアアツツンツ!!!

殴ろうとした不良の顔のすぐ横を、氷也の右足が突き刺さってきた!

「ー遅い。」 「ひ、ひええっ∴」

後ろの壁当て用の壁からは、崩れた破片がパラパラと落ちた。

「やっぱ、こいつ犬じゃねえ∴∴∴狼だあ!」 「ぎゃあああーっーっ!!!」

不良たちは、今度は一目散に駆けだした。 それと同時に、氷也は壁から足を離した。

氷介はポカンと口を開けて、氷也をみつめた。

「ふん、今度はケガさせてないのに逃げやがった。」

「氷也∴すっごくかっこよかったよ!」

「そ、そうか? まあ、俺は強いからな!」

「ふふっ。 じゃあ、練習しよ?」 「おう!」

太陽から見下ろす二つの影。
もう説明するまでもないだろう、ルーテと月の瞳の少年だ。

「あの子たち、やっぱりあんな風にいじめられてるのかな？」

「ああ。もうあのグラウンドは、彼ら以外誰も近寄ろうとしないらしい。」

「へーえ、悲しいねえ。あつ、サファイア・ドルフィンだ。」

ルーテが指さす方を見ると、海に2匹のイルカが見えた。
その片方のイルカの声は、彼らにはこう聞こえた。

「ルーテ様、任務完了致しましたぁ！」 「御苦労様ー♪」

「全く、意外と時間がかかったな？」

「いやーすまない。浅倉さんがなかなか来てくれなくてな。」

その間みかんをご馳走になったり…」

「ずいぶん敵と仲良くしてるな。」 「言っておくけど、同情は禁止だよ？」

「あ…あはは、分かっているぞ。」

我にも、あの双子が危険なことはわかっている…」

「そうか…では、君はコーチとして、このまま監視を続けてくれ。」

「…わかっておる。…行くぞ、ルカ！」 「キューイ！」

サファイア・ドルフィンは、ルカと呼んだイルカと泳いで行った。

「さて…わたしたちは残りの『四大神』に声をかけてこなければ…」

ここは、この地球上のどこかに存在する森、すずらん森ー。

大地に根を張り、木々が生えている…
その木の間を駆け抜ける、ひとつの影があった。

「今日もいい天気ねーえ。」

木々も歌うは、鳥はさえずるは、獣たちは大地を掛けるはでさー。
……」

それは、二十歳くらいの女性だった。

琥珀色の髪が走るたびに揺れ、木漏れ日をうけて輝いている。

頭には色とりどりの小さな石の飾りが付いた、白いベールを付けていた。

邪魔だったらしく、裾をたくし上げた白い層服からのぞく、日に焼けた肌。

そして、彼女はリスの尾と耳を持っている…。

「ああーっ！ つまんないなあー。」

最近神様から連絡もないし、たいした事件もないし…

ーあの子たち、どうしてるかなあ…あー会いてー。」

退屈そうな彼女の耳に、小さな、カサリ。 という音が聞こえた。

風や虫ではない。

「ちょっと、誰？」 「ぼくさ。」

そこには、ルーテが立っていた。

「あらーっ♪ これはこれは失礼いたしました♪

あのーあたしに何か御用ですか？」

「兄さんが、『四大神』に来てほしいんだって。」

「あらっ？ やったあーっ！ 久しぶりに面白そうじゃないで

すかーっ♪」

彼女の陽気な態度に、ルーテは眉間にしわを寄せた。

「…君はカノンやファドル以上に礼儀をわきまえないんだね。」

「てへ☆」 「てへ☆じゃないよ、てへ☆じゃ。」

「まあ、ちよつとぐらいいいじゃないですかあ。」

で、どこに行きやすいんですか？」

「この地図に書いてあるよ。」

…今回は迷わずに行くんだよ、探すのめんどくさいんだからさあ。

」

「オーケーオーケーミスターK！」 「誰さ。」 「んじゃ！」

ピュウウーイッ！！ ―ドドドドドドドドドドオオッ！！

指笛を吹くと、獰猛なライオンの群れがやって来た。

「うわあっ！！ こらっ、ぼくになんてことを…！」

そんなルーテの怒りは知らないのか、

彼女は途中でひととき大きなオスにヒョイとまたがると、そのまま走って行く。

「りょーかいしましたあ！」

反動で転んだルーテの周りには、興味深そうにウサギや小鳥が群がった。

「はあー、落ち着きがないなあ。 大地神『ル・リフェス』は…
さて君たちどいてくれ。 ぼくにはちよつと、やりたいことがあるんだ。」

キイ、キイ、キイ。……………。

「どいつていつていつてるよねーっ?!」

―エーデルワイス修道院―

あたたかな日の下、木陰に鳥の顔をした、翼を持つ子どもが4人。
外見からして四つ子らしい。

その真ん中には四つ子とよく似た外見をした、
旅から帰って来たばかりの、青年の修道士が本を開いている。

「で、その後ふたりはどうなったの？」

「ふふっ。この先は、どうなったかわからないのですよ。
ふたりが幸せに暮らしたのか、それとも…… なにも。」

「へえー…あ、本当だ！ 真っ白！」

最後の方は、全部空白のページだった。

「ねえ、じゃあアウラ兄さんは、どうなったと思う？」 「そうで
すね…」

―と、騒がしい声がある。

「はあー…やれやれ。」

しばらく留守にすれば心も研ぎ澄まされようと思いましたが、
相変わらずふたりはケンカしているんですね。」

アウラは本を閉じて、懐にしまった。

「では。また今度お話ししようね？」 「はい！」 「またねーっ!!」

アウラは子供たちに手を振って、大空へと飛び立った。

「かっこいいっ…！」 「本当に私たちのお兄さまみたい。」

「礼儀をわきまえろスカポンタン！ わたしを誰だと思っているっ！」

「えー、ただのロリコンのおっさんだろー？」

成人した大人の鳥人と、アウラより少し年下の鳥人が、いつものように空中で言い争っていた。

「こらこら、やめなさい！ ふたりとー」

「ハウ・ロティーだっ！ しかもわたしは一級戦士だぞ?!」

「へー、そーだっけ？ ハロウィンじゃないの？」

「黙れこのクソガキッ!!」 「オレだって、レミカル・レイランって名前がー」

ロティーが剣をふるえば、レイランはよけてまた挑発。また剣をふるい…の、繰り返してこちらに気づかない。

「はあ、もうしかたがありませんね。 おしおきです！」

アウラは手を天に突き出すとー ザアアーツ!! ふたりのところにだけ、大粒の雨が降り始めた！

「うひょおーっ！　　すげえっ、雨だー♪　てことは、あ！　　ししよー♪」

「わあっ?!　　っ、冷たいっ!!」

ーと、雨がやんだ。

「まったく…外出前と全然変わってないじゃないですか！
ケンカはよくないと言ったはずですよ？」

「す、すいませんでした。　　つい、挑発に乗ってしまい…」
「うん、毎日毎日♪」

ニコニコしながらレイランが言う。

「なにをオ?!」　　「お。　　おっさんやる気？」

「こらっ、いい加減にしなさい！　　もう、ふたりはもっと仲良く…」
「?　　どうかしましたか?？」

『鳥の子だ。　　落ちている…。』

この暑さでやられたのだろう、

『このままでは、大河にー!!』

とっさにアウラは大河の方へ急降下した。

「ちよっ！　　師匠?!」　　「あー、ししよー助けに行ってるんだよ。」

『もう少し、あともう少しで届きます…』

しかしその鳥の子は、いきなり落ちるスピードが速くなった。その理由は――

『しまった！ 追い風が吹いて来たのか！』

そうだった。鳥の子の翼は風にあおられて、落ちるスピードはどんどん加速していく。

間に合わない―― そう思った時だった。

いきなりその子は、手をこっちにめいっばい伸ばしてきたのだ。

『――?!』

アウラは不思議に思ったが、迷わずその手をつかんだ。

「ふう…。

危ないところでしたね、もう大丈夫ですよ？ ―?!? かつ、神様っ――!」

それはルーテの兄の…銀の輝きをもつ瞳の少年だった！ぐったりしているが、なんとか意識をたもっているようである。アウラは汗だくの顔を見て、あわてて木陰に休ませた。

「神様、気を確かに！ 今、水を汲んできました。」

「ふふ…すまないな。久しぶりにここへ来たせいか、妙に太陽が暑くてね。

ちよつと、バランスが崩れたただけだ…横になれば、すぐによくなる…。」

「そうでしたか…確かに今日は、10年に1度あるか無いかの猛暑ですね。

わたしも少しクラッとしましたよ。それも、何か異常な…」

「その話は後だ。さっき、後ろに君を感じたんだ。

助けてくれるって、信じてたからな。とにかく…ありがとう。」

「そうですか、ありがたいお言葉です。」

ルーテの兄はちらりと、討論をしているロティーたちを見た。

「それに、彼らも君を信じているのだろうか？

だから君といえるんだろう？ …うらやましいよ。

あの子供たちも、君を、『アウラ』と前の名前で呼んでいるし…」

「そっ、そんなんっ！ わたしとて神様にはかないません！

わたしはあの子たちに、『アウラ』と名乗るしかありませんし…

わたしが、あの子たちの教師になる事を

許してくれたのも、あなたじゃないですか？

わたしだって…わたしだって、あなたを信じているんです！」

ルーテの兄は、ポカンと口を開けていた。

『フフッ。君も、そんなに感情的になる事があるんだ。』

「うん、そうだったね。 …あ、」

ロティーとレイランたちが、戻って来たアウラに気づいて、空から降りてきた。

「ししよー、遅かったですねー。」

「お疲れさまでしたー？！ く、くせ者っ！！」

ロティーがルーテの兄を見るなり、腰の剣に手を掛けた。

「ああつ、やめなさい！ このヒトはわたしの…師匠のようなお方です！

見かけは幼いですが、わたしよりもずっとずっと年上なのですよ！？」

「へえー、いたんだ〜。」 「何っ?! こ、これはとんだ御無礼をッ!!」

それを聞いて、あわててロティーは剣をさやにおさめ、さっと跪いた。

「フフ…いいんだよ。 いいお弟子を持ったね、空神『フェニックス』よ。」

「あつ…」 「へー、ホントはそんな名前なんだ？」

「…おい、教えてなかったのかい？」 「あ、はい…」

「まったく…。」

まあ、君に会いに来たのは、あの事に協力してほしいからなんだ。

「えっ、わ、わたしに?? …とうとう、計画が決まったんですね。」

「うん。 すぐに帰れないかもしれないが…頼めるかい？」

「はい！ あなたの頼みなら…」

フェニックスはロティーたちの方を向くと、

「また、出かけてきます。 帰るまで、子供たちを頼みますよ。」

そう言って、微笑んだ。

「えっ、またですか?! あ、悪ガキども…あ、いや、しかし何をすれば…」

「オイオイおっさん。

前に出かけるって言った時のこと、もう忘れたんかい？

老化だねえ、こりゃ。

絵本読んであげて、一日いっぱい遊んであげれば、いいってこと
！」

「お前みたいなのが4人も増えたみたいでいやになるわっ！！」

「まあ、そうゆうことですね。ではまた、お願いします。

あなたたちを、信じていますよ…」

そう言うところの兄を抱えて、フェニックスは空へ舞い上がった。

「あ！ …師匠…。」 「オイオイ泣くなよ、ガキどもが待ってる
びよん。」

「なっ、泣いてなどおらんっつ！！」

「さあ、神の命令だ。

空神『フェニックス』よ、僕を―寒冷地方につれて行け。」

「かしこまりました。」

大波と嵐に遊ばれる、一艘の船があった。

「親方あ、海は大荒れですよ！ 今行くのは危ないんじゃない…」

でも、親方は聞かない。 そうゆうヒトだ。

「ええい、なんだ！ どいつもこいつも俺を年寄り扱いしやがって。
俺は見たんだ！ 体長35mはゆうに超える、でっけえシロナガ
スクジラを…！」

お前らに信じさせるまで俺はひとりでも行くぞ…！」

「ですから、何度も言うようにシロナガスクジラがこんなところにいるわけないって。

ん？、…あれ？ 親方、あれは…子供じゃないですか！
それも中学生くらいの…！」

彼が指差す方向には、水色の髪をした少年が、
天候を気にせず、こんな沖でイルカとたわむれている。

「ありゃっ！ おーい、その坊主！ あぶねえぞ、もうすぐでっ
けえ嵐が来る。

こっち来い！ どうやって自力でここまで来たんだ…！」

その少年はこっちに気づき、ヒトとは思えないスピードで泳いできた。

「ぷはあっ！！」「うわっ！？ も、もう来た…？」

「本当に嵐が来るのか？ 海も、メチャクチャになってしまうのか
？」

「変なしやべり方するなあ？ まあ、なるだろうさ。
それより、さっ、早く乗れっ！」

「こうしてはいられないな…その翁、足早に撤退した方がいいぞ。
」

「ハアッ?! お前の方が逃げろって―」

「ゆくぞっ、ルカ!!」「キュウーイッ!!」

その少年は、イルカとさらに沖へ泳いで行ってしまった。

「ああっ、待てっ、戻ってこおーいっ!!」

「ダメだ親方っ、あんたまで海にのまれちまう!!」

「ああ……っもう会えないかもしれんな、あんなに翔太にそっくり

な子は…」

海に潜った少年は、イルカを先にして泳いで行った。

「ハア、ハア…」

ルカと呼ばれたイルカが振り返る。

『大丈夫？ ファドル。』

「ああ。 やはりヒトの足では泳ぎづらいようだなッ!!」

と、―彼の足は一瞬にして、イルカのような尾びれに変わった!!

「よし。 ルカ、君はむこうの魚の群れと、カニやエビたちを頼む。
我はサメやエイと、しろぼんを連れていく。 3分後に合流するぞ！」

『わかったわ。 気をつけてね、ファドル!』

「ふっ。 君もな！」

ピイイイーン…!

ファドルが指笛を力強く吹き鳴らすと、すぐにサメやエイたちが集まってきた。

「皆、よく聞け! もうすぐ強い嵐が来る、子供老者をかばいながら、

ひとまずこの海域から避難だ! さあっ、我に続けえっ!!」

避難計画がはじまった。

親方を乗せた船は、まだあの海域にいた。

「親方、もう行きますよ！」

…あの子のことは、可哀想だけど、諦めましょう。
海には、逆らえませんよ…」

「…。ん？ おいつ、むこうから近づいてくる、あれはなんだ？
！」

「はい？ —うわああっ！！！」

ザッパァーンッ！！ 大きな波の振動で、船が大きく揺れる。

「な！ なんじゃこれは…！」

海をみればそこには、船を揺らしながら泳ぐイワシ、
マグロなどのたくさんのお魚たち。

海底には、カニたちがエビや貝を甲羅に乗せて、大移動しているの
が見えた。

その列の先には、さっきのルカと呼ばれたイルカが…

「おっ、親方っ。 あっちからもだっ！！！」

指を差した方を振り向くと、サメやエイの大群が、すごい勢いで泳
ぐのが見えた。

そして、さっきの魚の群れとつながり、ひとつになった。
そのとき—、

——ドオツツパア——ンツツ!!

海面を割って出てきたのは、巨大なシロナガスクジラだった!!

「——!! すげえ…なんてでかいんだ!」

「…こいつだ。俺が見たクジラは、こいつだ!!」

グオオオオオ——ン………… ザパ——ン!!

クジラは一瞬止まったかのように身をひるがえすと、
大きな水柱を立てて、海へ戻って行った。

船員は目の前の出来事に信じられなくて、怖くて震えていた。子供のように。

「こ、こんな奴らを従えてんのは、いったい…いったい何なんですか?!」

親方には見えていた。水色の髪の少年が、魚たちに指示を出しているのが…。

親方の心の中に、幼いわが子の姿が重なった。

『とうちゃん、お魚取れたよー!』

「おおっ、…しよ、翔太……!」

彼は嵐の当たらない場所で、岩影に腰掛けていた。ある目的を果たすために。

「―！ 来た：フェニックスもいるようだけど、まあいい。居てもいなくても、天気は変わるものだ。

ふふふ：今こそ天体地位を動かす超魔術で：あなたを消してやるよ。

台風の半径30 m以内まで、風力を8から12に引き上げ、台風
に吸い込ませる！」

彼の腕はゴウゴウと音を立てる雨雲に突き出され、叫んだ。

「古き太古のシュメール文明より、甦れ、風神エンリル！」

竜巻が一瞬、緑に光った。 渦巻く中に、風神エンリルの瞳が光る。
彼は尚も叫ぶ。

「テンペスト！」

フェニックスはルーテの兄を抱えたまま、海の上を飛んでいた。

「もうじきですよ、神さま…」

「ああ：？ フェニックス、あの海が暗くなっているところは、
何だ？」

「え？ ああ、嵐が来ているのでは― うっ？！ うわあああつ！
！」

「！？ なんだ？！ いきなり、風が強くなってきた：！」

フェニックスはルーテの兄をかばうように、
嵐に背を向け、翼を動かし、振り切ろうとしたが―風力が強すぎる！

「だ、ダメです…吸い込まれます！　あああああーっ！！」

「ふふふ…これでもう、終わったな。」

さあて…身体がばらばらになっていることだろうー　なっ?!!」

彼は一瞬、自分の眼を疑った。

フェニックスとルーテの兄は、嵐の中で無事、立っていた！

『バ…バカな！　上級魔法を喰らって、無事でいられるはずがない！
それでも…大河の所で
ウォーマーフィールドをつかって、日射病になりかけてたじゃないか！
いかに！

なのに　ー?!　あ、あの、半透明の、白く、鈍い光は…!!』

ルーテの兄は両腕を伸ばし、

結界のようなもので、我が身とフェニックスを覆っていた。

『エアスクリーン…!』

ただの中級魔法のくせに……っ、その分【神の力】が強いということかなあ？

訓練して、頑張って習得した上級魔法のテンペストよりも、
ちよちよいと遊び心で覚えたようなエアスクリーンのほうが、
強いってことかい?　…ふざけるなああっ!!』

フェニックスたちは嵐に立ち向かうのに必死で、まだ彼の姿に気づいていない。

彼はもう一度腕を突き上げる。

『今のでさすがにバテてきたはずだ。　もう一発叩き込めば…!』

「古き太古のシュメール文明より、甦れ、雷神二ヌルタ!」

海面が黄金に輝き、フェニックスたちの眼がくらむ。

「アークサンダー!!」

海面からいくつもの電光が走る。

天に雷神二ヌルタと共に昇る電光は、電竜の如く唸り声を上げる。

「―っ?!　神さま!　今度は…!　雷です!」　「なにいつ?!
エアスクリー―」

バギウウウン!!

電光がふたりに直撃する。　エアスクリーンは、あっけなく壊された。

ビリビリと衝撃が走り、電竜は台風と絡めあう。

「ぐああああ―っ!!　痛い…ああっ…、まるで、身体が…
裂けるようだ…っ!」

「かっ…神様あ!」

彼は波の打ちつける岩の上に立ち、雨と海水を浴びながら、笑っていた。

「あはは…あはははははは!!
凄い…凄いぞこれは!!　上級合成魔法…サンダーストームだあ
!!」

風神エンリル雷神ニヌルタが見下ろす中、雷雲がふたりを襲った。

「死ね！ そのまま碎け散るがいい！！」

「はあーっ、はああーっ…くそオツ！ な、何なのだ、この嵐は…」

『神さま…ああ、わたしよりも、ずっと苦しそうです…

わたしが、わたしが何とかしなくては！

…！ そうだ。 雷雲からの衝撃を減らすことができれば…

エアスクリーンを纏ったまま、雷雲から脱出出来るかもしれない！

それならば…』

フェニックスは自分の翼でルーテの兄を包み込んだ。
そこは温かく、風や雷にあおられることもなかった。

「？ フェニックス…？？」

「大丈夫です…自然現象なんかに、
空を操る空神であるこのわたしが、負けるはずないでしょう？」

そう言うフェニックスの顔は、びしょぬれだったが、いつものような優しい顔だった。

「！？ なんだ、あいつは！ 邪魔だなあ…エンリル！ ニヌルタ
」

彼がそう叫ぶより早く、空神フェニックスは唱えた。

「大いなる空よ。天界に舞う守護天使たちよ。
空神フェニックスが命じる…我と神を護衛せよ！　―プロテクシ
ョン！」

雨雲に覆われた空に、一筋の光が射し込んだ。

その光は雷神エンリルと風神二ヌルタの眼をくらませ、
フェニックスたちを、優しく、包み込んだ。

光は暴雨と雷を跳ね返し、フェニックスは台風から不死鳥のように
飛び出した！

「なあっ！？　ば、バカな！」

『またしても、あんな中級魔法に…　さすがは四大神の中で、最も
神に近い者。』

魔力も底知れぬ…　だとしても！　こんな事は…　認めぬ…断じ
て認めぬ！』

「え、エンリル！　二ヌルタ！」

風神雷神の姿はすでに無く、ゴウゴウという泣き声が遠ざかって行
く。

「―チイッ！　…………ふっ、また、失敗か…。」

彼は静けさを取り戻していく海を見つめながら、腰を下ろした。

水神『サファイア・ドルフィン』ことファドルは、岩の上で休んで
いた。

そうとう疲れたのだろう、さつきから静かになった海面を見つめてばかりだ。

―パチパチパチ。

「見事だったよ。 ファドル」

ハッとして振り返ると、そこには空神『フェニックス』と、神が立っていた。

ファドルはパッと笑顔を作った。

「フェニックス！ 神！」

「こらこら、いけませんねえ。 神様と呼ばなくては。」

「まあ、いいではないか♪」

ため息をつく、ルーテの兄とフェニックス。

「まったく、しょうがない奴だな。」

フェニックスと寒冷地方に行こうとしたら、

この大荒れ。 危うくわたしも巻き込まれそうになったよ。

：まあ、君が一生懸命、守った海なのだろうな、
相変わらずここは美しい……。」

「そりゃまあ、我が守らなければ、この海を守ってくれる者はいないからな。」

それより、我に何かようがあってここまで来たのだろうか？ 話せ。

「

「こら、ファドル！ 神様とお呼びなさ―」 「まあ、いいではないか♪」

「そうだな…寒冷地方にゲートを開けておく。 そこで会おう。」
「承知したっ！」

ファドルは海へ飛び込んでサメに乗り、ルカを連れて泳ぎだした。ファドルが完全に見えなくなると、フェニックスが口を開いた。

「水神『サファイア・ドルフィン』。…あとは、彼だけですか？」

「ああ。しかし、この海：妙だな。」

「はい。非常にわずかですが、ここの空気に魔力の後を感じます。」

「…これだけの魔力を持ちながら、肝心なところでヘマをするなんてね。」

とすると、さっきの嵐は魔力による人工的なモノか…まさか！
「どうしましたか？」 「いや、…なんでもない。」

嘘をついた。それは、本人にしか気づかれてないようだ。

「？　そうですか…では、行きましょう。」

「うん。さあ、あっちに着いたらファドルにお仕置きだ。
ヒトに許可なく姿を見せたのに怒らなかつたら、
ルーテの奴がすねてしまうからね」

ある人物はゆっくりと、寒冷地方へ向かっていた。

「くそおっ！　計画を早く実施しようとしたら、

大地神のところで動物たちに足止めを食らって遅れ、

大河で殺そうとしたら空神が助け、

大嵐によって殺そうとしたらまた空神が防御を手伝い……

どいつもこいつも邪魔しやがって…！」

怒りをあらわにしているその人物の脳裏に、

【神の力】で身を守るあの姿が、またちらついた。

「…さすがは神の力だな…。その力を、戦いに使えばいいのに…
まあ、そんなことはどうでもいい。ますます【神の力】に興味
がわいたぞ。」

ルーテの兄はフェニックスと別れた後、
誰にも教えずに、もうひとつ別の場所へ向かっていた。

寒冷地方、北海道の外れにある、小さな一軒の家に…。
その家には、看板が立ててあった。

かすれていてなんとか読めるレベルで、こう書いてある。

―【ゼウス病院】と―

それを見て、ルーテの兄は思わず顔がほころんだ。

「君は、やっぱりここにいるのか…」

『カギがかかっている…こんなもの、わたしにとってはおもちゃ同
然だ。』

カツ！ ……カチャリ。

取っ手に少し力を込めると、一瞬光ったように見えたが、
その後、カギの外れるような音がした。

「ふふふ…。」

真っ暗な家の中に、歩く靴の音だけが響く。

―カッーン、コッーン、カッーン、コッーン……―

キッチンの食器棚を横にずらすと、暗闇へと続く階段が現れた。

「上にいないってことは、地下にいるのだろうか？」

―カッーン、コッーン、カッーン、コッーン……―

地下は、上とは別世界だった。

手術道具やら、研究薬品やら、

何やら気味の悪いものがずらーっ、と並んでいる棚ばかりだ。

その奥の突き当たりに、光が漏れる戸があった。

カチャッ。

「―誰だ?!」 「わたしだ。」

手術台にかがみ込んで作業しているのは…12歳そこらの少年だった。

黒水晶のように澄んで綺麗な髪と瞳、首には赤いスカーフを付けている。

「! あ、あなたは―。」 「久しぶりだね、生命神『カノン・ルーク』。」

「…お久しぶりです、神様。」 「…ふう。 ん? 何をしているんだい?」

「あ、いや、こいつは―!」

手術台に乗っていたのは、あの双子と同じくらいの男の子だった。だが、体中に深い傷があり、痛々しい姿だ。

「…この子は?」

「…数年前に、この家の前で倒れてたんです。」

手当てを施してるんですが、意識も戻らないので、植物状態かと思ってます…」

「数年前？　こんな状態で、よく生きてるね。」

「そんなにいかっても治らない傷なのだろう？」

「いいえ。それが、…怪我は、もう治ってたんです。」

「治った？ 治ってないじゃないか？」

「この怪我は、不思議なことに……少し前、突然できたんです！」

「何っ?!
そんなことがあるものか!」

「本当です！　これまで俺が、あなたに嘘をついたことがあるんですか！？」

「……そんな、バカなことが……」

「手当ては済んだか？」

カノンは手術着を脱ぎながら答えた。

「はい。それで、話しとはなんですか？」

「あ……いや、いいんだ。君の顔を見に來ただけなんだ……」

「えっ?？」
でも、俺のどこへ来るときは、

「いつもだいたい相談があったじゃないですか？」

「あつ…。うん、でも…君には今、あの患者がいるだろう？」

「だっ、大丈夫です！」

異常が起きたら、携帯してるアラームが鳴るようになってますので、

少しの間なら留守にしても平気です！」

「……だが……、……そうか、ありがとう。」

それで話なんだが、君は狼の双子を知ってるよな。」

「も、もちろんです。俺が不幸にしてしまった子たちですから……」

ルーテの兄は、そうじゃない。と出かけた言葉を、慌てて戻した。

「そ、そうだろうな…。」

その双子のことで、話し合いがあるんだ。来てくれるかい？」

「？もちろんですよ！俺は、あなたに救われたんですから。」

大きな樹の下に、いくつもの人影があった。
白い翼を持つ人影が、そこへ加わる。

「あっ！ 神様久しぶりーっ♪」

大地神 ル・リフェスが言う。

「遅かったですね、なにかあったのですか？」

空神 フェニックスが言う。

「あっ、カノンではないか！」

水神 サファイア・ドルフィンが言う。

「ファドル！ ああ、久しぶりだな、みんな集まるのって。」

生命神 カノン・ルークが言う。

「じゃあ兄さん、早くゲートを開いてよ。寒くてしょうがないもの。」

ルーテが言う。

「ああ。少し離れてくれ！」

はああああっ!!!!!!!!!!!!!!

樹の洞に揺らめく空間が現れた。

「さあ、入って。」

「はい！」 「はい。」 「うむ。」 「は、はいっ！」 「ふっ。」

【四大神】、【神の兄弟】は、計画をはじめようとしていた。

4・初試合

「氷也ー、おきなって言ってるじゃん！」

ボクはそう言いながら氷也をゆする。

もう、今日が行く日だってこと、忘れちゃってるのかなあ？

「うるせえなあっ、あと5分。」

「今日がジュニアチームにあいさつする日だって、忘れたの？」

「ああーっ！！ やべえっ、今何時だっ?！」 「えっと、9時15ふー」 「ぎゃああーっ！！」

「もう、やっぱり氷也はお寝坊さんねえ。」

氷也は、立場が悪そうに赤くなった。

「母ちゃんや父ちゃんもそうだろ?！」

「あら、いいじゃない。いつも働き疲れてるんだし、ね？」 「ね? じゃねーよ！」

「まあまあ、9時半なら車で行けばなんとかなるさ。さあっ、早くしとけよ？」

「はーいっ!」 「ん。分かってらあ！」

氷介はすでにジャンパーを着てカバンも持って、後は氷也の準備が終わるのを待つだけだ。

「氷也。そのズボン、前後逆。」 「げっ! やっ、べえ…。」

ブロロロロ……。車は雪道を走っていた。

「いよいよだね、氷也……。」「あ、うん……。でも、俺……」

ボクは氷也の手を優しく握った。

こうしてると氷也だけじゃなくて、ボクも安心できるんだ……。

「大丈夫だよ、言っただろ？　ボクが氷也を守ってあげればいいんだって。　ね？」

「そ、そうだなっ！　悪い悪い。　…氷介の手って、いつもあったけえなあ……」

「そう？」　「うん、父ちゃんや母ちゃんの手みたいだ」

それを言ったら、君は、怒るととっても怖くて、こんなにきつい目つきをしてるのに、何でこんなに、手があったかいのかなあ……

車は、グラウンド付近の駐車場に止まった。

「さっ。　着いた着いた。」　「おっ、あそこかー。」　「……氷介、

」　「うん、わかってる……」

結局俺たちは、怖くて手を離すことができなかった。

「―あ、息吹さんですね？」　「はいっ。」

「早速なんですけど、今から氷介くんたちの初試合がはじまります。」

「えっ？」

「どうやら日付を間違えてしまったようで、本当は昨日のはずだっ

たんです。」

瞳監督は初対面の時と同じ、凜とした態度で、きっぱりと言った。

「ええーっ?!」 「それでも、別にいい?」

瞳監督が俺たちの方を見下ろしてきた。 答えは、俺の中では、決まってる。

「別にいいぞ。 練習も毎日のようにしてたからなっ。」

「うん、ボクもいいです! 早く試合してみたいなあ。」

「そう。 じゃあ早速チームメイトにあわせるわ。」

お父さん方も、それでよろしいですか?」

「えっ。 で、でも…」

「父ちゃん、」 「母さん、」 「いいっ」 「てばあ!」 「俺

たち早く」 「試合したいもん!」

「…だったら、頑張らないと損よ?」

父ちゃんと母ちゃんは、承知してくれた。

グラウンドでは、試合前に小さな選手たちがストレッチをしていた。

「…なあ、昨日来なかった新しいメンバーって、今日来るんだべ?」

ひとりの背の低い男の子が唐突に切り出した。

1m弱と言ったところだか、4歳ぐらいだろうか?

しかし、このサッカークラブの募集年齢は、5歳からである。

だが、5歳にしては少し低い。

キャプテンマークを付けた子が答える。

「ん？ ああ。」

「どーも、監督が間違えて今日って言っちゃったから、昨日来なかったんだってさ。」

「そんだか。 んでも、どんな子らかなあ。 たしか、双子だつて言ってたべ？」

「んだ。」 「あつ、にいちゃ。」

背の低い子の隣に、対照的に背の高い兄が座った。

140cmはあるように見えるが、小4か小5と言ったところだろうか？

「でもやっぱ双子って聞くと、【狼の双子】事件、思い出しちゃうよな。」

「あ、幼稚園の時だべか？」

とたんにキャプテンの幼い顔が陰しくなった。

それに気づかないふたりは、ほのぼのと語り続ける。

「あのシュート、凄かったべな。」

「おらもFWなんだから、一度はあんぐらいのシュート打つてみたいべ！」

「んでもにいちゃ、あれは【狼の双子】だったけえ出来たんだべ？ にいちゃがやったら、身体が壊れちまうべや。」

「あー、んだべな。」 「にいちゃは今んまんまで十分強えべや。そだべ？」

「そうだか？ いんやー、うれしいだ。」 「違う！」

キャプテンが立ちあがった。 突然でふたりは驚く。

「へっ？　キャ、キャプテン…」　「おらっちゃ、変な事言っただか？」

「変も、何も…」【狼の双子】を褒めてどうすんだよ！　バカッ！！」
「あ…」　「す、すまねえだ…」

弟が視線をそらそうと雪道の方を見ると、二つの人影が見えた。

「もしかして今日来るのって…あのふたりだべか？」　「え？　…あ！」

その姿に誰もが目を疑い、チーム全員が雪道のほうにくぎ付けになった。

「う、嘘だろ?!」　「だ、だって、あれ…！」

ひとりはパタパタと息絶え絶えに走ってきた。

もうひとりは頭の後ろで手を組んで、リフティングをしながらゆっくりと歩いてくる。

「はあ、はあ…おつ、遅れてごめんなさい！」

最初に着いた方は膝に手をついて、悲しそうに誤った。
その相手に、キャプテンは思わず喰ってかかる。

「お、お前ら！　【狼の双子】じゃねえか…！」　「あつ！　もしかして…冬紀くん…!?」

氷介の顔はぱあっと明るくなり、有無を言わず冬紀の手を掴むと、上下に振った。

「久しぶりだねー！ 元気にしてた？」

ボク、サッカー練習したんだよ！ これからよろしくねー。」

「はあ？！ 何普通に触ってんだよ！ 離せ！」

冬紀は氷介の手を、パチンと弾いた。 氷介の表情はすぐに無表情になった。

「あつ。 ゴメン…」 「ふんつ。 あとおいお前！ さっさと来いよ！」 「あ？」

氷也は冬紀のほうも見ずに、のんびりリフティングをしながら来た。

「お前なあー 遅れてすみませんとかねえ訳？！」

「俺別に遅れたくて遅れた訳じゃねえし」

さらりと受け流す氷也。

氷介は、いつもなら外見を気にする氷也が、勝気なのを不思議に思った。

「氷也、ずいぶん元気だね？」 「だって窓からこいつ見えたもん」

そう言って氷也は冬紀を指差し、グラウンドに来る途中の崖を指差した。

「ええっ？！ あんな遠いところからよく見えたねー。」

「当たり前だ。 俺の視力は推定3.0だからな。」

「ああ、昨日やってたテレビ番組のやつだねー。」

ボクは2.0だったけど、さすがに何かが動いてるようにしか見えなかったしー」

「だあーっ！ そんなことじゃ絶対ねーだろ！ お前は、…ッ…。」

氷也は何かを悟ったように、また意地悪く笑う。

「ああ、お前にぶっつけ本番のサッカーでバカ勝ちしたから、余裕満点なんだよ。」

「ー！！ てめえ！」

冬紀を遥かに背の高い、青紫の髪のが止める。

「だんめだべ！ このふたりが入ってくんなかったら、人数足りんで不戦敗になるべよ！」

先週のファイヤーバードとの練習試合で入院したふたり…

まだ、ケガ治ってねえんに…きょうも、また、おんなじ相手と戦うんに…」

「…チッ。」

『ふうん…サッカーって、やっぱりケガしちゃうこともあるんだ。ボクも、気をつけないと…』

だがふたりともこの試合で、氷介も氷也也大怪我をすることになるのである。

「皆、今日から新しく入るチームメイトよ。」

チームのメンバーは、ボクらの髪や耳を、じろじろ見てきた。

『氷也っ。』

ボクは助けを求めるように氷也の目を見た。

『あ…。』

氷也の目は涙が溢れそうになっていて、ボクの手を痛いほど握ってきた。

やっぱり…外見に注目されるのは、嫌なんだ…。 そりゃあ、そうだよ…。

『くっそう、何でこいつらじろじろ見るんだよ！』

俺は、お前らとたいして違うなんて、わかれよ…』

そうか…ボクだけじゃなくて、氷也も怖いんだよね …ボクが、言わなきゃ！

「あ、あのっ！ はじめましてっ、ボク、息吹氷介ですっ！」

チームメイトは初めて、双子の顔をちゃんと見た。

あ、あわわ…やっぱ恥ずかしいなあ。 えっ、なあに？ 氷也…

氷也は氷介の耳元にささやいた。

「…悪い、言ってくれ。」

「あ、うん。 えっと、こっちはぼくの双子の弟で、氷也です。これから、よろしくお願いします！」

小さなざわめきをかき消すように、瞳監督が声を上げた。

「そうゆうことだから、今日が初試合になるわ。」

「ええっ?! でも監督、こいつらがどんなプレーするのかまだ知らないし、

第一、こいつら…まともにサッカーできるんですか?」

チームのひとりとは声を上げた――冬紀だった。奥には、あの青紫の髪の兄弟もいた。

「――!!」 「それに…」

冬紀は監督から視線をそらし、氷也たちに下等なものでも見るかのような視線を向けた。

「そう、別にいきなり入らせなくてもいいのよ。

ただ、このチームが不戦敗になるけれど。」

冬紀はニヤニヤ笑う氷也を侮しそうな目で睨んだ。

「…。決まりね。あなたたちは、どこに立っていてもいいわ。この試合で、ポジションを決めます。」

「はい!」 「…。」

ニヤッ。氷也は嬉しそうに、笑った。

「試合、開始ーっ!!」

ピーッ! キックオフは相手チーム、ファイヤーバードからだった。こっちのチーム、ブリザードの選手たちはとたんに身構える。

「皆、来るぞっ！　おい氷介、氷也！　ボール取ってかねーと置いてくからな。」

冬紀はそう言って走って行く。

そいつの腕には、紺色のキャプテンマークが付いていた。氷也は顔を歪ませる。

「チェッ、あいつがキャプテンかよ。　よし、絶対シュート決めてやるーじゃねーか！」

「うん。　ボクもシュートさせないように頑張るよ！」

「…あれ？　ってことは、俺はFWでー」　「DF止めるーっ！」

ハッとして振り返ると、ファイヤーバードのMFが攻め込んで来ていた。

冬紀が声を張り上げる。　青紫の髪の毛、ストールを付けた子に。

「深川ーっ！　ボール取ってくれっ！」　「わ、わかっただ！　ーうわあっ！」

その子はファイヤーバードのDFにはばまれて、転んでしまった。そのすきを見て、ファイヤーバードのMFはゴール前へ上がっていく。

「決めてやるーっ！！　シュートー」

ズサアアーーーーッ！！　彼は、ほぼ反射的に動いた。　純白の美しい髪が揺れる。

ースライディングタックル！！ー

彼の足が相手MFの足の下のボールを絡め取り、自分の方に引き寄せる…。

あっという間だった。ほんの一瞬の、繊細なプレー。氷介は、ボールを奪った。

「やった…できたあっ！」 「よっしゃあーっ！」

氷介は飛び上がりそうなほど喜んだ。

生まれて初めての試合で、スライディングタックルが成功したのだ。冬紀がポカンと口を開け、氷也は歓声を上げる。

ーと。喜びもつかの間、ボールを奪われたMFが引き返してきた。

「チィッ！」 「わっ！ ええとー」 「氷介くん、こっちだあ！」

「えっ？」

さっきの青紫の髪の子が、開いたパスコースに飛び出した。

『あの子…ボクのこと、信じてくれてるのかな…？』

「うん、お願いしまあーす！」

ドンッ！ ボールは選手の間を縫い、青紫の子のところに落ちた。トンッ。

「ナイスパスだべ！」

ニコッと笑って、上がって行った。（FWなのだろう。）

ベンチの方にふと目をやると、笑顔で手を振る両親の姿が見えた。

氷介は手を振り返して、笑う。

『父さん、母さん…。ボクでも、役に立てたよ!』

しばらく上がると、相手DFに詰められてきた。

『うわっ! あ、危なかったべ…でも、誰にパスしたら…みんな、パスが出せないようにマークされてるし…』

「おいつ、そこの青い奴ーっ!!」

振り返ると、氷也がマークを無理矢理振り切って、パスコースに飛び出した!

『ええええーっ?!』

「何ボサツとしてんだよ! 早くボール渡せ!」 「わ、わかったべ!」 「おいつ!」

冬紀が不服そうな顔をしたが、気づかなかった。マークについていた選手たちは、すぐに氷也のボールを奪いに来た。

「よっしゃああーっ!! 任せとけ、決めてやるぜえっ!」
「待てっ! 行かせないぞ!」 「チッ…ジャマだあっ!!」

ドンッ!! 立ちふさがるDFも、氷也のタックルで木の葉のように散った。

「すごいだ…」

「おいつ、深川兄っ! なんだおいつにパスしたんだよ。」

あいつがどうゆうイキモノか、わかってんだろ?!」

「あ：ごめんだ。 んだけど、すごいパワーとスピードだべなあ：
かっこいいべ〜。」

冬紀はそんな深川兄を見て、悔しそうに氷也を睨みつけた。

『お前なんか、DFに捕まって転んで恥かしいちまえ!』

でも、氷也の風のようなスピードには、誰も追いつけなかった。

ベンチの瞳監督は、興味深そうに見ている。

「氷介くんは、パワーはそれほどでもないけど、テクニクでしのご。」

氷也くんのプレイは：、ただ力押しにやっているだけね。」

「えっ。 どういうことですか?」

青紫の髪の小さい子が兄を応援する声をとめた。

「氷介くんは自分のコントロール能力を生かして、安定感のある正確なプレイをする。」

一方氷也君は、タックルの当たりも強く、スピードもまるで風のように。

：コントロールのあるプレイなんて、する必要はないと思ってる。

「? : なして?」 「自分はもともと強いから。」

首をかしげる青紫の子には目もくれず、氷介と氷也の特徴的な外見を見つめた。

「いっけええーっ!!」

ググググッ：ギュウン!

ゴール前、氷也は高くジャンプして、ボールに回転を掛ける。強い回転を掛けられたボールは、一直線に相手ゴールへと突き刺さる。

地面を巻き上げ、粉雪をまといながら。
ギュオオオオッ!!

「うっ、うわああーっ!!」

ドガアアーン!!

GKは吹き飛んだ。そしてボールは荒々

しく回転しながらー
ピーーッ!

「ゴール!」

ワツと歓声上がり、氷也のもとへ氷介と紫の髪の子が駆け寄る。氷介は氷也の手を握り、縦に力強く振った。

「やったね氷也あ! おめでとう、おめでとう! 1点取れたんだよーっ!」

「すんごかっただ! シュート、上手いんだべな。かっこよかったべ!」

氷也はふたりが笑うのを見ると途端に安心し、自分も笑った。

『よかった。チームの奴らに恨まれるだけじゃ、たまんねえもん

な。』

「あったりまえだろ？ あんなGKもクリアできないようじゃ、役に立たないからな。」

得意そうに語る氷也のもとへ、忌々しいと言うような顔で冬紀が来た。

とたんに氷也も氷介を押しつけ、冬紀の顔を見据えた。

「…何だ？」 「―いきだ…」 「あ？」 「だから―」

冬紀がチラリと後ろを向くと、息吹兄弟の親、それに監督の腕を組む姿が見えた。

それを確かめると、冬紀は出かかった言葉をおさえる。

「うるさいな、なんでもない！」 「はあっ？ じゃあ、理由もないのに話しかけんなよ。」

「んだと！ うっ…っアアッ！！」

冬紀はやきもきしながら、その場を離れた。

ファイヤーバードのベンチには、キャプテンが弟とともにフィールドを眺めていた。

「幼いころから、よくもまああれだけのテクニックやパワーが出るもんだな。 ソラ。」

「そうだねえー、トキにいさん。」

将来性超あるある。 モチロン、危険って意味も含んでね。」

そのふたりはそっくりの顔立ち、そっくりの身長だが、目は…太陽と、月のようだった。

「さて…後半は、わたしたちが出よう。」 「やったあ！ 試合を
しているの？ 本当に？？」

「もちろんさ。」 「やったあ！！」

太陽の目をした弟は、無邪気に笑う。

「お疲れさま、氷也。 ナイスシュートだったよ」

汗を拭きながら、氷介はベンチに座った。

「おう！ にちゃんもスライディング上手くいって良かったな！」
「ふふっ。 うん、ありがとうー」

と、とてとてと小さいほうの青紫の子が歩いてきた。

「あ…。」

「…すっごくよかったべ！ おら、こんなサッカーうまい
ヒト、初めて見ただ！」

そう言って尊敬の目で、息吹兄弟を見上げた。

「は、はあ…」 「あっ！ 言い忘れてただ。 おら、深川士郎っ
て言うだ！」

弟を見つけて、兄がやって来た。

「あのー、これからよろしくだ。　おらは、深川雪也って言うだ。」

おらのパス、受けてくれてうれしかったべ！」

「あ、ああ…。　…お前ら、何歳？」　「え？　ああ、おらが8歳で、弟の士郎が6歳だべ。」

「…身長差ありすぎんだろ！」

雪也は8歳のわりには身長が極端に高く、士郎は6歳にしては身長が極端に低い。

（パツと見、雪也は140？、士郎は1mあるかないかぐらいだ。）

「あはは。　まあ、体質だからしょうがないべさー。」

「おらもちゃんと同じ様な生活しとんのに、なしてかおらはちびっこいんだわ。」

4人がワイワイ話すのを、冬紀は不愉快そうに見ていた。

「キャプテン、後半戦はー」　「あ、なあお前。　試合が終わったらでいいんだけどさ…」

後半開始5分前。　ファイヤー・バードは、ふたり交代をしていた。ふたりは双子に近づいてくる。

「やあ。　君たちが新入りなの？」　「え？　うん。」

ふたりはスツと、右の子は右手を、左の子は左手を差し出した。

「はじめまして。　僕らも双子なんだ。　僕は弟のソラ。」

「わたしは兄のトキだ。　いい試合をしよう。」

なるほど。ふたりは確かに双子だ。ふたりとも美しい銀髪で、同じ顔をしている。

だが、瞳がトキは銀色、ソラは金色を帯びていた。

「うん、よろしくー。」 「はあっ？ ったく…」

氷介は迷わず可愛らしい笑顔で、ソラの手を握った。

「うーん。 やっぱり僕らや君たちみたいに、美しいとか可愛いのは罪だねえ。」 「え？」 「ふふふふ。」

ソラは美しい顔を、笑わせるばかりだった。

「君も笑ってみてはどうなんだ？ 心が安らぐぞ。」

「断る。 何でお前に命令されなきゃいけないーんだ。」

「ひよ、氷也あ！」 「うるさいっ。 握手だけでも感謝しろっ！」

氷也は真っ赤になって、ふいっと背を向けて行ってしまった。

氷介はそれを追いかける。

「あっ！ 氷也ーっ。」 「…やれやれ。 飛んだ恥ずかしがり屋

さんだなあ、弟くんは♪」

「おい、ところで何双子とか言ってるんだ。 適当なことを言っ

て！

「まあまあ、いいじゃないかあ。 二百垓歳しか離れてないんだからさー」

「二百垓歳ではない、百九十六垓歳だ！」

「たいして変わんないじゃん。」 「大きな違いだ！」

トキの拳をひらりとかわすソラの顔は、少年そのものの笑顔だ。

『ふっ…。 思いだすよ、はじめて私が呼吸する生命を作った時のことを…』

「あははっ。 拳が遅いよ、にいさん！」

「後半、開始！」 ピーーーーーッ！！

FWのキャプテン・冬紀が雪也にパスを出す―
だが、そのボールは雪也のもとへは来なかった。

―バシイッー！！―

素早くソラが、パスカットをした。 そのスピードは、他の選手とは別格だ。

「なっ?!」 「うわっ?! 速エー！」

「ふふふっ、これくらいで驚いてもらっちゃあ困るねえ。 にいさん、上がって！」

「もう来てるさ！」

いつの間にかソラの近くには、トキが走って来ていた。
おもしろそうに、氷也が雪也に話しかける。

「へー、やっとおもしれえのが出てきたな。」

「んだ、さすがは兄弟だべ。 パスが早すぎるだ…」

スピードもトップクラスで、あっちゅうまにマークも振り切っちゃま…あ?」

隣に氷也の姿はない。 既に氷也は――

「ゴールなんかさせねえっ!」 「ほう…中々良い足をお持ちのようだね。」

ボールをパスされた、トキのスピードに追いついた!

「当たり前だ! さっさと ―よこせーっ!!」

ズザアアーッ

氷也はトキにスライディングをしかけてきた。 トキはそれをボールごと受け止める。

ググググッ…

「くっ…僕の足を壊す気かい?!」 「足退けろおーっ!!」

トキは氷也の足の力に耐えながら、

ボールを止めている左足を、少しずつ氷也の方に近付けていく…
そして、 ―ドカツ!!

「ソラあ!!」

氷也の足に触れる寸前、ボールをソラの方へ無理やり曲げた。

ボールは氷也の強いスライディングで、素早くソラのもとへ―。

「ああっ! チィッ!」

氷也はすぐに立ち上がったが、もう遅い。

ボールはソラに向かって、一直線に進んでいく!

—そのとき—

「ボールはわたさないよ。」

ソラに向かって走るボールを、今度は氷介がパスカットした。

「——！！ い、いつの間にDFラインから前線に上がっていたんだ？！」

ボールを奪おうとする選手を、引きつけてからかわす氷介が答える。

「え？ 最初っから上がって待ってたんだ。 絶対——」

今度はソラもかわしていく。

「君にパスすると思ってね。」

そう言って、氷介は白い髪を自慢するように、くるっと回ってよけ、ソラに優しい微笑みをかける。

「このオッ……！！」

ソラは珍しく怒り、顔を真っ赤にする。

「兄ちゃん！ 早く！ 前にパスだよ！！」 「うん、わかった。行くよっ！」

「させるかぁ——っ！！」 「わあっ？！」

ササッと、トキとソラがマークについて来た。

「ゴメンねえ。 僕、負けるの大嫌いなんだ!!」 「そのボール、渡してもらおう!!」

「…ふふっ。 ボクこそゴメン。 それは聞いてあげられないや。」

ガッ、 ぽおーん!

氷介はボールを空高く蹴り上げ、続けて自分もジャンプした。

『そうか、空中からパスするつもりだな!』

「もらった!」

ソラも空中へ飛び出すが、氷の方が速い ガシッ!!

氷介は足をめいっばい伸ばし、オーバーヘッドで左足がボールを捕らえた。

『よし、あとはこのままロングパスで…あれ? 氷也が、いない—』

「早くしろよっ!」

氷也はボールを奪おうとしに来てたのか、トキをマークしていた。

「ひよ、氷也っ?!」

慌ててコントロールを怠り、

ボールはファイヤー・バードのゴールから、2, 3 mのところに転がった。

「何やってんだよっ!」 「ゴ、メン。 でもさあ—」

「何だあ? 絶好のチャンスだったのに—」

「早く! 早くボールを取れえーっ!!!」 「」

地上に戻って来た氷介を笑おうとする冬紀の声が、トキとソラの声にかき消された。

ゴールの周りにはG Kしかおらず、選手は走った。

そのすきに、G Kはゴールを離れ、ボールを確保した。氷也は――

「邪魔だどけえーっ!!」 「なあっ?!」

一直線に走って行く。そして、G Kを抜き去った。砂煙が立ちこめる…。

しかし、G Kの足のボールの感覚は消えない。

「え?」 「何しに来たんだよ、オイ!」

アハハハハ!! G Kは笑った。が、

「ハアーツ、ハッハッハッ!!」

氷也がそれに負けない声で笑う。そして一言、言った。

「ボール見てみる。」 「……あ?」

G Kは…土を踏んでいた。

氷也がG Kを抜き去る時、地面をボールの高さまで盛り上げていたのだ!!

見れば氷也がニヤニヤしながら、ボールをキープしていた。

「そんな…あの一瞬で、こんな器用なことが…?!」

「まさか、こうも簡単に抜きされるとはなあ?」

トンッ。ボールは軽く押し出され、ゴールに入った。

「ゴォール!!」

これで2対0。GKは尋常じゃないその強さに、驚いていた。

「うっわー、ここまで強いとバケモノだね。」 「またはー、狩りをする狼のようだな。」

「…ごめんなさい。もう、2度も入れられてしまいました…」

「気にしなーい、気にしない♪ 今度はぼくらが点を取るからさ♪」

ピーッ! スローインは、ソラ。

誰もいない所に投げると、食らいつくようにトキが奪い去った。

「よし、シュートに行こう、ソラ!」 「いいよーにいさん♪」

「DF守れ! 行かせるなーっ!」 「無駄だって!」

ふたりは上下前後左右のパスを使って、あっという間にゴール前にあがってきた。

「ふふ。チョろいね。」 「行こう。」

ふたりは同時にジャンプして、ソラがボールを高く蹴り上げた。

トキは左足に眩い月の光をまとい、ソラは右足に強い太陽の光をまとい、とっていく…。

ボールが落ちてくると同時に、トキとソラは足を大きく反らして—

「―シャイニング・ショット!!―」

銀と金の光をまとったボールは、一直線にゴールへ飛んでゆく!!
冬紀が茫然として、口を動かす。

「…これがファイヤー・バードが無敵の理由のひとつ…シャイニング・ショット…」

ゴールへ飛ぶボール、眩い光。そして、ゴール前の人影…

「って、氷介?！」

『ボクが、防がなきゃ!!』

氷介は目を閉じ、胸をおさえ、深呼吸する。

『大丈夫、大丈夫…ボクなら…できる!!』

氷介は目を開くと、パッと微笑み、手を伸ばして回転する。
とたんに氷介の周りに吹雪が吹き荒れ、ボールを包み込んでいく!
!―

「何っ?! 回転が…」 「弱まっていく…!」 「―ブリザー
ド・ウォール!―」

氷介はくるっと一回転すると、吹雪が解けたボールをももて受け止めた。

氷介はもっと笑顔になり、嬉しそうにジャンプした。一緒にボールも舞い上がる。

「やったやったあ！　とうさーん、かあさーん！　ボク、役に立たよー！！」

そう言ってまた、両親へ手を振った。

『やっぱ、スゲーッ！　にちゃんはボールをコントロールすんの、俺よりうまいな！』

ベンチの士郎は大興奮。

「わあっ！　凄いわ！　すごいわ！　カッコいいわさーっ！！」

水介はそのままドリブルを始めた。　走らず、歩くように。

「こいつ…いい気になるなあっ！！」　「ふうっ。」

ひとりがスライディングをしてきたが、飛び越えてよけると、続ける。

それを見たトキは、チームに命令した。

「ほおう…行け！　水介くんからボールを奪って見せろ！」　「はいっ、キャプテン！！」

「うおらあーっ！」　「よっ、と。」　「それえっ！」　「はっ。」
「くっそおーっ！！」　「ゴメンどいて。」

何人もボールを奪おうとしてくるが、

水介は相手のスピードを逆手に取る様に、どんどんどんかわしていく。

ボールも落とさずにかわすので、まるでボールが身体に付いてるようだ。

監督がそのプレーを、興味深そうに見ている。

「氷介くん…ドリブルもディフェンスも、あの歳でここまで高度だとはね…」

すでに背後には、ぶつかって自滅したファイヤーバードの選手たち。さらにかわしながら進むと、トキとソラが仁王立ちしていた。

「あっ。」

「凄いねえ、君たち。」

僕らの上に行くプレイヤーって、初めて見たよ。君も、シュートを打つの？」

「ええっ?! うーん…でもボク、出来るかどうか…」

「…必要と、されたいんでしょ?」 「うっ…。」

『そう、だけど…。シュートを決めなきゃ、ダメ、なの…?』

「いいからうちなよ。わたしたちは君のシュートを見たいんだ。」

トキが銀色に輝く月の瞳で、氷介を見つめる。氷介は思わず、目をそらした。

「―。じゃあ…いい? 氷也。」 「どーせこいつら以外ザコだろ? 好きにしろ。」

「ん、ありがとう…」

氷介はゴールへ向き直ると、ゆっくり、ドリブルを再開した。G
Kはとたんに身構える。

「―ふうっ…。」

コオオオオツ… 息を吹くと、氷介の周りに冷気がまとっていく…。

『やらないきゃ…。』

氷介がそうしている間に、

気絶していたファイヤーバードの選手たちが、次々と目を覚ました。

「ううっ…あっ！ あの狼野郎、ノーマークでシュートだぞ！」

「あ、ホントだ！」

「でも、なんでキャプテンとソラは止めようとしなんだよっ？！」

選手が2，3人立ち上がって、氷介からボールを奪おうとしたが…
ぴきっ。

『うっ…。 ああっ、ダメだ…！』

「いたっ、い… うわああーっ！！」

ーキイイーーン。ー ビュオオオオオツ！！

「！?! つうわあっ！！」

それはまるで、氷介自身の身体に冷気が襲いかかっているようだった。

「ダメだ、近づくこともできないって…」 「キャプテン！」

トキとソラは、頭を抱える氷介を、腕でガードしながら見ていた。

声を張り上げないと、会話ができない。

「すごいねエー、にいさぁーん!!」

「ああ、そうだなぁーっ！」

しかし、あの冷氣…ブリザード・ウォールと似ているようで…、違う!」

「DFとしての彼と、

シュート技がうまくコントロールできなくて、だからシュートが失敗するわけえー?!」

「だろうな! それに…よく、ごらんよ!」 「?? うわぁ…」

ワオオオーン…

氷介の背後には、白銀の狼の幻影が現れた。

キラキラと輝く体毛、エメラルドのような澄んだ瞳…

『!!! 白銀の狼…あの童話のとうりだ! …美しい…。』

そこにいたヒト全員は、その美しさに圧倒された。 トキやソラも、例外ではない。

『ううっ…痛いよお…手足が、もう、…傷だらけだ…。 いつになったら、終わるの…?』

「にいちゃーん!」

苦しそうに呻く氷介の耳に、微かに氷也の声が聞こえた。

『!?! 氷、也?…?』

「早く打てよっ、しっかりしろってば！」 「ハアッ、ハアッ…氷也…うん！」

氷介は襲いかかる冷氣に必死に耐えながら、それを振り払うように、ボールを高く蹴り上げた。

「GK？ くるよ。」 「はっ、はい！ 今度こそ止めます！」

『…その心意気はいいけど…これはさすがに — 無理だよ！』
『ボクだって、もっともっと役に立ちたい。 弱かったら、ダメなんだ！』

「うわああー！ーっ！！」

グウオオー！ー！！

氷介の苦しい叫びとともに、冷氣をまとう狼は唸り声を上げる。
ボールはカッと光ったかと思うと、青白い光が強くなって行く…
氷介は身体を回転させると、その勢いで左足をボールに叩き付けた。
ドオオッ！！

「ぐうっ！」

力一杯叩きつけたボールから、電流が流れるような鋭い痛みが走る。

「はぁ、はぁ………いつ、けえーっ！！」

ギョオオオオオオオオッ！！

ボールは狼とともに吹雪を纏い、ゴールへと素早く駆けて行く。

「おおおっ！！！」 「う、うひゃああっ！！！」

GKはもうすでに、逃げの体制をとるほどだ。

『君…今度こそ止めるって言ってたくせに…。』

氷介は、まだ痛みに耐えていた。ゴールを決めようと、必死だった。

『ううつ…ダメだ。これ以上、耐えてたら…』

ビキイツ！ バシイツ！ ズキイツ！

「うわああああああーっ！！」

パン！！

ボールは空中で破裂し、幻影は消え、白と黒の布が舞った。

それでも氷介のまとう吹雪は消えず、

身体がカマイタチで裂かれたように、長い傷跡ができた。

それがまた吹雪によってえぐられ、余計に痛みを増幅させる。

「痛い、痛いよおーっ！！　ねえ、誰かぁ……………誰かぁーっ！！」

「あは…あはははははははっ！！」

面白い…　自分が自分を傷つけるなんて、哀れなものだねえ…

あはっ、はははははははは！！！！」

トキはまるで映画でも見ているように、楽しげに笑っていた。

だが、その顔は無邪気な笑顔ではなく、他人の苦しみをからかう顔だった。

「――!! 氷介くん、もういい!」 「――?! に、兄さん?!」

トキは氷介の巻き起こす吹雪にもかまわず、まっすぐに駆け寄る。
その顔は、――明らかに、心配していた…。

「兄さん、何してるのさ? 試合に勝つチャンスじゃないか! 放
っておけばいいんだ!!」

「――! うわあっ!」

ファイヤーバードの選手のひとりが叫んだ。――ジャキンツ。
ソラは右手を伸ばすと、どこからか短剣を取り出した!!

「こ、こらっ! 何をしようとしている…!」

「…兄さんもなんだかんだ言って、情に流されるような奴なんだ…
…つまらないよ。」

いつまでも兄さんがうじうじしてるようなら、僕が――

「ざけんなあーっ!!」 「――?! 君、何を―― がっ!!」

ドガアッ!

氷也がソラの右手を蹴り飛ばすと、短剣は地面に落ち、砂となって
消えた。

「くっ、邪魔するんじゃない!」

「するわ! 今の…兄ちゃんに何するつもりだったんだよ! 10
文字以内で答えろ!」

「ふんっ、無理だよ。…君には関係ないだろう。」

「てめえ――」 「氷介くんしっかりするんだ!!」

トキは氷介を助けようと、傷だらけになっていた。
吹雪に耐えられなくなって倒れた、氷介を抱えて。

「トキくん… ボクは、平気だから… は、離れた、方が…いいよ。」

さっきまで助けを求めていた氷介は、

自分が相手を傷つけているのがわかると、その思いやりをこぼんだ。

「何を言っているんだ！ こんな状態で、放っておけるものか！

大丈夫だ、僕が何とかしよう。

—はあああああああ

っ！」

「??」

—バチイッ！

その途端、ふたりの身体はガクツとなって、吹雪は雪にかわり、辺りに散った。

「にいさ… 何で…」 「…っ、ぐうっ！！ はあ、はあ…」

「あ、あれ…トキくん、何で、苦しそうな…？」

「あ…何でもないよ。」

全く、だらしがないな…マフラーがずれてるよ… ……はっ！

こ、これは…」

トキは【それ】を、すぐにマフラーで隠した。 ソラがそれに気づき、覗こうとしたから—

『やけにうまく治せたと思ったが…なぜ、君が持ってるんだ…？』

「氷介！」 「ハッ。」

ベンチから様子を見ていた雪江たちがやってきた。

「あ… かあ…さん…。」 「…何とも、なあい？」 「うん…。」
ボク、平気だよ。」

『ああ… あなた、お父様…この子、あなたたちと同じだわ…』

「氷介！ どうしたんだ、大丈夫か？」 「ち、近づか、ないで…
！ 怪我しちゃうよ…。」

「もう平気だって。 ほら…冷気が消えてる…。」

瞳監督は所々怪我をしている氷介を一目見ると、こういった。

「…氷介くん、ベンチに下がってて。」

「—！！ え…そんな、初試合なのに…ボク…いやです。 大丈夫、
です、から…。」

ポン。 皮膚がむき出しになった氷介の肩を、トキの手が軽く叩いた。

「今は…自分の身体を第一に考えるんだ！」 「でも…」 「さっ
さとベンチ行けよザコ！」

そう言って見下すのは、氷也。

「氷也… でも、ボク、やりたいよ…
それに、君だって、疲れてるだろ？ 2回もシュートしたんだか
ら…」

それは確かに真実だった。 氷也自身も息切れしながら言葉を発している。

「うっ…うっせー黙れ！」

ろくにシュートも決められない、オレと兄ちゃんは違うんだよ。
役立たず！」

「―うっ…」

氷也は冷酷な緑の目で、言い張るばかりだ。

『ボクは…役立たず…？』

腕や足には細長い傷がたくさんあり、そのほとんどが赤い液をにじませている。

自分の身体が思った以上にボロボロ…と言うより、傷だらけだ。

『氷也の言うとうりだ…こんな状態じゃあ、皆の足を引っぱっちゃうだけだ…　ボクは…』

「わかった…ベンチに行くよ…」　「氷介、ちゃんと歩ける？」

「うん…あ、りがとお…」

氷介は両親に手をひかれて、ベンチへと歩き出した。

「あつ。　氷、也。　あのさ…」

氷介は振り向いて弟を呼んだが、後ろ姿しか見ることができない。
氷也は背を向けたままだ。

「無理、しないで…ね！　疲れたら、頼ればいいんだから―」　「うっせーよ！　さっさと行けえっ！」

びくっ。

氷也の声からは、イライラした雰囲気伝わってきた。

――怒っている。――

誰かに怒ることはあっても、自分にこんなに強く怒ってくることは初めてだ。

「……うん、ゴメン。」 「…チッ。」

氷介はまた、支えられながら歩き出す。

その背中がどこか寂しそうだったのは、氷也は知らない。

「――いたっ！ もう少し優しくやってよ…」 「うあつ、すまねえだ！ 手元が狂っちゃまって…。」

ベンチに行った氷介は、士郎から手当てを受けていた。

消毒液を付けた脱脂綿をピンセットで傷口に付けて拭いていたところ、

誤って傷口の中にピンセットの先が入ってしまったという訳だ。

慌てて抜きとると、さらに激痛、さらに出血。 珍しく氷介の叫ぶ声。

「ぎゃあーっ！！」 「あわわわわっ！ ご、ごめんなさいだあ、わあああああっ！」

呆れる瞳監督は、手伝おうとした息吹家夫婦をとめた。

「あのくらいもひとりでできないようでは、マネージャーは務まりませんから。」

「え？ でも、彼は選手じゃ…」 「今は、候補です。」

士郎の不器用な手当てを、氷介は痛みを堪えてうけていた。

5・初めての、嘘。

氷介たちに声が聞こえないように、雪也が氷也に耳打ちしてきた。

「あ、あの、氷也くん…。」 「何だよ。」

「氷介くんは、君のことをしんぺえしとったんだべ。 んだのに―」

「黙れ。 お前も兄ちゃんと同じお節介かよ」 「ん、んなふうに
言わんでもええだらあ！」

そこへ、冬紀がやってきた。

笑いたいのを堪えてるのが、口元の引きつり方でわかる。

「何だよ、ケンカしてんのか？」 「っ。 何だよその言い方はあ
っ?!」

「キレて試合に悪影響出すんじゃないぞ？」

「ハイハイ、わかってますよ！ FWのくせに何にも出来ないザ・
コ・キャ・プ・テン！」

氷也は冬紀に背を向けざまに睨んだ。 冬紀は凶星を突かれて頭に
血が上る。

「キャプテンになんて口のきき方してんだよ!!」 「ザコにザコ
つつって何が悪い！」

「試合が再開されるわよ！ フィールドをよく見なさい！」

瞳監督がベンチから立ち上がった。 今度はトキがボールを構えて
いた。

「後半は残りわずか。 だからって気を抜くんじゃないわ！」 「

は、はい…。」 「…ん。」

氷也はまた、「ん。」しか言わなかった。

「おい、お前はそれしか言えねえのか？」 「来るぞ。」 「は？
何が―」

ドオツ！

トキとソラが、一気に上がってきた。

ついさっき氷介を助けて、疲れた筈のトキも、前半と変わらない動きを見せている。

そして今また、驚異的なスピードで上がってくるのだ。

「あははは！ シュートを決めずに終わるのは、さすがに嫌だねえ
！」

「攻めなければ、絶対に点を決めることなど不可能！」

ふたりはまた、ゴール前で高くジャンプした。

「「シャイニング・ショット！！！」」

ギユウウーーン！！

立ち向かおうとするDFを、ふっ飛ばしながら進んでくる。

光の牙が、今度はしっかりとGKへ襲いかかって行く。

気弱そうな茶髪の少年は、ゴールから動かなかった。

絶対に止めようという意志もあったが、恐ろしさで動けないのもあった。

『み、皆だって頑張ってるんだ。 お、おれだって…頑張―』

——ヒュッ。 トッ。

シュートを打ったトキが、美しく地面へ舞い降りた。

『——！！ は、早い！』

ワープしたよう素早さだ。 トキはその場で左手を上げ、堂々と言った。

「ふう……。 はむかわず避ける。 死にたくなければね。」 「えっ——。」

ずごおおおっ——！！

「うっ——！！」

ボールがゴールへ突き刺さる瞬間、すさまじい衝撃波が生まれる。その衝撃波の中で、トキとソラが仁王立ちしていた。

「氷介くんがいなければ、」 「何度やってもこの程度か……。」

バリバリバリイッ！ ズウ——ン！

ふたりのシュートはゴールに突き刺さり、網ごと突き破ってしまった。

「ゴール！」

トキとソラは壊れたゴールに背を向けると、ハイタッチ。

「やるねえ、兄さん。」 「ふっ、それはわたしの台詞だ、ソラ。」

そこにいた選手たちは、ただ黙って薄く煙を立てるゴールを見つめていた。

氷也も目を見開き、呆然と立ち尽くしている。

「残り時間は？」 「あと…1分しかないよ。」

「そうか…まあ、わたしの見たかったものは見れた。 満足と言えよう。」

「にさんは欲が無いなあ。 恐ろしいくらい。
ま、シュートも決められて気持ちよかったし、
よくよく考えたら始末する時のが楽しいもんね！」

周りのヒトには、その会話が何を意味しているのかわからなかった。
GKの茶色い髪の少年は、身体を強張らせて、まだ荒い息をしている。
氷也はそいつの所へ歩いた。

「…おい。」 「ふううつ…うつつ…」 「おい、もうシュートは
終わったぞ、おい！」

肩をバシッと叩くと、一回ビクッと震え、それから叩いてきたヒト
を確かめた。

「ああっ！ ご、ごめんなさいいっ！！ ま、また、止められませ
んでしたあああっ！！」

「ええっ?! お、おい…別に攻めてる訳じゃあ—」 「どけ氷也
！」

そう言って押しのけたのは—、冬紀だった。
冬紀は茶色い髪の少年の頭を、ポンポン、と軽く叩いた。

「あっ…キャ、プテン…。」

おれ、怖くって…トキさんの言うとうりに、少し、避けちゃったんです…。

GKは、ボールを止めなきゃいけないのに…ごめんなさい…。

皆も、ごめん…ひっく、ひっく…」

茶色い髪の少年は責任を感じてか、

それともボールから逃げた自分が悔しくてか、泣き出してしまった。

「大丈夫だ、誰もお前を責めたりしねえよ。」 「え…？」 「！」

氷也は少し驚いた。 冬紀がその子に向かって、優しく笑っていたからだ。

「頑張れば、いつかは止められるよーになるって！」

「お、おれも…シュートを、止められる、時が…？」

「ああ！ だからよー、いちいち泣くなって！」 「…はい！」

「よし、じゃあ再開だ。」

その子は涙を手の甲でぬぐって、いい笑顔をした。

「…?! 何だよ、何笑っていやがる！」

「お前がなんでキャプテンなのか、少しわかった気がただけだ。別に気にしなくていいぞ。」

「はあっ?! み、見てんじゃねーよ！」

冬紀はそう言うと、自分のポジションに着いた。

『あいつ…ほんとには良い奴なのかもな。 一応仲間にも慕われてる

みたいだし。

：まあ、俺に優しくすることは絶対ねえな。俺、あいつらと違うもん。』

試合再開後、すぐにホイッスルが鳴り響いてしまった。

「試合終了！ 結果、2対1。チームブリザードの勝利！」

その結果が言われた直後、ブリザードの選手たちは歓声を上げた。それと対照にファイヤー・バードの選手たちは、誰もが驚きの表情を浮かべていた。今まで全勝無敵だったチームが、いきなり全敗弱小のチームに負けたのだから。

「キャプテン！ ついに、ついに初勝利ですね！」 「だな！ みんな頑張った頑張った！」

その楽しそうな仲間の輪の中には入れない氷也は、外側から寂しい目で眺めていた。

「氷也さーん！」 「氷…也ー！」

声をかけられて、驚いて振り返ると、雪也がいた。後ろから来るのは、士郎と、

「あ、雪也…士郎…にいちちゃん。」 「手当て、いちおー終わっただ〜。」

氷介が小さな士郎に手をひかれてやってきた。

だが、士郎の歩き方は若干危なっかしく、見てるこっちが冷や冷やする。

「士郎くん、ちょっ、歩くの少し速いよーわっ！」 「わあっ！
あ、あんぶねえ！」

どたっ！

怪我をしている氷介は士郎の小走りに追いつけず、
躓いて転びそうになったが、士郎が慌てて滑り込み、かわりに下敷
きになった。

：そんな感じで倒れたのである。

「わわっ！ 士郎ー！」 「あっ！ し、士郎くん？！ ゴメン、
乗っちゃってて…だ、大丈夫？！」

「……おもしろい状態だなあ、おい。」

「ククッ。 きっといつもバクバク食ってんだぜ、アイツ。 んで
重くて潰してやがんのー！」

冬紀がこれを見てさも愉快そうに、他のチームメイトと笑いあった。
そう言われた氷介は、すぐに士郎から降りた。
氷也はカッとなって冬紀にガン飛ばす。

「冬紀……お前はそんなふうにしかな言えねんだな！」

「ああ？ 重いのは本当のことだろ？」

「もっと重い奴なんか腐るほどいるわ！」 「やあーい、食いしん
坊！ 重いんだよ！」

「もうっ！ 重い重いって……ふたりとも黙ってよおーっ！ うっ、
うわああゝん！」

氷介の顔は涙でぬれてる上に、真っ赤だった。 しかも珍しく怒っ

ている。

氷也と冬紀は想像してなかった反応に、戸惑いながら顔を見合わせた。

どちらも冷や汗をかいて、泣きだす氷介を、どうしようか、という顔。

「士郎くん、ごめんねっ。　ボク：歳、上だもんね。

ううっ、重かつ、たよね？　ごめんね、ぐすっ…どこか、怪我してない？」

「い、いや、おらはだいじょんぶだべ！

それに、氷介くんは怪我しとったのに、転んでまた怪我したら大変だべ？」

「えっ？　…こんな、ボクのこと…心配して、くれてたの…？」

「あ、当たり前だべ！　同じチームメートなんだから…そだべ？」

「うん…ありがとう。　ごめんね、士郎くん…優しいね。」

なんだか氷介と士郎の周りにだけ、

ほのぼのとした空気が漂っているのは気のせいだろうか。

「――って何であいつらオレたちほっという自分たちだけ楽しそうなんだよ！」

「いや、俺に言われても困るし。」　「お前兄弟だろ?!」

「楽しそうでよかっただろ。　あつ、そんだそんだ、氷也さん。」

「ん？」

突然雪也は、頭をぺこりと下げた。　氷也はもちろん、冬紀もびっくりだ。

あの得体の知れないヒトと呼んでいいかもわからない氷也に、頭を下げてるのだから。

「お疲れ様ですたー！」 「は、…は？」

「今回勝てたんは、氷也さんがけっばって2回もシュート決めてくれたからだべ。」

ほんに、ありがとだ。 あんなシュート打てるなんておら、尊敬してまうだ。」

「…へっ。」 「な…、なんだよ。 気持ち悪い…」

氷也は、少し元気になったようだ。 その証拠に、笑っている。 くりりと冬紀のほうへ向きなると、質問した。

「お前、何キロ？」 「えっ…に、20…」 「兄ちゃんと俺は19.5キロ。」

氷也は勝ち誇ったように、にへっと笑った。

このチーム、ブリザードは活動後に反省会みたいなものがあるらしい。

「今日は初めてこのチームが勝利を収めた日でも、ファイヤー・バードが初めて負けた日でもあるわ。」

私も、それを誇りに思う。 それと、今日入ってくれた氷介くんと氷也くんだけど、」

みんなの視線が一斉に、氷介と氷也に向けられた。

「氷介くんはDFに、氷也くんはFWにします。」

氷介くんのディフェンス能力と氷也くんのオフENSE能力の高さは、

確実に即戦力になると思うの。」

氷介と氷也はそう言われて、照れくさそうに顔を赤らめた。
だが、皆の顔はいまいち乗り気ではない。
やはり、自分たちと違う、というのが引っ掛かってるのだろう。

『にいちちゃん。』 『ん？ どうしたの、氷也。』

『やっぱり：雪也とか以外には、嫌われてんのかな、俺たち：』

「あなたたち、まだ何か言いたいことでもあるんじゃないの？
余計な考え事は、試合の妨げになるわ、言いなさい！」

ふたりはその声の持ち主を見上げると、瞳監督が腕を組んでいた。
その声は凜としていて、正しい正義を持っている。

『監督：。』

選手たちはその声に怖気づいてか、ざわざわと相談が始まった。
そんな選手たちを、監督は変わらない目つきで見ていた。

そして、あいつがサイドの選手たちに小突かれて、恐る恐る右手を
上げる。

「はい、なに？ 直太くん。」

直太と呼ばれたのは、G Kの気の弱そうな茶色い髪の子だった。
冷や汗をかいて、周りに助けを求める仕草を見せるが、誰にも気づ
いてもらえない。

「えっ、えっと：あの、氷介さんと、氷也さんは、
あの：他のヒトと、少し違うような気がして：。

い、いや！ それが、全然、悪いとかじゃなくて！！
それで、その：おれたちと一緒にプレーしてて、いいのになって

…えっ？」

氷介たちの位置からでも、冬紀が直太の服を引っぱって合図したのがわかった。

何か言ってるが、ヒソヒソ声でよく聞こえない。

『何、話してるんだろうね。』

『ふん、どーせ「何でこっちが下の立場みたいな感じなんだよ!」とかだろ。』

実際、そんな感じだった。

「何でオレたちが悪いみたいない方なんだよ!」 「ごっ、ごめんなさい!」

「冬紀くん、勝手に口を挟まないで。」 「うっ…はぁーい。」

瞳監督はため息をつく、選手全員に向き合った。

「あなたたちの考えていることは、よくわかったわ。」

実話をもとにした童話、「おおかみたいじ」の狼兄弟に、氷介くんたちが似てる点を持っているから嫌なんでしょう。」

監督の言ったことは、大当たり。

「氷介くんと氷也くんは、この童話を知っている?」 「え? いいえ…」

「そう…ここの地方に生まれていながら、知らない子供がいるなんて、驚きね。」

まあ、簡単に説明すると、大昔にこの地方で、町や村を襲う狼の

兄弟がいたの。」

その狼は2匹の兄弟で、幼いながらも体格がよく、人々や家畜を襲うことなんて、遊びのようなものだった。その行動に耐えかねたヒトたちは、2匹と戦う決心をした。だが戦いに出た後、帰ってきたのはまだ幼い少年だけだった。

「—いいか？ あそこにいるのが狼の兄弟だ。

昼間はこうして寝てるんだってよ、のんきなもんだぜ。

あいつらのせいで、おれの、弟は…父さんは…！」

「泣くなよトータ。俺だって…家族を皆食べられたんだ…っ。」

「今だ！ みんな、行くぞ！」 「おう！」 「あっ、待ってくれ！」

俺たち3人は突撃したんだ。そして… —俺以外、皆喰われた。—

「うわ…あ、ああああっ…！」

2匹は胸元を紅に染めて、俺の上に覆いかぶさる。どちらも幼いはずなのに、その幼さを感じられない。

「クルルル…（にいちちゃん、ここにも一匹残ってるぞ。 …喰う？）

「クルルル…（えー？ いいよ、その辺にほっとけば？

もうお腹一杯だし、第一こんなお腹の足しにならないよ。）」

俺は人間だから、2匹が何て言ってるかは解らなかった。

やがて血の気が薄くなり、貧血で気絶した。

「―それで、トータも、寛太も…。」

「そうか…よく、帰ってきたな。お前はここで、休むと良い。」
「うん…。おじさん、ありがとう。」 「じゃあ、ごゆっくり。」

彼の世話をしてくれている神父さんは、そう言って寝室から出た。
彼は、神父さんの鼻をすする音が遠ざかるのを見計らって、
ベットから起きると、クラクラする頭を押さえながら、部屋の奥の
銅像を見上げた。

その銅像は、窓からの月光を受け、美しく輝いていた。 神様を掘
った銅像なのだ。

「神様あ…俺たち、何にも悪い事してないのに、動物たちとも仲良
く暮らしてるのに、

何で大事なヒトを奪われなきゃいけないの??

もう、これ以上友達がいなくなるのは…嫌です。

神様…助けて下さい。 俺……ぼく、何でもするから…!」

と…、銅像が身震いしたかと思うと、眩しく光りだした!

「―うわっ?!」

「おまえのその言葉…偽りではないな…?」

よし…おまえの【なんでもするから】のかわりに、その願い、叶
えてやろう…」

「―おーい、おかゆは食べるかい? …あれ?」

そこに、彼の姿は無かった。その代わりに、勇者が立っていた。

「…狼の兄弟は、ドコだ…？」

その夜、狼の兄弟は苦しげに喘ぎ、その体を草の上に横たえた。

「凄い…あの狼の兄弟を、倒したなんて…！」 「まさに…勇者だ！」

瞳監督は、話し終えた。

「あ…、簡単にと言っていたのに、少し長引いてしまったようね。でも—」

瞳監督は、選手たちの方を見渡した。

息吹兄弟はふたりで顔を見合って、オドオドしている。

『それが、ボくらだと思ってるのか…』 『俺…そんなじゃねえのに！』

直太はその場に立ったまま、どうすればいいかわからずに立ち往生するばかり。

静かにざわめく選手たちの前で、瞳監督は高い咳払いをした。

「私は…このチームを強くしたいと思っています。

だからわたしは、外見的な障害があっても、他人と違う点があっても、

サッカーを上手になりたいという思いと、それをするためのテク

ニツクと頭さえあれば、

このチームのメンバーとして、何の不足もないわ。」

氷也はその言葉に、そっと頭を上げた。

瞳監督は相変わず、皆の前に仁王立ちしており、チーム全員を愛しそうに、微かに、笑っている。

「そして氷介くんたちにはその能力がある。

よって監督の私は、ふたたりをチーム・ブリザードのメンバーとして認めます！」

また、大きなざわめきが起こる。

さっきまでと違うのは、あのふたたりが立ってくれたことだ。

「そっだら、氷介くんらをチームメイトにしてええんだなあ？」

「ええ。」

「やったべ！ 宜しぐなあ！」 「うわあっ。」

飛びついてきた士郎を退かすと、また冷静な顔に戻っている瞳監督が、見えた。

『俺たちを…』 『メンバーとして…』 『認める…か。』

ふたりは両親以外に、はじめて「いいヒト」というものを見た気がした。

もうふたりの方を向いていない、彼女を。

「…」 「…おい。」 「なんだよ？」

「次の試合の作戦を立てるって言ったくせに、何で士郎とかはいね

えんだ？」

少し話を巻き戻すと、冬紀に「作戦を立てるからベンチ裏の小屋へ来い。」と言われ、

氷也は氷介に引っぱられながら来た訳だが、人数がどうも少ない。冬紀と、他2名のみだ。

「はあ？ そんな当たり前だろ？？ あいつらはとっくに帰ったって。」 「え？ 何で？」

氷介の状況把握の遅いことが、一発で判る発言に、冬紀は苛立って舌打ちする。

「…うぜえな。 まだ気付かないなんて。」

「ふん。 まあ、今に始まったことじゃねーな。」

氷也は思い出してるのだろう。 白鳥幼稚園での出来事を。

「もー、氷也まで…変なの。 さっ、じゃあ作戦会議始めようよ！ 士郎くんたちには、また今度話せばいいし…？ あのー…冬紀くん？」

振り返る氷介の眼は氷也とは違い、何の疑いも野心も感じ取れない。ただ、きよとんとした表情で、緑色に澄んだ眼を、瞬きさせるだけだった。

『なんで…なんでこいつはこんなに疑わないんだ？ 普通変だって思うだろ？』

自分らはふたり、あいては大勢。 オマケに味方もないってのに！！』

冬紀は面倒臭くなって、左足のかかとで地面を3回蹴った。 彼が決めていた合図だ。

名前も知らないふたりの選手が、さっと立ち上がる。

「なあ、冬紀はな？ お前らのおかげで勝てたなんて思っちゃいな
いって。」 「？」

「ただ、バケモノが試合に参加しただけだって。」

「――！！」 「―え あ…それは…ボク、そんな…」

バケモノ。

その言葉を聞いた氷介は、笑顔が消え失せ途端に俯き、氷介は怒ったように唸り声を上げ、狂ったように泣きだした。

「うわあああああああああ！」 「?! 氷也、どうしたの？」

ガッシャーン！

氷也は突然、傍にあったボールの入った籠をひっくり返し、自分を「バケモノ」と言った相手に叩きつけた。

それだけでは収まらず、氷介の叫ぶ声も聞かずに、逃げようとした冬紀の背中に飛びかかって、殴る、蹴るの暴行をふるった。

「やっぱ来んじゃなかった…サッカーなんかやんなきゃよかった！
キレイだ、キレイだ、お前らみいーんな、大ツツキレイだ！！」

深い緑の瞳から大粒の涙がいくつもいくつも落ち、首元のマフラーを濡らした。

「氷也！　お願い、やめてよ、やめてよ！　ケガしちゃうよおっ：ねえっ、ねえっ！」

「兄ちゃんはあるち行ってる！　俺は今殴んで忙しんだっ！」

がしっ！　他にいた選手たちが氷介を押しつけて、氷也を引っぺがした。

「さっきはよくもやったな！」　「おれの友達いじめんなよ！」

氷也はパツと跳ね起きて、すぐに体制を立て直そうとしたが、ふたりがかりで床に押さえつけられた。

蹴り飛ばそうともがくものなら、ふたりの足で踏みつけられて、動かせない。

「~~~~っ：　退けよっ！　邪魔だアってんだろーっがっ！！」
「退いたらまた暴れるだろ？！」　「うううっ：いってえなあ：。」

氷也を抑えつけるふたりの後ろから、手足に打撲を作り、頬の腫れた冬紀が立ちあがった。
フラつく足取りで頭をおさえ、涙をため込んだまま立ち上がった。

「あっ、」　「それ：。」

押さえつけていたふたりは冬紀の行動を察すると、パツと氷也から飛びのいた。

氷也もそれと同時に立ちあがるが、眼前には勢いよく振りおろされた、バット――

「があ――」

鈍い音が小屋いっばいに響く。 氷也は顔面をおさえたまま倒れ、荒い息をしていた。

「――！！ 氷、也……」 「もう、一発――！！」

無抵抗な氷也に向かって振りおろすバットを、ふたりが止めた。

「冬紀、やめとけて！ やり過ぎだ！」 「だ、だって、こいつ――」

「監督にバレたら大変だろ?!」 「うっ……。 ったくもお！」

カランカラン……バットは放られて、床に転がる。 冬紀たちは、その場を逃げるように去って行った。

「なあ、その怪我親には何て言うんだよ？」

「あいつらがやったって言うに決まってんじゃない！」

「あ、そっか！ あはははは……」

笑いながら帰る3人の姿が見えなくなると、 氷介はなかなか上がらなかった腰を、やっとな持ち上げた。そして氷也を起こしながら、自分を責めた。

「氷也……大丈夫……？ ……ボクのせいだ……ごめんね、ボクが――？ なに？ これ……あったかい……」

それは、顔をおさえる氷也の指の間からこぼれる、赤い液。

「――ッッ！！ 嫌だ、な、何これ？ ああ、っ……うわあああああああ――っ！！！！」

その叫び声を聞きつけて、ふたりを探していた柚彦が駆けつけた。

「あなたたち、一体何をしていたの！ 小屋の床一面に、血が付いてたわよ」

ここは瞳監督が教師として働いている校舎の、職員室。

氷介、冬紀、選手のふたりの4人は、監督に呼び出されていた。

氷也は貧血のため、道立氷洞病院で寝ている。

「…冬紀くん喧嘩の原因は何？」

「監督、俺は悪くねえよ！ 氷也の奴がいきなり飛びかかってきてオレをさあ—」

「…ふたりは？」 「そ、そうでした…」 「冬紀の言ったとおりです…」

氷介は唇を噛んで、やり場のない思いを発散しようとしていた。

「…じゃあ、誰が初めに喧嘩を始めたの？」

その問いには誰も答えなかったが、氷介以外の全員が、瞬時に彼へと視線を向ける。

「氷介くん。」 「はっ、はい！」 「誰が、誰を、どうしたのかしら。」

「なっ…なんで、ボクに聞くんですか…」 「正直に、言いそうだから。」

『それって…監督がボクのことをまだ全然知らないから、だからそう言ってるんじゃない…』

「…それだけ、ですか？」 「そうよ。」

氷介はそれを聞くと、俯いたまま口を開いた。

「…………ふ、冬紀、くんが…」

怯えた顔で、ちらりと監督を見上げた。 だが、監督は自分を見ていない。

氷介はその視線の方向を察して、慌ててまた顔を伏せた。

『冬紀くん… ……冬紀くんも、氷也も、ふたりとも怒られない説明……あるかな。』

氷介が黙っているので、監督がまた口を開く。

「冬紀くん、が？」

ビクッ。

氷介はいきなり声をかけられて、急いで考えをめぐらし、ひとつの説明がみつかった。

『これなら、冬紀くんも責められるから、氷也も納得するし、冬紀くんもたいして怒られない…』

「ぼ、ボクらに、バケモノって言って…」 「—!!」 「か、監督！ こいつの言うことなんて—」

「少しは静かにしてなさい！ わたしは誰の話を聞いているの？ あなたかしら」

冬紀はそれ以上何も言わなかった。

「ボ、クが……暴れちゃって。」

『ああ……。今、監督は、どんな顔してるのかな……。』

氷介の説明を、簡単にまとめると、こうだ。

まず、冬紀たちが自分たちをはやしたてるので、自分がカツとなつて暴れてしまった。

しばらく取っ組みあってから、そばにあったバットをふるってしま

い、自分を助けようとした弟に、誤ってぶつけてしまった……。

瞳監督は、その説明をフルスピードで整理した。

『つまり冬紀くんたちは、ちょっとはやし立てただけ。

弟の氷也くんは、兄を助けようとしたけど、逆に怪我をしてしまった。

悪いのは、全部自分。』

「ふ、うつ、うつっ！　っ……」

氷介は床を見つめたまま、喉の奥から広がる息苦しさを、表に出すまいと、ひとり格闘していた。

「氷介くん、あなた、自分が何をしたかぐらい、わかってるわよね。」

「……はい。」

「では、冬紀くんたちに何を言うべきか、

氷也くんは何を言うべきか、わかってるわよね。」

氷介の心の中で、いろいろな思いが増えていく。

それとともに、口の中にも広がる息苦しさが、彼の心を締め付ける。氷介は一層唇を強く噛んで、それに必死に耐えようとした。

「は…、はー」 「話をするときは、ちゃんと相手の眼を見て話さない！」

ビクッ！！ ガラガラガラガラッ。

その声に圧倒された冬紀たちが、退いて机にぶつかる音がした。

氷介は慌てて怯えたままの顔を上げ、瞳監督の眼を見た。

『え？　なんで、そんなに…　悲しそうな眼を…』

氷介には知識足らずでわからなかったが、その眼は、哀れみの眼だった。

「…さあ、冬紀くんたちに言うべきことを、言いなさい。」 「…はい。」

氷介は固い表情のまま、冬紀たちに向き合った。

「…打ったりしちゃって、…ごめんなさい。」

氷介は内心ホッとしながら、お辞儀ついでに下を向いた。

瞳監督は、視線を冬紀たちに向けて、言う。

「あなたたちも氷介くんたちに、どれだけ酷い事を言ったか、よく考えなさい。」

「うん…まあ、俺達も悪かった。ごめんな。」

氷介は首を横に振る。

「ううん…ボクが、あの位で怒る…ボクがいけなかったんだ。ゴメンね。」

冬紀は頭を下げたままの氷介に戸惑いながら、瞳監督のほうに顔を向けた。

「…これからは気を付けると約束するなら、もう行きなさい。」
「は、い。」

冬紀たちの足音が完全に遠ざかって、氷介はそこから動かない。
瞳監督が近づいても、微動だにしない。

「氷介くん、いつまでそこに立ってるの？」 「…ボク…動け、ないんです…」

必死に考えをめぐらしたり、
立っていることに疲れている間に、体が硬直してしまったのだ。
棒立ちになって肩をいからせ、小さく震えている。

「氷介くん。」

ポン。 瞳監督は氷介の狭い肩に手を乗せた。

「えっ?! か、監督…」 「リラックスしなさい。息を深く吸って…はいて…」

「う、うまく、できません…」 「それなら、力を抜きなさい。」
「…そんなことしたら、駄目なんです。」 「…嘘をつくのに、疲れたんでしょう。」

「うっ……」

瞳監督には、顔を上げた時の彼の表情で、嘘だとわかったのだ。
氷介は否定する。

「嘘じゃ…ないです。」

「事実なら、何故堂々としてないの？」

嘘を告白するときは、最初から謝るつもりでいるときよ。

だけど…あなたの眼は、苦しそうで、辛そうで…哀れだったわ。」

「？ あ、あわれ…？」

「自分の力では、どうすることもできなくなってしまった心…
それを見たとき、他人はそのヒトを、哀れと言うのよ。」

瞳監督はしゃがみこんで、氷介の戸惑った顔を見上げた。

「あなた、冬紀くんの謝り方…どう思った？」

「えっ、ど、どうって…。心が、こもってないように思えました

…」

—うん…まあ、俺達も悪かった。ごめんな。—

氷介は頭を下げていたので本人の顔は見えなかったが、
形だけの、皮肉っぽい謝り方に聞こえた。

「……あなたのゴメンねも、心なんかこもってなかったわよ。」

「……」

「あなたの言葉は、必死にその場を切り抜けようとするようだった
もの。」

悪いのは全て自分にして、自分だけ苦しんで傷つけて、
何故嘘を貫き通そうとするの」

『…だって…ボクが、ボクが嘘をつかなきゃ…』

「うーっ…さっ、さよならあっ!!」

ダッ!!

氷介はここに立っているのに耐えられなくなり、
無理矢理足を動かして走り出し、職員室を飛び出した。
一度も後ろを振り返らずに、玄関まで突っ走った。

「ちょっと、話しはまだ終わってないわ。」

瞳監督はそう言いながらも、追いかけようとはしなかった。

「今は…自分の心を整理させることが大切、よね…
氷介くん…今までで一番優しい子で、今までで一番悪い嘘をつく
子ね。」

6・後悔と、雪崩と。

『ボクは嘘つきじゃない、ボクは嘘つきじゃない、ボクは嘘つきじゃない、ボクは嘘つきじゃー』

ガクッ、

「ーあっ」

ズサササーッ！

片足がつまづき、廊下で転んでしまった。

震える手で上半身を起こすと、自分の顔に触れてみた。傷一つなく、血も流れていない。

「痛い…のに、なんで…血、出ないんだろう…」

ボくら…双子なのに。 同じなのに…」

『ボク、何で嘘ついたんだろう…。 ボクが怒られるだけなのに…』

気が付けば、血の代わりに透明な涙が流れた。――真実を言うべきだった。――

『冬紀くんも氷也も、自分のやっちゃった事とちゃんと向き合って自分の中のそれを直すべきだったんだ…』

「でも…ボクは、もう…嘘ついちゃった。 だったら…突き通すしかーハッ。」

カッン、コッン、カッン、コッン…

廊下のどこから響いてくるのかわからないが、誰かが自分のもとに近づいている…それだけはわかった。

氷介は再び廊下の冷たい床に手をつけて、耳を隠していた髪の毛をどけ、音をしっかりと聞こうとする。だが、よくわからない。

音が何重にもなって響き、前からも後ろからも、誰かが来ているように思えた。

『な…なに？ 誰…？ かー、監督…？ 怖いよ、怖いよ…』

カツン、コツン、カツン、コツン…。足音は大きくなり、止まった。

氷介は顔を地面に伏せたまま、震えている。その足音は、一言、こう言った。

「氷介…??」 「――！ おっ―、お母さあああああああ あん！…！！」

氷介は自分の安心できるヒトのもとへ飛び付くと、こらえきれずにわんわん泣いた。

「ど、どうしたの??」

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

ボク…嘘ついちゃったんだ…。

ボク悪い子なんだ！ ごめんなさい、ごめんなさいーい！」

氷介はただ自分を責め続け、誤り続けた。

車の後部座席でひとり、氷介は眼を赤くしてうつむいている。

「…氷介、自分がやったって、嘘ついちゃったんだよね？」

「……違うよ…ボクが、やったんだもん…。」

「あら？ さっき泣いてたときは、嘘ついたーって、泣いてたじゃない？」

「……。」

氷介はズボンの裾をぎゅっと握る。何も答えようもしない。

「…なあ氷介、誰かをかばうってのは、とっても勇気がいることなんだ。」

自分だけが怒られるかもしれないし、

かばわれた方は恩なんて感じないかもしれない。」

「…。」

「でも、その誰かを守ることはできる。 そうだよな？」

氷介の脳裏に真っ先に氷也の顔が浮かび、

その後に冬紀と、名前も知らぬふたりの顔が浮かんだ。

「…うん…。」

「……けどな？」

かばわれた方は、そのまま自分の間違いに気づけないままになっちゃうんだ。

それが間違いとわからずに、そのまま大きくなったら、…可哀想だろ？」

氷介は想像してみた。

中学生になった — になれるかどうかは今別として — 自分たちを。冬紀と氷也が、さっきのようにケンカをしている。

暴れ、物を壊し、泣きながら暴行をやめない、自分の弟の姿。最終的に、誰にもかまってももらえず、それが暴力につながり、孤立していく…。

氷也は今でも力が強いから、成長したら、もっと強くなるだろう。それに引き換え、自分は身体が丈夫とは言えない。

もし追い詰められ、もし生きることが嫌になった氷也を…

…ボクの力なんかで、止められるのかなあ？

「――！！ 嫌だアッ！！！！！！」

車は、一台ぼつんと走っていた道路の真ん中で、停止した。

「嫌だ…氷也…、氷也あ…」

雪江は小声で、柚彦に耳打ちする。

「氷介はまだ6歳よ？ 可哀想の意味を、まだよくわかってないのよ！

それで、ちょっと想像しすぎちゃったみたいね…。」

「ああ…、悪かった。」

氷介は物分かりがよくて頭もいいから、つい…、

まだ6歳だってことを忘れちゃうんだよなあ…。」

ふたりも一瞬忘れていた。 氷介と氷也は獣――狼の耳を持つことを。

そして、陸上哺乳類の中でも、狼は最も聴覚に優れた部類であることを。

バン！

氷介は窓ガラスを力一杯叩いた。 氷也だったら割れてたかもしれ

ない。

「早く走って！ 何で止まるの走って！ そしたら車の音で聞こえないよ！」

車は止まったばかりのエンジンを起動させて、またぽつんと一台走り出す。

「…氷介。」 「ボクに何も言わないで！ 大声出したりして…ごめんなさい…。」

柚彦は片手で頭をかいた。

『うーん…だれだって、最初は間違えていいんだ。 そこから学んで行くんだ。』

って意味だったんだが…。 やっぱり、難しすぎたか…』

カンカンカンカンカンカン…。

氷介は、受付で部屋番号を教えてもらっている両親を置いて行って、盗み聞きした部屋番号をもとに、階段をフルスピードで駆けあがっていた。

途中で氷介の純白の髪や耳を見てギョツとするヒトもいたが、そんなものは目に入っていない。

そして、203と書かれた部屋の戸をガラガラッと開け放った。

「氷也！」

そこには、ベッドの上で横になっている、弟がいた。

頭には包帯がぐるぐるに巻かれ、左目には眼帯、所々にシップや絆創膏が貼られているが、本人は意外にも元気そう
だ。

氷介は泣きながら――うれし泣きだろうが――ベッドに駆け寄る。
さっきまで暗い気持ちだったのが嘘のようだ。今はすっかり笑顔
である。

「よー、にいちゃん。笑えなくてごめんな。顔、動かし過ぎる
と痛エんだ。」

「へーきへーき！でも、手は握ってもいいよね？」

「…はあ、好きにしろ。」「ふふっ、ありがとー」

氷介は氷也の手を握ると、そばにあった椅子に腰を落ち着けた。
ガラガラッ。

「あっ。こらー氷介！勝手に走ってっちゃダメでしょー！」

「氷也。元気かー？」

「父ちゃん、母ちゃん！」「うっわー、凄い包帯の量ねー。――」

！！その眼は大丈夫なの？！

「うん。まぶたが切れてたけど、大丈夫だってよ。」

「そうかー、よかったよかった。最初見たとき、心臓が止まるか
と思ったぞ。」

とたんに氷介と氷也は、不安そうな顔になった。

互いに繋いだ手を、ぎゅっと強く握った。

「お父さん、」 「母ちゃん。」 「ん？ なあに??」

不安げに、手は痛いくらいに握られる。

「……俺たちのこと、ちゃんと守れよな！」

「ボクらを置いて、どこか行っちゃったりなんか、しないよね!？」
「!！」

『…氷介…氷也…。』

この子たちは、大人になった時…世界に受け入れてもらえるのかしら？

………ううん。 ふたりとも、わたしの大切な可愛い双子。』

「ああ。ちゃんと守るから、そんな不安な顔すんな。 な？」

柚彦はふたりの頭を、くしゃくしゃになでた。

「…。 そうよ、お父さんの言うとうりよ？ どこにも行かないわ。」

ふたりの顔は、ぱあっと向日葵のように明るくなった。

「本当？」 「約束してくれる??」 「ええ、約束！」

『誰が何と言おうと、絶対この子たちを守ってみせる…。』

以前のわたしと今のわたしは違う…今は…なんでもない、ただの母親よ!』

「あのー、息吹、さん？」 「へ？ あ、はい！」 「あのー、院長が相談があるそうです…」

入ってきた看護婦は、氷介と氷也を見るなり「失礼しました。」と退室して行った。

「何でしょうね？」 「うん…。 ちょっと行って来るな？」

「えっ。 そん—」 「あ、そうだ氷介！」

柚彦は、氷介と氷也の繋いだ手を優しく握った。

「大切なヒトの手は、絶対に、何があっても、離しちゃダメだぞ。」

「…父さんは、この後離すじゃんか。」

「はははっ！ よーしよし、戻ってきたら、また握ってやるさ。」

「入院できないって…どういことですか?!」

「あの子の頭の骨には、ヒビが入ってるんでしょう?!」

院長に別室へと呼び出されたふたりは、激怒していた。

「ですから、ギプスで固定しておけば、自然にふさがりますし…」

バン！ 柚彦が机を拳で叩いた。

「それは何度も聞きました。」

わたしは、何故氷也が入院できないのかを聞いてるんです！」

「そうです！ わたしたちに、わかるように説明してもらえますか？！」

「いや、そ、それはですね…」

院長は冷や汗をかきながら視線をそらして説明を始めた。

「その…他の患者さんやお客様から、苦情が出ていまして…」

「苦情?! と、言うのは？」

「子連れの方からは、『この病院は動物病院なのか』、と…
足を折られた男性の方からは、『気味が悪いから出て行かせろ』、
と…」

打撲した男の子からは、『ノミが入って治りが遅くなる』、と…
夫人の方からは―」

バン！

「もういいです！ あなたは、わたしたちの子供を差別するんです
ね?! まあ酷い！」

「こっちだって院長としての首がかかってるんですよ！」

あなた方には申し訳ないですけどね、
狼みたいな子供ひとりのせいで客が来なくなったら、経済面が危ぶ
まれるんですよ！」

とうとう、ふたりも限界だった。

「もうたくさんだ！ 髪の色が違う、耳の形が違う！
それだけで治療してもらえないような病院には、親として入院さ
せたくないですね！」

「入院？ とぼけた事言ってるんじゃないですよ！ とつと子供
を連れて帰って下さい！」

ガラガラッ。

「あ、やっと戻って来てくれたー！」

「しりとりしてまっていたんだぞー！ で、何の話だったんだ？」

「氷也…。あなたね、頭の骨にヒビがあるの。」 「…え？」

「でもね、お母さんここの病院じゃなくて、他の病院で診てもらおうと思ってるの。…いい？」
「い、いいけど…。」

雪江は力なく、にっこり笑った。つらそうに、悲しそうに…

「あー、よかった♪ じゃあ、今から行くわよー。
氷介、氷也と一緒に歩いてあげて。」

「う、うん。」

『あれ？　なんか…ふたりとも、変？』

「お父さーん、行かないのー？」

「え？　あ、ああ。ごめんな。よし、行こう行こう！」

柚彦は、そう言って氷也をベッドから起こした。

「氷也、歩ける？」　「おう。でも、早く歩くなよ。」　「わか
ってるって♪」

再び車は低いエンジン音を響かせて、走り出した。

「雪江、いくツテはあるのかい？」
「あら、忘れたの？　わたしたちが人工授精してもらったヒトよ。
ほら、この名刺に住所も書いてあるし。」

雪絵が柚彦に古い名刺を見せる。

「でー、あ！ 違う違う右右！」 「うおおおっ?! っと。 ふー、危ない危ない。」

「ねえねえ母さん。 その病院、ヒト、いーっぱい、いる?」
「ううん。 たぶん、お医者様はひとりしかいないわ。」

それに小屋みたいなとこだから、病院って知ってるヒトはあんまりいないわよ。

どうして?」

「病院って、ヒトがたくさんいるんだと思ってたから…」

「ふふっ。 そうじゃないところもあるーの。」

「じゃあさ、その医者先生は、どんなヒトなんだ?」

眼帯をいじりながら、氷也が言う。

「うーん…わたしとお父さんが会ったときは、すっごく若かったわよー。」

「へえー、何歳ぐらい?」

「んー、そうねえ…。 …あら?」

ゴゴゴ…ゴゴ…。 地面がゆっくりと揺れ始め、異変に気づいた氷介が口をはさんだ。

「おかあさん、これ…なあに? 地面がゆれてるよ…」

「ええ。 この檜ヶ岳ではめったにないのに… |地震?。」

雪の積もった崖の上で立つ、震える少年の姿があった。

見るからにサイズのあっていない大きな赤いコートに身を包み、一台の車を見下ろしている。

ルーテだ。

「もう兄さんには任せておけないよ……僕が最初っから、こうすれ
ばよかったんだ。」

いちいちもうめんどくさいよ……。あの双子も、母親もー、消
し去ってしまおう。」

ルーテは両手の中から、光球を作りだしていく。
恐ろしくも思える、中世的な笑みを浮かべている。

「クスッ。巻き添え喰らう方は悪いけどー」

車の中で、夫らしい人は笑っていた。

「白虎くーん、フェンリルくーん、竜王くーん。
僕の偉大な魔法に、力を貸してくれないかぁーい？ あの人たち
を……殺すために、ね？」

ゴオオオオオ……！

雪は恐ろしい唸り声を上げ、三体の神獣が、そこに姿を現した。
ルーテは白虎の首を優しくかく。

「よおーしよーし。さて……」

ルーテは光球につつまれた右手を、車に向ける。

それと共に、神獣たちの身体も光りだしーカァッ！

突然ルーテの身体が鈍い光に包まれ、長い銀の髪は吹雪に揺れる。

「ーこのくらいで死ぬかな？」

ゴゴゴゴゴゴ……ズバァアアア……ッ！！

大地は大きく揺れ動き、縦揺れの地震が崖全体を襲う。
ルーテは雪崩が多発する眼下をバックに、神獣たちに振り向く。

「ありがとう、皆。あとは僕だけで大丈夫。はい、報酬のお肉だよー♪」

そう言って、ルーテは空中から肉の入った袋を三体に渡す。
三体は満足したように、吹雪の中へ消えて行った。
ルーテはそれを見届けると、再び眼下を見下ろした。

「フフフフフ…さようなら、バケモノさんたち。」

激しい揺れで雪が滝の如く、一台の車に降りかかった。

バアアッー。

雪が崩れて、崖を大河のように流れていく。
その大きな白い影を見て、雪江と柚彦は驚愕した。

「きゃあーっ！　あなた！　雪崩よ！」

幼い双子はまだ、雪崩を知らなかった。
ふたりはその影を見ても、ぽかんと見上げているだけだ。
氷也が
小声で切り出した。

「氷介…なんだ、あれ。」　「わかんない…」

『なんか…白くて大きな……鳥みたいだね。』

驚愕する両親をよそに、ふたりはとても落ち着いている。
雪崩の恐ろしさを知らないのだ。

「こ、こりゃあ大きい…！ おいふたりとも！ しっかりつかまってるよ！」

「えっ？ どうしてー」

キキイイイーッ！ ヴウーンー

氷介の返事を聞かないまま、車は猛スピードで雪道を走りだした。
タイヤのチェーンがガチャガチャとうるさい。

車の後ろ座席で、双子が戸や前席に頭をぶつける。

「いてっ！」 「うあっ！ ちょっと、とうさん！ どうしたの！？」

雪はどんどんスピードを上げて振りかかる。

雪江は席にしがみつきながら、窓越しに大きな雪崩を見た。

「もうこんなに近くにー！ あなたっ！ もっとスピードを上げてえっ！」

「無理だ！ これが限界ー あっ…。」

キイイイーッ！

車が高い音を立てながら急停止する。

双子は腹が鞭で打たれたように吐感がしたが、シートベルトに命拾いした。

「ぐえっ！」 「ふあっ？」 「ちょっとあなた！ 何止まってる

のよ！ 早く―」

「いや…もう進めない。」 「え…？」

車から2、3mもしないで、道は途切れていた。

縦揺れの激しい地震のせいで、もろい部分が崩れたのだ。小さな石ころが、パラパラと音を立てて落ちていく。

「そんな―…どうすればいいの…？」 「…。」

柚彦と雪江は窓の外を見てみた。

崖の頂上からここまでかなり離れているのが幸いだが、雪崩は相変わらずスピードを増す。

『後ろはもう雪で埋まつてるし…前は地面が崩れていてわたれない…』

『わたし…一体どうしたら―』

「おかあさん？」 「とーちゃん？」

氷介と氷也が身を乗り出して、暗い二人の顔を覗き込んだ。ただそれだけだった。それだけだったのに―。ふたりの表情が、一瞬無になった。

「氷介…氷也…」

雪江はなにも言葉を発さない。

『…ダメね、わたし。 自分の子供が目の前にいるのに。 夫とあなたたちと、一緒に死のうなんて考えちゃった。―バカね。 わたし、あなたたちの…』

雪江の顔は、微笑みを取り戻した。同時に柚彦へ顔を向ける。自分の夫はぼかんとした顔をしている。

「ゆ、きえ…？」 「あなた、…わたし、最後に本当の自分に戻るわ。」

「ええっ！？ だ、ダメだ！ だって、そんな事したら君がー！
！」「…？」

氷介たちには雪江の背中で見えなかったが、柚彦の先の言葉は、雪江の口で止められていた。

「…っ！」 「大丈夫よ。 あなたがいるもの。 だからこの子たちは生きていける。」

氷介と氷也には、自分の母が何を言ってるのかわからない。雪崩は車まであと15m。雪江はふたりに向きあい、抱き上げた。

「わっ。 えっ？」 「お、おいかあちゃ…」
「ふたりとも…お母さんにしっかりつかまってなさい！」

雪絵の眼には強い意志が宿っていた。彼女は昔の彼女とは違う。強い、母だ。

「雪江…。 僕が代わりになるから、お前がこのふたりを―」
「まだそんなこと言ってるの！？ 時間が無いのよ！
それに…あなたには、無理。 わかってるくせに…」

雪江の頬に雫が伝う。雪崩は車まであと10m。 ついにふたりにもよく見えた。

「ーっう!？」

『鳥じゃ、ない。』 『雪だ…!』

ふたりは今になって、自分たちに生死がかかっていることに気付いた。

「お、かあさああああん!!」 「わあああああーっ!!」
「大丈夫よ…。 わたしはあなたたちの…お母さんですもの。」

雪崩は車まであと5 m。 双子は涙を流し始める。

『いやだ…死にたくない…死にたくないよお…』
『病院行くんだろ? 何で死ぬんだよおお!』

「雪江…僕には、できることは、ないのかい…?」

雪江はその問いかけに悲しそうな顔をして、首を一回、縦に動かした。

「でも、わたし―」

雪崩は車まであと、0 m。

―ドバアアアアッ!!

大量の雪が小さな車に襲いかかり、圧力に任せて窓を破る。
双子の泣き叫ぶ、悲しい叫び声と、雪の暴れる音だけの世界―。

『わたし…。 今よ!』

—カアッ!

双子には目がくらんで、何が起こってるのか分からなかった。

「—!? あ、あなたっ! ダメよ—」

「でも—君をひとりで死なせられない!」 「—…、」

『…本っ当、バカな夫。 自分の子より、わたしなんかを—』

—…ボクはそのとき、聞いたんだ。

それは、とてもかすかな声で、本当にそう言ったか、わからなかったけど…。 —

「わたし……………あなたと一緒にになって、なんにも間違ってたなかった。」

—ズバアアアアアアアアアアッ ヒュッ— ガシヤアアア—

—夜…。

さく、さく、さく…

ルーテが雪をブーツで踏むたび、軽い音が響き渡る。

そして雪崩がおさまったあの場所に降り立ち、

自分の身が落ちないように、崖の下を覗き込む。

「うっ!?!」

途端にルーテは顔をしかめて、眼下の粉々になった車から目を離し

た。

雪の間からは、固く手が繋がれた、女性と男性の腕が見える。どちらも、赤く染まっていたが。

「うええ…木端微塵だな。」

魔女が死ぬとき、周りにいたものはすべて枯れ死ぬ…

【狼の双子】も、例外じゃあない。

にいさんが直接殺さなかった理由が、わかった気がするね。自分の命は惜しいもの。」

ルーテは立ち上がると、大空へ飛び立った。

その顔は穏やかで、どこか何かを期待しているようにも見えた。

「兄さん…。これで、少しはきつと―」

早朝―。

黒髪の少年が昨日のあの事故を知らずに、陽気に歌いながら、あの槍ヶ岳を登っていた。

「おーれっのたあーいしよーうっやーまひーっーじーっ♪

あー…即興とかマジわけわかんねえ…」

買い物帰りらしく、エコバックの中には新鮮な野菜と牛乳が見えて
いる。

しばらくして、あの雪崩があつた所にたどり着いた。

巨大な雪の山が、少年の前に立ちはだかっていた。

「ん？ うわっ！ なんじゃこりゃあ！？ やっぱ行きと帰りで違う道通るんじゃないかったなー。」

しかし、戻るにしては後ろの距離が超長えし…」

少し思案した後、少年はあたりをキョロキョロと見渡した。

「よ、よおーし…誰も見てないな…。せえーのっ！」

ブワアンッ。

少年は空気抵抗など無いかのように、5 mはある雪山を軽々飛び越えた。

「へっへーん！ こんな、軽い軽ー いっ！？」

着地しようとした少年の前に、地震でできた巨大な割れ目が目の前にあった。

「ぎゃあああーっ！！」

少年はあわてながらも腕を伸ばすと、むこう側の割れ目のへりを掴み、

そのまま前転をするようにむこう側へ渡り切った。

「ふーっ。 久しぶりにこんなやつたけど、少し運動神経落ちてきたか？ —うえっ！？」

着地と同時に、少年の靴の裏に柔らかい感触がした。 おそろおそろ下を見ると—

「は…？ なんだ、こいつら… —！！」

少年はそれを、知っていた。

「ま、まさか…!! ……。」

少年は口にエコバックをくわえると、
両手でそこに転がっていたものを拾い上げ、また静かに歩きだした。

氷介は真っ白な空間に一人、取り残されていた。

『ここは…どこ? まるで…雪の鳥の中みたいだ…』

氷介はそのやわらかい地面に、やっと安心できた顔で、顔をうずめた。

『ふふつ。 あったかいなあ…。 お母さん…』

そうつぶやいた途端、突如としてその空間は真っ暗になった。
やわらかく、暖かかった地面も、今や堅く冷たくなっている。

『―!? お、かあ…さん? うっ―』

突然息が苦しくなる。 喉を締め上げられているようだ。
顔を上げた時、暗い空間の奥に、
赤いコートを着た母が背を向けて立っているのが見えた。
氷介は、そのヒトにむかって駆けだした。

『はあっ、はあっ…おかあ、さあん…っ! 苦しいよおっ…』

氷介はすがりつくように、母の足にしがみついた。とたんに、寒気が身体全体に走る。

『―！？ ひゃ、あつ。』

母の足は、氷のように冷たくなっていた。よく見ればその赤いコートは湿っていて、鉄の匂いがする。

『おかあさん…？ ねえ、ボク苦しいんだ。どうすればいいの？』
『…フフフフフ… そーお、ねーえ…』

母の声は高く響き、歌うような口調だった。そして、振り返った顔は―

『この世から消えたら苦しくないわよオ？』

母の眼はかっと見開かれ、皮膚はただれて変形し、顔全体は深紅だった。

『ひ、いいいっ！』 『おいで…わたしの子…』
『いやあつ！ やだよおつ、お母さん！ ねえ、どこにいるの？』
『おかあさあああん！！』

氷介の頬に涙が伝う中、一筋の光が差し込んだ。

『大丈夫だ。お前は夢を見ているんだ。』 『えっ？ …だ、だれ…？？？』

「何にも怖い事は無いよ。」 「う……っ、」

そう言っただけ毛布をかけると、その顔はまだつらそうだったが、取りあえず激しい寝言はおさまった。

「ふー……。まさか、あんなところでこいつらと再会するとはなあ。」

黒髪の少年はキッチンに椅子を持って行くと、作り置きしていたシチューに火をかけた。

『にしても……何であいつらはあんなところで倒れてたんだ？

片方にはギプスが巻かれてたが、どうやら中の骨にひびがいつて
るみたいだし……』

「……まあ、おいおいわかってくるさ。一応寝かせてあるし、起きたら話を聞けばいい。」

少年は自分で自分に言い聞かせる。だが、それでも心の靄はぬぐい取れなかった。

『なんだ？ この、不安な気持ち……』

さっきの寝言が伝線した？ んな訳ないよな。だとしたら……あ。

』

少年はシチューを混ぜていた手を止め、ソファアの上で寝ているふたりの子供に視線を向けた。

「ここにこいつらがいる事がバレたら……ヤバくね？」

少年の背筋に、ぞっとする寒気が襲った。

氷介はかすむ目を無意識に開けると、パチパチと燃える団炉が視界に入った。

身体には暖かい毛布がかかっているのがわかる。

『ん…ここ、どこ…？』

たしか、雪の鳥が襲いかかってきて、車が落ちて…何で生きてるんだろ。』

一瞬そんな考えが頭をよぎったが、すぐに大切なヒトの事を思い出した。

『―あつ、氷也は！？』

氷也は自分の左足にしがみ付いていた。

車ごと落ちた時、相当怖かったのか、氷介の足から離れようとしな
い。

「うう…ん…」 「…よかった。 ひとりかと思っちゃった。 …
ん？ クン…。」

何かスープのような香りがしてきた。

『いいにおい…なんだろう？』

氷介は氷也に毛布をかけ直し、

左足をそおつと離してから、おぼつかない足取りでソファアから降りた。

自分たちがいた場所―それは、木製の小屋だった。

二階建てらしく、目の前には大きめのテーブルがあり、その奥にはキッチンがあつて―

「――！！」

ドキッ―。そこで氷介は心臓が止まりそうになった。

キッチンの前で、少年がいいにおいをするそれを混ぜている。

少年は自分たちより年上らしく、11、2歳くらいに見える。

氷介はその場に音もなくへたり込んでしまった。

その顔は、これから起こることもわからず、ただ恐れていた。

胸に手を当てると、心臓はドクドクと跳ね上がっている。

『ど、どうしよう…ボクらがここにるのがバレたら…死んじゃう！？』

氷介はソファアへ戻ると、震える手で氷也を優しく起こそうとした。

「氷也、起きて…氷也あつ。」 「んっ、くあゝゝあつ。」

氷也は堂々と伸びをして、大きな声であくびした。

予想はしていたが、氷介は大慌てで弟の口を塞いだ。

『ぎゃああーっ！ 氷也のバカあゝゝっ！！』

当然少年とそんなに距離は無かったため、起きたのかと振り返った。少年は明るい笑顔で、高く澄んだ声で話しかける。

「ん？ ああ！ なんだもう起きたのか―」

「いやあーっ！」

やめてくださいごめんなさい何でもしますから殺さないでください
あーい！！」

氷介はそれだけ早口で言うのと、また床にへたり込んで大泣きを始めた。

不思議と、涙は少しも出てこない。

「えっ！？ ちょっと、何も取って食おうってわけじゃ―」

「んゝ、うるせーなあ氷介。 なんだよゝゝ」

氷也が頭をかきながら起き上がり、一番に視界に飛び込んできたのは―

少年が兄の肩を掴み、泣かせている姿だった。

氷也の顔が無になって、少年を睨みつけた。 その視線に気づいた少年はあわてる。

「お前…何やってんだ？」 「あっ！ いや、これはそうゆうんじやなくて―」

「ふっ、ええええゝんっ！ やめて下さいゝっ！
ここにいた事は誤りますからあゝっ！！ ふえゝっ…」

ピキッ。 氷也の眼ががらりと変わる。

「…あゝ？」 「うわあ！ 思いっきし敵を見る眼えしてるし！」
「どうゆうつもりか知らねえがなあ―」

氷也が毛布を振り切って立ち上がる。 少年は何かヤバい事が起きる予感がした。

そしてそれは、当たった。

「次やったら後はねえぞこのクソジジイ!!」 「のお~~~~お
~~~~っ!」

ドカアッ!

氷也の勢いよく振りかざした足が、少年の背に命中し、壁に強くぶち当たった。

少年が動かない。

「ふえっ、ふえっ、んっ…」 「おい、大丈夫かー? あいつなら、ほら。」

そう言って氷也は少しへこんだ壁と、その下に転がってる人影を差した。

「ふえ…? う…ああああーっ! な、氷也! 何やってるのー!?  
」 「え? ダメか?」

氷也は自分が何をしたかが、全くわかっていないようだ。

「ダメーだーよっ!」

『もう駄目だ…泣くんじゃなかった。 明日は我が身だよ、氷也…』



## 7・小さな一家の大黒柱。

「この愚か者！」

―パシィーン！

「うぐっ―っ」

ルーテは実の兄に、叩き飛ばされた。右の頬がヒリヒリと痛む。

「痛たた…に、いさん…なんで、殴るんだい？」

ルーテは、訳がわからない、と言う顔で兄を見上げた。

兄の顔は怒りに満ちており、ここから笑いそうにはない。

「何故…なぜ、僕が何も言ってないのに殺したんだ！」

「だって…結局殺すはずだったんだろ？ だったら別に―」

「お前は―、そんな考えでいたのか！？ 馬鹿じゃないのか！」

「えっ…？」

ルーテの眼が大きく見開かれる。

『嘘…なんで？ だって―』

「だって兄さん、あの双子は削除するって―、殺すって！」

ルーテの発言に兄は多少焦りと困惑を見せ、眼をそらした。

『ふんっ。 今だ。』

「まさか兄さん、自分の言ったことも忘れて僕を殴ったんじゃないだろうねえ？」

「っ……。」

『簡単にいえば矛盾してるんだよ。 兄さん』

「…勝手に殴って、悪かった。」

「そうじゃないよ。 なんで僕が殺したからって怒ったのさ？」  
「!! 　　そ、それは…」

『なにを言うのをためらってるんだい？ 　　—!! 　　まさか…いや、それは絶対じゃない。』

それだけはある得ないよ、僕もバカだなあ。』

「実は、わたしは—」

『だって兄さんはいつも、全ての命を第一に—』

「あの双子が普通に暮らせないか、考えてたんだ。」

バチンッ！

今度はルーテが頬を叩いた。 そのまま背を向け、涙を流して飛び去った。

「にいさんの…バア————カッ!!」

兄は空を見上げながら、悲しげに頬を押さえた。

「ルーテ…。 ごめんな。 誰だって、ぶたれたらこんなに痛いのに」

に…」

『ん？　なんだ、何処だここ。　まーっくらで1cm先も見えやしねえ。

あ、そーか！　これが死後の世界って奴かー！

そっかー、おれなんかしんねーけどあいつに蹴り飛ばされて死んだんだな。

いやーそれじゃあ凄いキック力…』

「起きて下さい、起きて下さい！」　「う…ん」

生きてたー。　目の前にはおろおろした表情の少年がいる。

となりには、おれを蹴ったあいつ。

「あっ！　よかったあ…生きてた…」

純白の髪をしたその少年は、焦りと喜びが困惑したような微笑みを見せた。

自分の顔じゅうに絆創膏が貼られてるのがわかる。

おそらく壁にぶつかった時に怪我して、こいつが貼ってくれたのだろう。

おれはなるべく、怖がらせないよう、笑顔で話しかけた。

「えーと、お前がやってくれたのか？」　「ひゃっ！　えっ、あっ、そ…そうですけど…」

とたんに純白のほうは怖がって一步下がるし、もうひとりの金毛も睨みながらも後ずさりする。

「来・ん・な！」 「い、ごめんなさい…殺さないでくださいーっ！」

『ど、どうしよう…起きた時のこと考えてなかったよ…。  
ボくら、こんなだもんね、【狼の双子】なんだもんね…。  
絶対殺されちゃうよおーっ！』

ビクビク震える双子の姿は、母を巣で待つ小犬のようだ。

『うわ、やっべー…。 おれ怖がらせてどーすんだよ！ しかも嫌われてるし…。』

けど…こいつらをどうすればいい？ 親はどこにいるんだ？』

「お、お前ら…家に、帰らなくていいのか？」

「えっ？ いや…あの…ボク、どうして助かったんですか？」

氷介は思い切って、聞いてみた。

「ど、どうしてって言われてもなー…」

倒れてたのを運んできただけだし、他に、特には…」

「あ…そ、そうですか…」

氷介の顔が暗くなった。 少年はとたんに慌てふためく。

「いっ！ いやあ！

えー、きよ、今日は外はすげー猛吹雪だし、おれんち泊まってくか？」

「ー！ 断る！」

氷也が兄の手を握ったまま、立ち上がった。  
その目は、なにかを恐れているようだった。

「行くぞっ、氷介！」

氷也は氷介を無理矢理立たせると、少年に踵を返して玄関扉に走った。

氷介は何が何だかわからないまま、腕を引っぱられている。

「えっ？ 氷也、っちょ、痛いよお！ あっ。 あ…」

氷介は少年の方を振り返ると、その口は「お、おい？」と言っているようだった。

氷介は首を少し曲げて、ぐいと縦に一回振った。

「あ、ありがとうございます―」

バァキーン！

氷介の続きの言葉は、流れ込んできた吹雪の音に掻き消された。  
氷也はなにかの恐怖に駆られたまま、頭突きで木の戸を破った。

「うわあっ、ぷっ！ お、おい―！ 外は危ないって―！」

慌てて外へ飛び出すと、双子の影は、吹雪の中に消えていた。  
少年はすぐさま頭を引っ込めると、急いでテーブルで戸の穴をふさいだ。

そして、疲れた様にソファ―に倒れ込んだ。

「ふーっ。 …もう、知らねーぞー…。」

『あー、でも、狼は吹雪にまぎれて狩りをすることもあるんだっけ。走ってったあいつの眼…まさに、狼だな。』

【狼の双子】 ってのも、頷けるわ…。」

「まあ今日は、も、寝よ。」

少年はそのまま、深い眠りについた。

氷也はそのままどんどん吹雪の中を進んで行く。  
はためくマフラーを押さえながら、氷介が声を張る。

「ちょっと…氷也っ！ 腕が取れちゃうよおっ！ 離してってばあー  
わっ？ やっ！」

ドサアッ。 腕を離されると、あっけなく氷介は宙に舞い、雪の上に落ちた。

「あい、たた…雪って意外と固いなあ…。」 「氷介、バカだな。」  
「え…。」

氷也は呆れた顔で、まだわからないのかと首を振った。

「泊まってくかって、あいつー  
おれたちが寝てる間に殺すつもりだったかもしれねーじゃんか！」  
「え？ あ……………そ、そっか…。ボクラ、【狼のー】  
「だからっ！ 家帰るぞ！ 父ちゃんたちに叱られる！」

氷也はまた氷介の腕をぐいと掴むと、さっきよりゆっくり歩き出した。

『氷介の、バカ野郎。 自分からそれ口に出してどーすんだ!』

「あ…氷也、あれ…。」 「んっ?」 「今日行った…」

吹雪もおさまってきて、目の前に姿を現したのは―道立氷洞病院だった。

「ってことは、あっちが家だね!」 「よし、でかした! さっさ  
と行くぞ。」

吹雪で埋まった細い道の先に、自分たちの家があった。 氷介が軽く戸を叩く。

「とうさーん。」 「…開かねえなあ…。」 「寝ちゃったのかなあ…。」

「バカ。 まだお昼だぞ?」 「お昼と言えば…」

クウ……。 ふたりの腹が同時に鳴る。

「おなかすいたねえ…」 「ああ…。 あっ! 俺、庭側の扉開けっぱなしだったんだ!」

「本当? じゃあ、庭に回ろう!」 「そうだな。」

雪の積もった裏庭のドアは、カギが開けっぱなしになっていた。 氷也は勢いよく戸を横にずらす。

「かあちゃ! あれ…?」

そこはコタツのあるリビングで、電気は付いてなく、両親の姿もなかった。

部屋にあがって奥を探すが、やはりいない。

「いないねえ…あれ？　なんだろ、この包み…」

氷介は机の上から、自分たちの背中程もある包みをふたつ、見つけた。

「なんだろう、これ…」

「んなことはどーでもいいだろ！　それより…かあちゃん、買い物か？」

「そんな　―あっ！」　「ん？　どうしたんだ？」

氷介は怯えた顔で、震える口を動かした。

「あの…雪の鳥が落ちてきた後…目が覚めたら、

あの家にいて…母さんたちは、いなかったんだよね…」

「あ…。」

ふたりはカギをかけてから、玄関から槍ヶ岳へと向かった。

ふたりが走るたび、地面の雪が細かく舞った。

「氷也あ…は、速いって！」　「…っ」

氷也は氷介と手もつながずに、雪崩の起きた場を目指した。



『もうっ。 足が滑るかもしれないから、危ないのに…ん?』

氷介の視界に、崖の下が入り込んだ。 人工的な、青いボディが…

『今、なにか…横切った?』

氷介はその場に立ち止まり、眼下に眼を細めると―

「っう!?!」

ドシャア…。 何かが雪の上に崩れ落ちる。

「んっ? おい、どうした。 氷…」

振り返ると氷介は、その場にへたり込んでいた。 何事かと氷也が駆け寄る。

しゃがんでその顔を覗き込めば、白い顔がいつもより、余計に白く見えた。

「おい…?」 「あ…ああ、あっ…うう…」

氷介がいつもとうって変わって、弟にしがみ付いてきた。

「!?!? なんだよ! へばりついてんじゃねー…?」

氷介は震える手で、崖の下の指差した。

「した…?」



「ボクは泣かないよ。だって…お兄ちゃんだもん。」 「―っ！？」

氷介は穏やかな顔で続ける。

『ああ…そうか。 ボクはお兄ちゃんだから…自分の弟を―』

「…父さんと母さんがいなくても、ボクが氷也を守るから。」 「………バカ、野郎…」

「だから、ボクはもう泣かない。 だから氷也は―」

氷介はこの日から、心を閉ざしてしまった。

両親を失ったショックか、それと同時に自分に与えられた使命からか、

あるいはその両方か。

「ボクの分も、泣いてくれる？」

「うっ…！ うわああ…っ！ バカ野郎、バカ野郎、バカ野郎―っ！！」

氷也のダムにたまった涙が、一気に外へ溢れ出す。

氷介はこの日以来、涙を流さなくなった。

ああ、そう。 一滴も。

「なん…だと…！？」

空中に浮く彼の眼下には、双子らしき兄弟がとぼとぼと家路へ急ぐ姿が見えた。

ルーテは顔をゆがめてその場を引き返す。

「くそっ！　くそっ！

…あれほどの雪崩で尚も生きているなんて…少々見くびり過ぎたのかな…。

…兄さんに、報告しよう…。」

『ふん。　よかったね兄さん、死んでなくて。　僕はまた殺す方法、考えなおしだよ…』

そこでルーテは自分にはっとした。

「って！　何で僕がまたわざわざ考えなきゃいけない訳！？  
に、兄さんの為じゃない事だけは確かだっ。

ちっとも自分の最終的な考えを教えてくれないから、自分で考えてるだけだ！

うん、うん。　そうだ、そうだよ僕。　別に、…。」

『また褒めてもらいたいとかじゃ…ない。』

はれた頬を押さえながら、ルーテは兄のもとへと急いだ。

キィ…カチャン。

氷介と氷也は無言のまま、静かに家の戸を閉めた。  
氷介が家の中にあがっても、氷也は動かずに、静かに涙を流してい

た。

「氷也。寝ててもいいよ？　もう、夕方だし…。」「そう、する…。」

氷介はこくんと頷くと、「おやすみ。」と言った。

その瞬間に氷也は顔をそむけて、2階へと猛スピードで駆けあがっていった。

「…ふう…。これから…ご飯はボクが作るのか…6歳で？」

氷介はあごに指をあてて笑った。

「アハハハハ。　って、笑えないかあ…。　ふふ、ふ…。」

『お父さんとお母さんがいなくなったって、ピンとこないなあ…。いまにも買い物を済ませて、ただいまーって出てきそうだもん。でも……』

氷介は眼が熱くなってきたのに気付き、慌てて手の甲でこすった。

『もう、帰ってこない…。　いないんだ。』

「さて…と、ご飯っていつもどうやって炊いて―」

ふと目に留まったのは、家に帰って来た時に見た、自分たちの背中程もある包み。

「なんだろうな、これ…」

氷介はそれをひとつ取って降ろすと、茶色い包装紙を破いた。　そ

れは――

「え？」

こげ茶のカバンだった。

両肩にかけて背負えるタイプで、茶色の包装紙の上だとあまり見栄えしない。

もうひとつの包みにも、そっくり同じ物が入っていた。

「なんだろうな……宅急便？」

そう言って同封されていたカードの裏をひっくり返すと―― 見覚えのある字があった。

「ひょうすけへ もうすぐしょうがくせいだね。

というわけで、おかあさんがかばんをぬってあげたよ！

6ねんかんだいじにつかうのよ？ がんばれ、おにいちゃん！――

「プレゼント、カード……？」

氷介の手が理由もわからずに震える。

「でも、あんまりがんばりすぎて

おかあさんをしんぱいさせちゃ、だめだからね！ おかあさんよ

り」

他の母親が見たら、少し母親らしくない手紙だと思うかもしれない。だが、氷介は他の母親なんて知らない。

知らないから――こんなに震えが止まらないんだろうか。

「おかあ、さん…おかあさん…おかあさん…おかあさん！」

水介は無意識に、母の最期の手作りプレゼントを抱きしめていた。それは…「邪悪学園」入学前日のことだった。

「おかあ…さん、っ…！」

―翌朝。 昨日の吹雪とは打って変わって、暖かい光が氷也のおでこにあたる。

「うう…ん、…」

ベッドの上の枕は、ふかふかで柔らかく、使い心地が良い。

だが今は、使い心地が悪かった。

じぶんの涙を長い事吸ってたもんだから、少々ごわごわしている。

ゆっくり体を動かすと、頭にギプスが付けられていたのに気づいた。

そういえば、昨日付けたばかりだ。

いろいろなことが一度に起こり過ぎて、一週間は前のことのように感じる。

「…に、い、ちゃん…」

ボーっとした状態のまま1階へと降りると、兄はソファに突っ伏して寝ていた。

腕には、地味なリュックを抱えたまま。

氷也に気づいたのか、もぞもぞと身体を動かす。

「あ…氷也？ おはよー…」 「兄ちゃん…その、リュックは？」  
「あ…」

氷介はうつむいて、ちょっと考えてから発言した。

「学校用にいいリュック、あるかなあって。 これでいいかな？」

「えっ？ あ、ああ…」

「ふふ。 そうか、よかったね…」 「は？」

「あっ！ 氷也！ パンやくから早く食べて！ 時間が！」 「はあ…？ …7じ50ぷん…」

氷介がガチャガチャと棚からパンを探す音が止まった。

「パン…焼かなくても、食べれるよね…？」 「…おい。」

大きな池と広い庭に囲まれた豪華な白い豪邸…

長野県では、もうすっかり春の兆しがさしていた。

この豪邸に、今年の4月から新一年生になる少女がいた。

窓際の小机に肘をついて、窓の外を他の茂み見つめる女の子…彼女である。

広い部屋には白い大きなふかふかしたベットが、強すぎるくらいの威厳を放っている。

その部屋の戸を、ひとりの老人が押しあけた。

「フウカお嬢様、そろそろ出発の御準備ですよ。」

「あら、もうそうなのですか？ わかりました〜♪」

その嬉しそうな笑顔を見て、執事はホッとして微笑んだ。



「喜んでいただけは何よりです。  
最初はここを離れるのは嫌だと大変ぐずっていらっしやっただのに  
…」

少女はその問いかけに微笑んで、部屋をゆっくり歩きながら語った。

「だってわたくし、この家から出るのなんて、生まれて初めてです  
もの。」

わくわくしますわ!」

「それは良かったですねえ。 ふふふ。」

「それに、わたくしもわたくしなりに調べたのです。」

「おお? 何を調べられたのですか?」

「ふふつ。 パソコンです。 見て下さいよ、この記事!」

そう言って少女は、机からコピー紙を数枚取り出した。  
とたんに執事の顔色が変わる。

「こ、これは…!」

そこに書かれていた内容は――

「『狼の双子・町の不良グループを蹴飛ばし頂笑』!」

悪を成敗する、素晴らしい行いです! わたくしはぜひ、お会い  
したいのですよ」

執事の驚愕する顔も知らずに、少女は待ち遠しそうに窓の外を眺め  
た。

「【狼の双子】さんとやらに。」

執事は自分が仕えている旦那さま、緑谷総次郎の部屋へ来た。

「という事です…」 「そうか…しかし、今さら決まった事は変えられん。」

「しかし！ 御嬢様がもし出会われたら―」

「心配は無い。 あいつは凄いだろ？ こういうときのためにあいつに教えたんだ。」

総次郎は座っていた椅子から立つと、微笑んだ。

「護身術を。」

「氷也、教科書は？」 「持った。」 「筆箱は？」 「持った。」

「あと上履きは？」

「だあーっ！ 持ったっつってんだろーが！！」

いい加減に出かけたい氷也は、氷介に怒声を浴びさせた。

「で、でも、準備はちゃんとしないとダメだよ。」

「だからって確認6回もする必要ないだろ！？」

「そ、そうかなあ…？ じゃあ、これでおしまい。」

氷也の気が変わらないうちに学校行こうか。」

氷介はそういいながら戸を開けた。 昨晚の吹雪のせいで、雪の量は増していた。

「さっ！ 行こう、氷也。」

「あ！ ちょっと待て。聞きたいんだけど…やっぱニューガクシキってやつは…」

「……………親とか、来るのか…？」

「あ…うん、くるらしいね…。」 「…やっぱ氷介だけ行くってできねえ？」

氷也の眼はまた涙がにじみはじめた。

「だ、大丈夫だよ！ 母さんの作ってくれたリュックがあるもん。…これで、ずっと一緒にいられるよ。」

「だけど…」 「…ボクが付いてるだけじゃあ、やっぱり不安？」

「そうじゃねえ！ けど…」 「…わかった。」 「え？」

氷介は晴れ晴れとした顔で氷也の手をひつつかむと、そのままずん歩きだした。

「え！？ ちょっと、氷す…」 「ボクがもっと氷也を安心させてればいいんだね！」

「そうじゃねえーっ！…！」

探検隊の一団が、吹雪く雪山を探索していた。

「お、おい、お前。」 「ん？ 何だよ。」

「前にここ通った時…あんなところに、岩があったか…？」

そう言って男は、少し上の崖を指す。

「気のせいじゃないのか？」 「しーっ!! お、おい…今…動いたぞ。」

「…熊？」 「ぎゃああー!! ひ、ひとまず降りるぞおー!!」

「げえっ! こっち降りてきて…わあああ!!」

一団は叫び声をあげながら、なるべく早く下山していった。

ノシッ…ノシッ…ノシッ…ノシッ…。

降りてきた熊は耳をかきながら下山していく。

「チョッ、何だよあいつら。俺はただ下山する道を聞こうとしただけなのによお。」

…まあ、足跡が消えないうちに降りるとするか。」

熊は大きなコートの金具をカチャカチャ言わせながら下山する。

『いやー、やっと町に帰れるぜえ。半年も遭難したのは久々だなあ。』

…雪男かクマに間違えられたのは一緒か。』

「丁度今が4月…か。 …よおし、会いに行つてやるか。」

熊は尚も下山していく。

愛する我が子に会うために。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3522q/>

---

双子の狼 ？

2011年10月8日15時42分発行